
ハートナイフ

雨原媽流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートナイフ

【Nコード】

N5897F

【作者名】

雨原媽流

【あらすじ】

二つの国の血を持って生まれたシェリハは、外見は外国人なのに英語が話せないという世間の誤った見解に悩まされていた。そんな折、ひとつの絵本と出会い、その中の登場人物に自らを投影し、共感を覚える。近所にその絵本作家がやって来るのを知り、少年は迷わず走り出す。絵本作家との出会いが少年を変えていく…。

01 少年、夢と出会う

おとうさんはお月さま。おかあさんはお星さま。
なのに…

僕は銀色の猫。

みんな不思議がる。

変な目で見てるのも知ってる。

触れないけどいつもいつしよにいる——僕の宝物。

物心ついた頃から両親は共働きで家を空ける時間が多かったから、
自然と妹の世話を見るようになった。

父に似て、外見からして僕は米国人だ。
妹だってそう。

金髪に青い目、長い睫毛。
けれど父と違って僕は英語を話せない。
筆記もまるつきりだめ。

外見がこんなだから、『話せて当たり前』というのは勝手だと思う。

母は日本人、
父は米国人、
生まれたときからずっと住んでいる国は日本。
ただそれだけ。

妹とは7つも年が離れているから、小さな頃はよく本を読んだ。
中でも僕を夢中にさせた本がひとつだけあって、妹もその本が大好きだった。

『RISE』はシリーズになっていて、絵も文も一人の女性が描き、書いているらしかった。

その女性というのは絵本作家で、何とも優しいタッチのイラストを描く人。

それからはお小遣いを使わずに貯めて、著者であるSEINAの児童書を買って漁った。

ある日、近所の美術館でSEINAの個展が開かれていたのを知って、足早に小さな美術館に向かった。

珍しく天井が高く、壁には花をモチーフにしたステンドグラスが美しい。

準備中なのか、黒髪にTシャツ・ジーンズ姿の女性がポスターを貼ったり、絵本を並べたりしている。
スタッフの人だろうか。

「あ、あの……」

おそろおそろ声をかけてみる。
目に飛び込んできた表紙に書かれてある作者の名前を見て愕然とした。

SEINA。

愛読している作家じゃないか？

「あら、坊や。一人できたの？嬉しいわ」

想像していたよりもずっと若くて、着飾らないラフな女性だった。きつと子育てが落ち着いた主婦が何か新しいことをやりたいと書き出した…なんてのは勝手な偶像だけれど。想像なんてモノはあてにならないと思い知った。

「俺、あなたのファンで、個展があるってきいて…」

「最近の子供は雑誌ばかり読むっていうけど、坊やみたいに本を読んでもくれる子もいるのね」

「坊やって…俺お姉さんとあんまり年変わらないように見えるけど」
そう言うとな彼女は目を丸くし、次の瞬間に大きく笑ってみせた。

なにかおかしいことを言ったのだろうか？

少年ならではの稚拙で純粋な発言に女性はくすくすと笑い、口を開いた。

「お姉さんだなんてお上手な坊やね。

こう見えても私には娘がいるのよ。

まあ、坊やよりは小さいけどね」

「そうなんだ？ 見えないなあ…」

「ふふ、あなたの将来が楽しみだわね。

で、私の作品のどれを好きになってくれたの？」

「RISE。」

言葉では難しい表現を初めて心の中で覚えた。

友達に自分はどこか人と違うことを指摘され、悲しみの底に落とされるのだ。

それが理解できないからただただ泣くばかりで。

悲しいのに美しく、残酷に思える世界なのにポジティブで希望に満ちている。

自分は兎なのに両親は兎ではなく、周囲の兎から異常であることを指摘され、兎である主人公は自分のために旅に出る。

自分を知るために。

英語が話せない日本生まれのハーフであるシェリハ少年は自分と重ね合わせ、とりこになった。

口許に笑みを浮かべ、色紙を取り出して彼女は紙の上にペンを走ら

せた。

彼女から見ればただの落書き、きっとスクラップの価値だろう。

月明りに照らされた兎が闇の中に立っている。

ペンの色は黒なのにひどく優しい気持ちになるのはなぜだろう。

「坊や、お名前は？」

「シェリハ。Sherihaだよ」

そう言うとき彼女は完成した色紙に《Sheriha》と描くと、すつと手渡した。

喜々とした声を上げ、目を輝かせる少年を見て、彼女は少年の中に自分が子供であった頃を思い出した。

そして自分の仕事は何の為にやっているのか。

まだ何色にも染まらない子供の想像力を養う手伝いをする事。
そして夢を与えること。

「シェリハ、可愛いファンに出会えて今日の私は上機嫌だから、受け取ってもらえる？」

「うん、すごく嬉しいよ！」

「あなたくらいの年ではまだわからないかもしれないけれど、大人になったら夢見ることを忘れてしまう人もいるの。」

“夢”を見ることは素敵なことなのに、辛いことになってしまった…
余裕がなくなっちゃってね」

眉を下げ、微笑む姿は悲しみの色を映していた。

まるで絶望の淵に立たされたように。

世界で独り残されたように。

外を見るとオレンジに染まった空が姿を見せていた。

もうじき月と星が姿を見せる頃だろう。

ずっとその場にいたかったが、シェリハが時計を気にしだしたのでそろそろ帰さなければと思った。

当の本人は帰る気はないらしく、SEINAの顔をじっと見つめている。

「シェリハ、もう夕方だから帰りなさい」

「えっ…」

「もう遅いし、妹さんがいるんでしよう？
なら早く帰らないとね」

シェリハは頬を膨らませてSEINAを上目遣いに見た。

甘えればまだいれると思ったのだ。

だがそれは叶わず、夢の瞬間となってしまった。

だが心配させたくはないので、仕方なく帰る事にした。

「わかった。また会えるよね？」

「会えるわよ。シェリハ、頑張つてね」

「うん！」

屈託のない、まるで太陽のような笑顔を浮かべてシェリハは帰っていった。

この思い出の一欠片が青年となるシェリハ少年の心に深く焼き付けられた。

02 灰色夢人（前書き）

シェリハ少年が大人になり、入社数年後のお話です。

02 灰色夢人

あれから少年は大人になり、真っ白な雪から雨が降り出す前のグレー色の雲に姿を変えた。

自分では若いつもりではいるが、三十路前。
世間一般の基準では若者ではない。

大人になる間の時間の中で様々な経験をしてきた。
楽しい事もあれば、辛い事も。

望んだ職業に就き、入社も叶った。
その点は夢が叶ったと言えるだろう。
しかしどこかやりきれない。

本来は自分をプロデュースしたいのに、企画とデザインがマッチせず、他人に提供してばかりだ。

幼い頃SEINAに言われた言葉。
今では少し薄れてきているような気がする。
夢を見るだけではどうにもならないこともある。
実際それを感じたのは最近になってからだ。

恋人で同僚だった絵舞^{えむ}はセクシー路線のカジュアルブランドを展開、
瞬く間に女性の支持を得、店舗を構えるまでになった。

それまでは身近な存在だったのに、雲の上の存在になってしまった。
そんな彼女の隣にいるのが辛くなって、自分から手放した。

彼女に非があつたわけじゃない。

仕事は完璧にこなすし、手足は長く日本人離れした端正な顔立ち。さばさばしていて媚びることなく、好印象を与えていた。

ただひとつ不満があつたとするならば、ああも強気でさばさばしている女性が恋ひとつでああも弱々しく、意志が無くなってしまふこと。

失望を覚えるとともに、成功した彼女が悔しかった。

結局のところは支えが欲しかったんだろうなあ…とは関係に終止符を打った時、初めて気が付いた。

それからは目標を見失っている。

ある日、そんなことをほぼ同時期に入社した友人・エアリにぼそりと漏らしたら、彼女も同じように悩みを抱えていた。

「え？…あんた別れたの？

まああのコ仕事できるし、美人だけど恋愛に依存しすぎていうか…おかげで睨まれてたし」

「そうだったのか？」

「波風立てたくなかったから言わなかったんだけどね。

…あ、お姉さんあんみつ追加ね」

コーヒーカップを傾けながら、レースがふんだんにあしらわれた黒

のキャミソールに、口に百合の花を一輪銜えた猛々しい虎が描かれた白の着物を羽織った女―エアリは溜め息を付いた。

彼女は日本人の祖父がいた影響もあってか、日本の文化をこよなく愛する親日家だ。

本来ならスーツ着用を義務付けられているのだが、彼女は入社以前から

「スーツには個性がありません。―楽しくありません。

…というわけで私は私のスタイルを貫かせて頂きます」という発言が社長の心を射止め、和服を仕事着にしている。

イギリスで生まれ育ったらしいが、日本語の発音も日本人に近く、違和感がない。

日本に興味を持ちだし、上京まで踏み切らせた情熱と日本での生活が長いせいか。

さっぱりしていてさばさばしているから、異性と言うよりかはお互い同性の友達のように気が合うので、絵舞が恋人だったころはよく勘違いされたものだ。

でも彼女の方が4つだけではあるが年上。

友達よりかは姉弟のようなものだ。

「そういえば…エアリはどうなんだ？」

「ああ、男の話？どうでもいいわよ、そんなのは。

今の私に重要なのはブランドのイメージにぴったり合うモデルを見つけることなんだから」

お目当てのあんみつを味わうことに夢中で一瞬の間ができたが、ペ
ろりと皿を平らげるとエアリは頬杖をついた。

「どんな子がいいんだよ？」

「そうね、一言で例えるなら雪を連想させる女の子…幼くも大人っ
ぽくもない女の子。」

自分でも探してみたんだけど見つからなくてね。
どこぞのグラビアアイドルみたく胸ばっか強調された子とか、かわ
いいけど表情がない子とかね。モデルは完璧すぎてだめ…もっと素
朴で親近感のある子がいいのよ」

…そんな完璧な女性なんているわけないだろ、と言いたかったが、
ごくりと飲み込んだ。

自分が思い描くイメージモデルが見つからないなんていうことは決
して珍しいことではない。

企画もデザインも重要な要素ではあるが、ブランドの顔がなければ
意味はない。

そのネックがあって、長年温めてきたブランド展開を諦めた。何よ
りインスピレーションがわからない。

『これだ』と思うデザインが浮かばない。
そういうものだ。

「あ、そうそう。」

実は音輪^{ねわ}デザイン専門学校の生徒がやるグループ展があるってDMきたのよ。

私そのOBだね」

「専門学校もこっちで出たのか」

「そうよ。…で、もしかしたらいいインスピレーションが得られるかもしれないでしょ？」

私たちみたいに凝り固まった考えじゃなくて、若い人は新鮮だわ」

黒の光沢が美しいキルティングボストンバッグからDMを取り出して、シェリハに手渡した。

シェリハはDMを見つめ、懐かしく思った。

入社してからは学生の作品なんて久しく見ていない。もしかしたら創作のヒントを貰えるかもしれない。

「悪いな、わざわざ」

「いいわよ、別に。」

お互いいいヒントが得られるといいわね」

白いうなじが見えるくらいの明るいブラウンに染め上げられた短髪を飾る髪飾りを揺らしながら、その場を去っていくエアリを見送り、

シェリハはDMを鞆の中にさつと直した。

03 カラーガール

エアリにDMを手渡されてから、一週間が経過していた。

グループ展は夕方までしかやっていないそうなので、仕事帰りに行くのは難しく先延ばしにしてもう土曜日。

日曜の夕方グループ展は終わってしまう。

都合よく土日は休みだ。この機会を逃せばもうないだろう。

（眠いな…）

そんなことを思いながらも、手の平で頬をぺちぺちと叩いて、熟睡しきった体を叩き起こした。

カーテンの隙間からこぼれる光が目元に現れる睫毛が作り出した陰をより濃いものにする。

エアリとは違い、スーツを仕事着にしているからか、ゆったりとした黒のUネックから覗く首筋は露出を嫌う婦人のように白い。

日本人にはあまり見られない大きな瞳や人形のような睫毛、美しく整った顔立ちは一ひどく中性的だ。

それに反して男性を誇張する隆起した喉仏や山脈の如く程よく浮き出た血管、目立ちたがりなラインを描く鎖骨は男性的だ。

洗面台に立ち、水道の蛇口をひねり、衣服が濡れるのも構わずバシヤバシヤと顔に水を浴びせる。

雑に水を拭き取りながらてきぱきと準備を進めていく。

布団を畳み、パンを嚙り、音がないのは寂しいのでテレビをつける。平日のように焦ることなくくつろげる休日…悪くない響きだ。

外出用の服に着替えようと洋服箆笥を開く。

形も色も似たり寄ったりなものばかりだ。

一週間のうちほとんどスーツを着て過ごしている。そのためか合わせやすいモノトーンカラーばかりを選んでしまう。

他には防寒対策にマフラーやジャケットを身に着けるくらいで、目立たないモノトーンカラーばかりだ。

だから自然と箆笥の中身も地味になってしまう。

加えて言えば、新調することもほとんどない。

オフの日にはしか着ることがないから今ある分で事足りるし、あつたとしてもワンシーズンに何枚か買い足すくらいだ。

木々や人並みに隠れるような色はまるで自分を表しているかのようだ。

社会に入れば嫌がおうでも協調性を身につけなければならない。

独り枠の中に放り出されれば、厳しい視線を送られる。

でも人に合わせて生きていれば非難を浴びることはない。
だからモノトーンを身に纏う。

おかしな話だがこれもひとつの防御術。

満たされない思いはあるが、身を守る気持ちには勝てない。

これが大人になり、経験を積み、生まれたての真っ白な視野を狭くするということなのだろうか。

黒のキーネックカットソーとビンテージブラックのストレートデニムパンツを手に取り、身を守る防具とも言つべき洋服を身に付けた。

秋の風と、昼寝でもしたくなる太陽の暖かさが心地いい。

人間に猫可愛がりされているらしい、ふくよかな2匹の猫が気持ち良さそうに肌を寄せ合っている。

つがいの小鳥たちは色鮮やかな紅葉が咲き誇る枝に止まり、愛を囁き合っている。

その間に子供が割って入ったりして楽しそうだ。

紅を纏った並木道を抜けると、例の専門学校に着いた。

正門からお邪魔して普段は教室と使っている場所、会議室など学校に存在する空間すべてにデザインと名の付くものが展示されていた。

子供を楽しませる絵本。空間のイメージを崩壊させるインテリア。

オリジナリティー溢れる絵画。

なんでもござれだ。

専門学校の生徒は10代から40代までと幅広い。だからこそ魚のように脂がのっついていて勢いがあり、斬新で新鮮だ。

学生時代は教師やOB、生徒同士と刺激を受け合っていたが、会社に入るとそれはなくなってしまった。

得た知識と経験だけで仕事をする、マニュアルの中にある単語しかもたない、ビジネス優先の人間。

そんな中で楽しみや充実、やり甲斐を見つけることはできない。

社会人になった今では得られないものがここにはある。
だから当然顔も緩む。

すべてのフロアに足を踏み入れ、学生たちの作品の完成度に圧倒されながら現役の自分でさえ持ち合わせていなかったものを思い知らされ、シェリハの目は点になっていた。

そろそろ帰るか…と思い、来た道に戻ろうと振り返った瞬間、大きな木製パネルが目に入ってきた。

（全部見たはずだが…あれは見てないな。
あんなのあったか？
しかし…）

その木製パネルは四季のように色鮮やかな色彩が使われていて、濁りが見当たらなかった。

描かれていたのは雲の上で居眠りする小さな猫。

背景には電信柱も建造物も何もない。

大海のような青の上に綿菓子に似た、ふわふわとした雲。
無垢な顔をして寝ている猫。

何の変哲もないシンプルなイラストだったが、一肌のような温かい色使いに見惚れてシェリハは絵に近付いた。

本来ならば子供向けの絵なのだろう。

大人になった自分が楽しむものではないが、なぜか幼少の頃から心惹かれて止まないのだ。

言葉では分からないが、視覚ならば大人も子供にも通じるものがある。

荒んだ心を癒してくれる至上の癒しだ。

「ねえお兄さん」

服の裾をグイと引っ張られ、目線を下にやると自分よりも遥かに小さな少女がいた。

大きくもなければ小さくもない瞳に日本人独特の団子鼻。

双肩にかかる黒髪が風に揺れて華やかに艶やかに踊る。

色白の肌に体のラインをごまかせないピタツとしたパープルのター

トルカットソーにグレーのパーカーを羽織っている。

足が細いのか、黒のスキニーパンツは少し余裕があるようでサイズが大きいようにも見える。

小柄で折れそうなほど華奢な少女は無邪気な微笑みをこちらに向けた。

04 動かぬ花

「君は…？」

「お兄さんずっと私の絵見てたから。目立つから気になったの。」

絵本好きなの？」

まだあどけなさが残った表情だ。

しかし子供と断言するほど幼くはない。高校出たてといったところだろうか。

幼い外見からは想像もつかない、彼女の絵の色は母性のような包容力のように見えた。

「ああ、昔から絵本のお世話になってたんだ」

「今も？」

くすくすと少女は笑った。

大人が絵本の世話になるなど、一般的には珍しい話だから仕方ない。

彼女は風に揺れる名もなき花のような笑い方をする少女だった。

決してクールを装っているわけではないのだが、仕事や恋愛で余裕が奪われてしまうことが多くなったから自然と笑顔が減った。

だからそう感じるのだろうか。

「私も絵本好きなの。だから絵を描きたくてここに入ったの。将来は絵本作家になりたいなって」

「夢を持つのはいいことだよ。

目標のために頑張れるから、成長することができる。

君は本当に絵が好きなんだね。

情熱が伝わってくるよ」

「ありがとう！

こんなこと言ってもらえたの初めてだから嬉しいな……」

彼女と何時間話し込んだだろうか。

仕事や将来のこと……。

様々なことを話し、他愛もないことで盛り上がった。

彼女の名は梨星^{りせ}と言った。

父親は気ままに世界中を巡る放蕩画家、

母親は梨星を出産したのがきっかけで絵を描くようになった絵本作家。

そんな環境で育ったからか、彼女は自然と絵に興味を持ち始め、絵

を描くようになったらしい。

高校に上がるまでは趣味として絵を描いていただけで夢はなかったが、職業体験で保育士として働いたときのこと。

このときに作った自作の絵本が素直な園児に気に入ってもらえたことが火付けとなり、本格的に絵を学びたい、と思うようになったようだ。

そして高校卒業とともに今の専門学校に入り、来年卒業することになっているらしい。

「時期的には就職はもう決まってる頃だよな？
いい所はあったかい？」

「受けたんだけどなかなか…経験者優遇とか、すぐ使える人を欲しがってる会社ばかりなの」

「きつとどこも切羽詰まってるんだよ。」

「一から教えるよりも即戦力になる人間の方がいい。」

「俺も昔はそう考えてた」

「昔？シェリハ…社会人になって何年なの？」

「今29。」

「専門学校に入学したのは高校卒業と同時に。」

「20で専門学校を卒業し、一年間はふらふらとしていたが翌年から就職活動を始め、23歳には無事就職することができた。」

だからキャリアは6年ということになる。

社会人になって何年かと尋ねられるほど、自分は年相応に見られていないのだろうか。

彼女はシェリハの年齢に驚いていたのもまた彼にとって衝撃的だった。

少年とまではいかないが、童顔であることは自負している。

年齢的に若く見られることは喜ぶべきなのか残念に思っべきなのか複雑な所だ。

「29歳に見えないねえ。社会人になったばかりかと思った」

「口のうまい子だな。」

君の方こそ高校生くらいにしか見えないぞ？」

「童顔で結構ですよーだ」

風船のように頬を膨らませても怒っているようには見えない。

対話していてふと笑みが零れるほどだ。

無知だからこそ無垢で素直。

屈折の文字を知らない。

外見に反して芯が強く、思いの外といったは失礼だがしっかりしている。

大袈裟なりアクションと喜怒哀楽を表す声や顔の表情こそ子供のようだが、内側は立派な女性である。

大人の女性の中に奇を好む子供心を住まわせている。
しかもストレートすぎるほどの直情型。

子供は初めて目を開いて見る世界に驚きと戸惑いを隠せない。
あれやこれやと知れたがる本能が新品のノートに視界のデータを文字にして刻み付ける。

奇を好む心は武士ならば刀のようなものだ。
どうでもいいこと、関係ないことでも知識として蓄えられる。
知識が深まれば深まるほど、引き出しが増える。
そんな彼女ならば蛹うごから蝶になることができるだろう。

初々しい梨星を見ていると少年時代を思い出す。
稚拙で世間知らず、考えが甘くてひねくれ者。

他人の助力がなければ生きていけなかったのに、背伸びをしてばかりだった。

けれど時間が教育してくれたのだ。
独りでは何もできない、と。

べらべらと話しているうちにグループ展の終了時間が近付いてきたのか、梨星の友人らしき女性が梨星の名を呼んでいる。

「あ、もう終わりみたい。」

今日は来てくれてありがとうね！楽しかったよ」

「それは俺の台詞だ。」

今日は為になつたし、楽しませてもらったよ」

そう言つて自社の名刺を差し出すと、

「きゃああ！ホンモノの名刺だあ……すっこい……！！」と名刺ひとつで盛り上がる梨星を見てシェリハはどこまでも彼女は子供だなあ、とつくづく思った。

05 始動

休みも明け、また憂鬱な日々が始まる。

会社のデスクにはなぜかにやにやしたエアリが待ち受けていた。
今日は大輪の薔薇が咲くベビーピンクの着物に白のキャミソール、
相変わらず派手なことだ。

「おはよう、シェリハ。いい収穫はあったかしら？」

「その顔からしてお前は収穫があつたらしいな」

普段はクールで涼しげな目元に笑みで皺が寄る。
整った顔は歪みに歪んでいたが、その皺は大人の艶ある女であるこ
とを強調しているようにも見える。

「そうなのよー！モデル探す前に学校に足を運ぶべきだったわ。
女の子から人妻までよりどりみどりだし」

これでプロジェクトが一步進みそうだわ」

「お前の眼鏡にかなう絵に描いたようなモデルがいるとはなあ……ど
んな子なんだ？」

シェリハが尋ねるとエアリは素直に答えた。

小柄で童顔。

将来は絵本作家希望。 何より重要視していた、作られたようなモデル体型ではなく…細過ぎでも太過ぎではない平均的なスタイル。

名前まで訊きはしなかったが、シェリハの脳裏に浮かんだのは梨星。

（まさかそんな偶然はないだろう…）

そう思い込ませて頭の中の梨星の姿を消し去った。

春に入社したばかりの新米の社員が用意してくれた茶を啜りながら、席に着いて書類を広げた。

「ねえ、あんたは？」

「何が？」

「行っただんでしょ？」

「ああ…行っただよ。」

素晴らしいものを見たんだ。

学生クリエイターにも宝石が埋まってるんだな」

口元を緩め、シェリハは微笑した。

母の胎内を彷彿とさせる安心感を与えるような、絵を描く少女。

外見からは全く想像もできないほどの慈愛と母性、包容力を感じずにはいられない。

収穫があつたとするならこの一件だけだ。

「そうよねえ… 私たちもうかうかしてられないわよね。
さーて、仕事仕事」

どうやら例のモデル候補が見つかったことで、エアリの創作意欲はいい具合に湧き出ているようだ。

彼女と違って地道かつ小さな企画しか仕事のないシェリハは時間を気にする必要はないので、休憩時間をゆつくり過ごすことにした。

いつもの行きつけの喫茶店・T i g R a b。
ティゲラフ

シェリハは何を食べようか悩んだ時はここで食事を摂る。

父と共に力を合わせ、共働きをしていた母が作ってくれた料理の味に近い、味噌汁を始めとした和食が正しく家庭の味なのだ。
その味に貧しくも温かい、若かりし日を思い出す。

年に一度くらいしか実家には帰らないが、元気でやっているだろうか。

母と父の姿を思い浮かべていたら、じんわりと熱いものがこみあげてくる。

熱を冷ますために水をごくりと飲み干した。

食事を終え、時計と相談しながらシェリハは会社へと戻った。

昼からは社会人になってから付き合いが長い、阿柴と長年暖めてきた雑貨の企画に関する打ち合わせに入るようになっていた。

とはいっても兄弟のような関係なので、気を遣うこともない。

会議室を貸し切って久々に彼と対面する。

阿柴は元はシェリハの先輩だったが、独立のため退社したのである。

「久しぶりだな、シェリハ」

「俺の方こそ…お変わりないようで安心しました」

短いストレートの黒髪と同色のスーツが白い肌を際立たせる。

不要な肉を削いだ肢体と冷たい光を忍ばせた眼は正反対でアンバランスだ。

だがほほ笑むと雰囲気は柔らかくなるから不思議だ。

「今回の企画なんだが…できるだけ早く形にしたいと思う。なんせ何年も暖めているからな。

小規模にする予定は今も変わらない。

その分コストも削れるから制作物も限定したい」

「新婚向けの雑貨でしたよね？」

「そうだ、既に子供がいる家族も対象にしても構わない…いやむしろ子供目線がいいかな」

「ああ、なるほど…阿柴さんとこの子供さん確か―1歳になったばかりですもんね？」

シェリハがにやにやしながら言うと、阿柴は頬を染めて父親の顔になった。

阿柴は話を切り替えようと主婦向けの雑誌や資料を机の上に置いた。

しかもただの量ではない。
山積みになっている。

「阿柴さん…これは…」

「これだけあればいいデザインが出来ることだろう。
お前は独り者だから見せた方が早いと思ってな」

「はあ…新手的嫌がらせですか」

「はは、俺も準備して来るさ。
期限は…お前も仕事があるだろうから、まだ先になるが12月はどうだ？」

「わかりました。用意しておきますね」

颯爽と会議室を出て行く先輩を見送りながら、暦は秋から冬へとゆ
っくりと移る。

06 マルフリーフェ家の宴

社会人にとっては季節が移り変わるなど、気にも留めないくらいあっという間だ。

仕事に終われて春から冬に背を向け、知らない間に1年は終わる。

木々は雪化粧を纏い、子供はプレゼントをねだり、恋人たちはより一層ぴたりとくっついている。

華やかなクリスマスツリーを見る度に、日本人はどこか変だと思ってしまう。

イベントごとに敏感で、外国から入ってきたものも文化・習慣と最初から自分達の物だったかのように祝うからだ。

(…まあそんな俺も日本人か…)

ショーウィンドウに飾られたマネキンを横目にシェリハは苦笑いした。

ファアの付いたコートやブーツ、色彩と宝石たちが冬を特別な物と意識させる。

そう今月で今年は終わるのだ。

とはいえ一人暮らしのサラリーマンであるシェリハにはそんなことはどうでもよかった。

今日もそのために会社帰りに街中をうろついている。

阿柴から資料を渡されたものの、これといったものが見つからない。

大人はスタイリッシュで機能面を重視する。

色もモノトーンカラーが無難である。

だが子供はどうだろう。

男女の違いで好みは大きく分けられるし、好奇心旺盛な彼らは目新しい物すべてがターゲットだ。

つまり予想不可能。

(うーん……………)

資料だけではどうもイメージを掴みにくい。

かといって店に入るのは何となく恥ずかしい。

よく考えたら男性より女性の方が詳しいんじゃないか？

人気がある物の多くは女性に支持されている。

それに今回のターゲットの半分は女性だ。

思い立ったが吉日、シェリハは携帯を取り出してアドレス帳を開いた。

そして迷う事なく電源ボタンを押した。

ディスプレイには上雪香^{かみ ゆきこ}の表示。

「あら…シェリハがかけてくるなんて久し振りじゃない？
今日は雨が降るわね」

「はは…母さんも言うじゃないか。
まあ当たってるんだけど」

「それはそうとどうしたの？
年末年始はやっぱり忙しくて帰って来れなさそう？」

鈴が鳴るような、でも甘すぎない耳障りの良い声にシェリハは口許
を緩める。

天使だけの声で紡いだ子守歌を歌い聴かせてくれた、若い頃と何ひ
とつ変わらない音色。

「今年はそんなに忙しくないから顔を出すよ。
父さんは元気？」

「相変わらずよ。もう外は寒いから、中に花をいれてるんだけど…
家の中がジャングルみたいになってるわ」

仕事に疲れた若き日の一人の男を癒し、恋に落とした変わらぬ声が
耳に焼き付いて離れない。

不景気に肩を落とした父を変わらず支え続けたのも他ならぬ母の声
と笑顔。

それほどまでに母の声と笑顔は武器なのだ。

幸せに満ちた笑顔の両親を思い浮かべながら、シェリハは家路を辿った。

時代を飛び越えて生きる樹木のような、深い茶色の扉にはドライフラワーだけを幾重にも束ねた素朴なリースが飾られている。リースにはふくよかで小さな可愛い木彫りの天使が跨っていて、風に合わせてゆらゆらと揺れている。

「…久しぶり」

「久しぶりに顔を出したかと思ったら…他人みたいな顔をするなよ。お前の家なんだ、早く入れよ」

玄関先には精一杯の若作りをしながらも、年相応の皺を体に刻んだ父がいた。

シェリハは歳をとれば父のようになるのだろうか…と誤ってしまっただけは似ていた。

母より父の血が濃いのだろうか。父に案内され、歳を重ねたその背中を見つめながら台所に足を踏み入れた。

家全体と同じようにログハウスと似たりよったりな造りになっていて、暖かい。

七色の糸を編んで作られた暖簾の隙間から、わりと少女趣味なピンクのエプロンを着けた母が顔を出した。

「お帰りなさい。ゆっくりしていくのよ」

「団欒は久し振りだしな。

今日は泊まって行くんだろ？」

父の家族だからこそ言える強引な発言に戸惑った。

突然やって来た自分が悪いのだが、泊まるつもりで来たわけではないので何の用意もしてきていない。
それに明日は平日で休みではない。
…困ったものだ。

「明日は仕事があるからそれはちよつと…」

「頭のカタイ奴だな。一日くらい休んだってどうってことないだろう？」

そう言っただけでシエリハを呆れさせた父は会社に尽くさなければいけない立場でありながら、妻である雪香との記念日諸々の為に有給を消化し、欠勤・遅刻・早退をあまり深く考えない。

交際当時から結婚しても彼の熱烈ぶりは変わらず、今でも新婚のようだ。

「大したことだよ」

「着替えなら…シャツくらいならいくらでもあるし…いいだろ？一日ぐらい」

「シルヴィーは頑固ねえ。」

ふふ、シェリハの負けよ？」

父はまるで子供のようだった。

甘えるような、ねだるような…初めて見る父。

シェリハは仕方なく椅子に腰を下ろした。

突然足音がしたと思ったら、会社でしか顔を見ない妹のセルイアが現われた。

専門学校を卒業後、なかなか就職が決まらないのでエプミアンテ社で手伝いをしながらフリーのデザイナーとしてひっそり活動している。

まるでパーティーさながらのボリウム・バリエーションに富んだ母の料理に、数年振りの団欒にはしゃぐ大人達が、花を添えていた。シェリハは当初の目的を忘れそうになりながらも、一時の宴を楽し

むの
だっ
た。

07 スウィートな父

紺色の寝間着に着替えた父が窓を少し開け、ベッドに腰掛けながら煙草を吹かしていた。

明日に備えて早く寝ようかと寝室にやってきたシェリハに気付いたのか、急いで煙草を灰皿に押し当てて火を消した。

「消さなくてもいいだろ？」

「気にするな。…お前とこうして二人で話すのも久し振りだなあ…」

しみじみ言う父の顔を見つめ、シェリハもベッドに腰掛けた。

学校を卒業し、就職してからというもの、あまり家に帰ることがなかった。

大きな環境の変化に対応できなかったシェリハは多忙を理由に一年に一度、多くても二度ほどしか帰らなかった。

シェリハが煩わしさを感じないように電話を控えるといった両親の気遣いさえ、気付いていなかった。

当時は仕事のことや恋愛のことで頭がいっぱいだったからか、その両親の気遣いすら気に留めないほど狭量だった。

けれど都合のいい時だけ親を頼ってしまう我が儘で幼すぎる自分。

悩みに悩むシェリハを両親は何も言わず、静かに支え続けた。

一人で大きくなる人間なんて誰一人いないのに、過去の自分がいたら笑ってしまう話だ。

「何だよ…急に」

「いや、子供が成人しようといつまでも子供なんだなあ…」と思ってな。

じいさんもよく言ってたよ」

「じいちゃんが？」

祖父と同じく日本人の女性を伴侶にした父。

シェリハとセルイアが望む業種の知識はさっぱりだったが、自分に行えることはなんでもしてやりたいと飴と鞭を使い分けながら二人をサポートしてきた。

それがなければ今の自分は存在しない。

「同じ立場にならないとわからないこともある。じいさんは話の分かる人でな、雪ちゃんと結婚する時も理解してくれたよ」

「ばあちゃん日本人だもんな」

「家族には苦勞もかけたし…お前にも辛い思いをさせたと思ってる。今まで悪かったな」

いつになく素直な父にシェリハは目を点にした。

確かに子供時代は両親に甘えることが少なく、セルイアの世話を強いられていたが、シェリハ自身辛い苦しいと思ったことは一度としてない。

豊かな暮らしではなかったが、愛情に満ちた家庭の中で幸せだった。

「俺は苦勞したとは思ってない。…しんどかったのは父さんと母さんだろう？」

セルイアも学校出たし、これからはゆっくりできる」

「そうだなあ…もう若くないしゆっくりしたいもんだな」

「クリスマスはどこかに？」

「ああ、ダンスパーティーがあつてな。

夜にはセルイアも寄ってくれるらしいしな」

雪香の名が出ると彼は破顔した。

付き合いだした時から未だにテンションは変わらない。

それはまるで若い恋人達のような。

近所でも評判のおしどり夫婦で、何かと記念日を月に何度も祝い合う習慣を付けている。

恋人と別れたばかりのシェリハからすれば羨ましい話だ。

雪香は小さな花屋の看板娘だった。

当時は若く、花のように美しい娘だった。

彼女を一目見て恋に落ちた男は少なくなかったという。

シルヴィーはその一人だったというわけだ。

どうすれば彼女に好意を抱いてもらえるか…毎夜毎夜考えた。

その前に彼女に知ってもらう必要があった。

毎日仕事帰りに花屋に寄っては、花を買う。

それを毎日毎日続けた。

それがしばらく続いて数か月した頃、常連と化した彼の顔を覚えていたのか、雪香自ら声をかけた。

もちろん仕事として…だが。

シルヴィーも最初から雪香の尻を追いかけて回すような真似をしていくような男だったわけではない。

均整のとれた体に高い身長。

強い意志を秘めた瞳に高い鼻…各々のパーツが魅力を倍増させていた。

加えて面倒見がよく、人当たりがよかったので女が放って置くわけがない。

社内外で浮名を流していたが、雪香との出会いが浮名に終止符を打った。

瞬く間の出来事。

シルヴィーにとっては稲妻に貫かれたような衝撃だった。

手始めに食事に誘い、いかに雪香が聡明かを思い知る。

そしてデートを重ねる度、彼女の新たな一面を知る。

もっともっと知りたい…という欲望が、シルヴィーの雪香への恋心に火をつけた。

そして雪香の隣りにいたいという想いが暴走し、とうとう彼女に胸の内を打ち明けることとなった。

雪香は少しばかり驚きを覚えたが、シルヴィーを密かに思っていたことから静かに愛を受け入れた。

以来、二人は環境がどんなに変わっても夫婦仲が悪くなったことはない。

ひとつは子供のため。　ひとつは家庭のため。

結婚経験のないシェリハにとってはまさに理想の形。

「話変わるんだけど、ベビーカーってまだある？」

「ベビーカー…？」

あるが…お前、まだだろう」

「まさか。今恋人はいないし…仕事の資料に」

残念そうにシェリハを見つめていた父は押し入れの中から、いかにも古そうなブルーのベビーカーを取り出した。

ぎしぎしと音を立てており、いかにも壊れそうだ。

それもそのはず、そのベビーカーは雪香も使っていた物だからだ。

最近の物ほどデザインや色使いは洒落ていない。
しかし思い出がぎっしりと詰まっているのだ。

「そろそろ寝るか」

「そうだな…」

シェリハより先に父が床の中に入る。

布越しに感じた父の背中が薄い肉付きで、包容力が溢れていた。

若く見せても所詮は作り物。

シェリハは肌で親が老いることを実感し、一滴の涙でシーツを湿らせた。

08 迂闊だとは認めたくない未熟さ

昨夜同様朝から豪勢な料理に出迎えられ、シェリハは腹をばんばんにしてベビーカー片手に会社へ向かった。

その絵面えつらは滑稽に見えたらしく、女子社員に後ろ指を指された。

ベビーカーを担いでいたものだから、ありもしない噂が一人歩きして社内全体に広がる。

「シェリハさん、とうとう結婚ですか！？相手は？」

「あのストイックで有名なマルフリーフェが結婚……？相手の顔見たいよね」

一日中話題を独占していたシェリハは社長に目を付けられ、仕事にも関わらず呼び出された。

ドリー・エプミアンテ。一児の母であり、社長であり、モデルもデザインもやってこなすマルチな婦人。

社長室に呼び出されることは、社員にとって仕事で失敗することよりも恐ろしいことだ。

社長の目から見ておいたが過ぎると見られる社員はここに呼び出され、延々と説教されることになる。

でもまだこれは軽い仕置きにすぎない。

「なぜ呼ばれたのかわかるわね？」

ショッキングピンクを基調にした、社長の一室に呼び出されてシェリハは立ち尽くしていた。

フリフリのレースを装備したショッキングピンクのカーテン。

きわどい衣装を身に着けた、目のやり場に困るピンクのマネキン。

一対の孔雀が抱擁している姿が印象的な、大きなソファア。

さすがにデスクは普通だが、薔薇の額縁の中には彼女の子供だろう、少女の写真がある。

異様な雰囲気はまるでラブホテルだ。

烏の羽のような睫毛に血のように濡れた真っ赤なルージュ。

汚れ一つないシャツは大胆に開かれ、その上に黒のジャケットを羽織り、引き締めている。

「ベビーカーですね」

「話の早い人ね…そうよ」

間を置くことなく、ドーリーは言い放った。

シェリハはドーリーに導かれるままにソファ―に腰掛けた。

「仕事に情熱を注ぐのはいいことよ。

紙袋にいれてくるとか…そういった考えはなかったのかしら？」

「今朝は急いでいたもので…」

ドーリーの手入れされた、細かいラメが混じった桃色の爪がシェリハの頬をかすめる。

ふと視線を逸らそうとした瞳を、妙な威圧感で鷲掴みにする。
恐ろしい女性だ。

「シェリハ、あなたは素晴らしいデザイナーよ。

ストイックでデザインに対する情熱は冷めることなく、燃えさかる
マグマの如く…でも時々前が見えていないようね。

それがあなたの悪いところよ。

実力も能力も大事、でもイメージダウンは大きなダメージなのよ。

わかるかしら？」

延々と続く説教にシェリハはうんざりしながらも聞いているように
見せかけた。

ドーリーは説教を始めると、コマーシャルをカットした二時間もの

のサスペンスドラマが終わってしまうほど、長々と説教する。

相手の都合などお構いなしに、夢を売る立場を仕事のあるべき姿を説き続ける。

まるで教鞭を執る教師のようだ。

仕事を手付かずのまま夕日が見えるまでお経のような女社長による説教が続き、生気を奪われたようにどっと疲れたシエリハはやっと解放された。

同僚から笑いにされつつ、仕事を中断された分を取り戻すために、彼の仕事は社内が空っぽになっても続いた。

ベビーカーを見つめながら、スケッチブックに鉛筆を走らせる。

ベビーカーを模したフック。

動物をデフォルメした哺乳瓶のキャップ。

何点か描き終わるとスケッチブックを閉じて、
鞆を手にオフィスを出た。

暗闇の中に光る宝石の中を数多の人が通りすぎる。

コンクリートの海に響く靴音が波になり、こだまのように響く。

愛の巣を目指して帰る者、仕事前に一息つく者。

誰も知らないところで時間が動き、物語が刻まれていく。

幸せがあれば不幸があり、平等があれば不平等がある。

考えれば考えるほど不思議なものだ。

疲労だけを貯蓄し、酒を浴びるように飲むサラリーマンの波に溶け込み、多くの人が出入りする黒と青の看板が目立つ居酒屋にシエリハは入った。

まず目に付いたのは一人の女性。

後ろ姿なので顔はまったく見えないが、左手にはビールジョッキを右手には箸を装備している。

既に空のジョッキや皿を大量に積んでおり、かなりハイペースな食べっぷりだ。

背筋はピンと張っていて、黒のスーツが引き締めるSラインを描くカーブが美しい。

ビールを一気飲みすると店員を呼び付け、早口で注文していく。

心配になった店員は横目で女性を横目でチラリと見る。

「…それで終わりよ。よろしくね」

「あの…大きなお世話かもしれませんが、お客様少々飲み過ぎでは…」

「別に酔っちゃいないわよ。
いつもはもっと飲んでるし。
気にしないで」

店員を追い払った女性はまた黙々と食欲を満たす為の作業を繰り返す。

店員とのやり取りを一部始終見ていたシェリハは女性の声音をはっと思い出す。

（何か聞いたことあるなあ…）

もしかしたらエアリじゃないのか。

そう思っただけで女性の側まで歩み寄って確認して見ると予想通りエアリだった。

一人暮らしの身の上、何時に帰ろうが自分の自由。

飲みたくなつたからふらつと立ち寄ったとぼそりと言った。

「あまり飲み過ぎるなよ。明日に障る」

「そんなへましないわよ、子供じゃないんだから。

普段はもっと飲むし、つぶれたことないしね。

それに今日はまだまだ飲むつもりだし？」

エアリは注文したばかりの酒と料理が届くや否や、大人のマナーを抜きにして本能のままに貪るように食べていた。

シェリハはその隣でちまちまと食べながら、明日のことばかり考えていた。

明日は仕事にならないだろうと。

09 国境のない城

ねむけまなこ
眠気眼に上の空。

頭の中ではアーティスト達が楽器を演奏している。

そう、すべてのはじまり昨夜のエアリだ。

食欲旺盛なエアリを見ていて食欲を失っていたシェリハは、

「なにちまちま飲んでんのよ？」

男なら男らしく、一気飲みしなさいよね！」

などとエアリに煽られて、結局出されたものすべてに手を付けてしまったことを未だに後悔している。

広い心で放置しておけばそんなことにはならなかったのに…と頭痛薬を飲み、予備を懐に忍ばせる。
情けない話だ。

しょっちゅう国内外問わず出張している社長だが、今回はブルガリアに飛んだという知らせが、早朝に行われた会議で副社長の口から告げられた。

出張の真実は定かではないが。

社長が不在の時には彼女の右腕的存在、副社長がすべてを取り仕切る。

社員の補佐・新人の教育・電話応対など事務的な作業まで、普通ならてんでこまいになりそうなスケジュールを組まれていたとしても、顔色一つ変えずにやってこなす…それが副社長・ルハルク。

ビジネスはぬかりなく完璧に。

失敗したなら原因を徹底追究し、次回の仕事に生かす。

飴と鞭の使い分けは必ず行う。

それが彼のポリシーだ。

スポーツマンのように背が高く、スーツの上からでも分かる手厳しく管理されたスマートな体型。

ミーハーな女子は彼を独占したがるが、かなり鈍感なためデートに誘ってもいつも周りに誰かがいて雰囲気は飲み会状態。

決して二人きりにはなれないので、彼のプライベートは謎に包まれている。

またそんなところも魅力の一部のようだ。

「入社した時から思ってたけど、副社長っていうか執事って感じじゃない？」

事務員の仕事まで奪ってるからねえ…いれてくれるお茶も美味しいし」

薄味の煎餅に齧り付き、エアリはルハルクがくれたお茶を啜る。

甘すぎず苦すぎず、丁度いい。

エアリの独白に仕事をしていたシェリハが紙に走らせていたペンを止めて、彼女の方を向いた。

「小さい会社だから仕方ないんだろう。」

人数が少ない割に忙しいから、それで辞める奴も多いし、あれだけときばきできる人なんていないから助かってるんだけどな」

そう、エブミアンテはまだまだ小さな会社。

大手企業でもない、一介のデザイン事務所。

だから正直なところ、クライアントにもよるがあまりにも無茶苦茶な納期で、ハイクオリティを求める依頼も多々ある。

定時で帰れないことも頻繁にあり、終電間際や泊まり込み…なんてこともざらにある。

けれどその分やりがいがあり、達成感というプレゼントがあるのだ。

エブミアンテ社を設立したドーリー自身、シェリハやエアリと同じようにただのデザイナーにすぎなかった。

専門学校を首席で入学。栄誉ある賞にも選ばれた。

だがそれは学内での話。一步外に出れば厳しい現実が待っていた。

国際問題・人間関係が災いして、ドーリーは蚊帳の外。

日本人ばかりの社内で頑固なまでに自分を貫き通す、独創性に満ちてはいるものの受け入れて貰えない彼女は一異邦人だった。

人に合わせ、抑圧されることに堪え切れなくなったドーリーはとうとう辞表をしたためる。

「辞めるのか」

「こんなところいたって仕方がないでしょう？」

外国人だというだけで、それだけで判断するのよ。
中身を見ないで差別をされるなら、私は埋もれていくだけ」

「しかし…行く当てなんてあるのか？」

新卒でまだ露出も少ないんだ。

協調性を養うきっかけだとも思っ、学ぶことはできないか？」

「押し付けたりすることが協調性なの？」

私のアイデアは認められるのに、私の存在を認めてくれない…現に何回アイデアを盗られたかわからないわ」

「ドーリー…」

「私は会社を辞める。そして会社を設立する。

私と同じ日本で活動する外国人のデザイナーのための会社を。
実力に生きる、国境のない会社を作る！」

入社して偶然居合わせた同期、それがドーリーとルハルクだった。

そして有志を募り、できたのが現在のエプミアンテ社。

小さくも温かい、二人の血と汗の結晶。

だからこそ潰すような真似はできない。

赤字もない黒字もない、絆で繋がれたここは社員にとってのセカンド・ホーム。

社長の信頼を買ってか、依頼者のリピート率は高い。

仕事だけの繋がりではなく、プライベートでも食事会や遊びに行ったりと一度きりの関係では終わらなくなる…知らないうちにそんな企業が多くなった。

そんな場所で働けることをシェリハは誇りに思っていた。

フリーになることがあったとしても原点はエプミアンテ。それだけは変わらないだろう。

結婚・妊娠・出産をきっかけに退社する女子社員もいるが、仕事への情熱を忘れられず育児の道一本だけでは満足できないと、戻って来る社員もいる。

皆誰もが胸に思う。

上司に恵まれ、自由な環境を与えられ、幸せだと。

「社長と副社長って同期なんだってね。

夫婦か恋人かと思ってたけど、設立以前からの知り合いだから納得のいく話よね」

「仕事で知り合う恋人や夫婦もいるが、信頼関係で成り立っているんだろうな。

彼がいなきゃ俺たちの仕事もこんなにスムーズには進まない。一生頭が上がらないだろうな」

そんな仕事中の一息に、シェリハの視界に入っただルハルクは社長の代わりとなって休むことなく動いてくれていた。

企業のお偉い連中が来れば来客の対応。

デザイナーのアイデアが出来上がれば試作品の制作や、商品化決定が決まったら自ら工場見学に赴く。

ドーリーが信用し、一目置くのも納得がいくし理解ができる。

仕事熱心なルハルクを見つめながら、シェリハはまたペンを走らせた。

10 再会

時計の針を読みながら、迫り来る業務終了へのカウントダウンをひっそりと数える。

そして何をするか思い浮かべる。

平静を装いながら、その皮の裏はにやけ顔だ。

一人で酒を飲みに行くのもいい。

一人寂しくディナーを準備して、自分の頑張りに対する褒美にシャンパンを飲んで酔い潰れるのもいいだろう。

誰に迷惑をかけるでもなく、一人の時間を楽しむ。

なんて素晴らしいことなんだろう。

妄想に浸るシェリハをある男の一声が空気を一刀両断する。

「シェリハ」

上から降ってきた声にシェリハはびくりとする。

混じりけのない宝石のような光沢の黒髪。

髪色に合わせた吊り目がちの瞳がシェリハを捉える。

「副社長……」

「ルハルクでいいと言っているだろう？まあいい。」

お前にしか頼めない用があるんだ」

…きた。

シェリハの脳裏に嫌な予感が過^よぎる。

今日はもう定時では帰れない。

シェリハは長年の感覚と勘で瞬時に悟った。

上司が低姿勢に頼みごとをしてくる時は厄介ごと、と決まっている。

「用…ですか」

「そうなんだ。実は今日エアリがブランドのイメージモデルが見つかったっていうんで、モデルが来ることになってるんだ。」

で、その撮影の手伝いを頼みたいんだ」

「撮影の手伝いなんて…俺したことないですよ？」

「おかしいな…データには残ってるぞ。」

阿柴がまだここにいた頃、オールマイティーにやっていたようだが？」

社員の業績は成功・失敗関係なくきっちり書類上形を残して、保存されている。

更にルハルクは社員の管理をしなくてはいけない為、知らないことなど何一つない。

それがたとえ社員にとってできることなら、記憶から消し去りたい仕事だったとしてもルハルクの記憶力が顕在する限りは逃げられない。

「…わかりました。どこに行けば？」

「悪いな…そう言ってくれと助かるよ。」

撮影はうちのスタジオでやるから、エアリの手伝いを頼む」

仕方なく手伝うことになったシェリハは、スタジオに向かった。

電波も届かない、地下にエプミアンテのスタジオがある。

業務に集中できるようにと作られた壁はカメラのシャッター音すらも通さない造りになっている。

ファッション雑誌や通販カタログなどがきれいに収納された本棚に、適度に整理されたやや型の古い機材。

撮影スペースには引越したての家の様に何もなく、ただ白い壁があるだけだ。

その他には着替えをする更衣室とメイク専用のメイクルームがある。

どちらも造りは質素でシンプルだ。

着替えと化粧の為だけに造られたような部屋で、手抜きをしている様な印象を受けてしまう。

今回のようにエプミアンテの社員で事足りるような事態に遭遇した場合、否応なく駆り出されることになる。

ひとつの分野を専門とする人員に仕事を頼めば、人件費がかかる。

社内で新たなブランドを、という話が進んでしまったとしたら企画から制作まで社員が行えば、経費節減にもなる。

余裕のないエプミアンテにはぴったりだ。

但しイメージが合わなければ意味がない。

そついった場合には専門家に頼むしかない。

それ以外であればすべてエプミアンテ社員のみで行う。

それがエプミアンテの方針だ。

そのお陰でかなりハードなスケジュールを強いられたりするが、自分一人だけではない分心強い。

「お待たせ」。…わざわざ付き合わせちゃって悪いわね」

カツカツとヒールの音を立てながら、紙袋を持ったスーツ姿のエアリがやってきた。

紙袋の中には大量の書類が入っている。
今回の企画に関する書類だろうか。

彼女にとっては初めてのセルフプロデュース。

形になるまで時間が掛かった分、一番楽しみに待っているのは彼女だろう。

時期としては入社時から今日に至るまで。

形にするからには自身のイメージの譲歩はできない。

それが原因でなかなか企画が進まなかった。

イメージモデルを探すのにかなりの時間を要した。

ともかくにもエアリはモデルに対して注文が多く、妥協ができないから仕方ないと言えば仕方ないのだが。

彼女の強い要望で今回起用を考えているのは東洋人。

そして敢えてプロのモデルには依頼しない。

メディアに露出したことのない女性にプロにはない新鮮さを、エアリは期待しているのだ。

「ちょっと見てよ」

紙袋からさっと出された数枚の写真を見て、シェリハははっとした。

モデルのプライベートを切り取ったモノクロのスナップ。
草むらに寝転がる少女はあどけない顔をしている。

飛んだり跳ねたり元気な姿はボーイッシュ。

しなやかな指先で小鳥を踊らせ、スレンダーながらもカーブを描く
ラインには少女を脱した女性らしさが息を潜めている。

いつか専門学校で出会った少女。

梨星に間違いない。

「この子…」

「そ、私が探してたイメージ通り…ぴったりだったのよ。
新鮮でしょ？」

「たまにはプロじゃないモデル起用するのも面白いかもな。
化けそうだし…」

幼子のような透明感を持つ肌。

大人でもなければ子供でもない、アピールが控え目なやや中性的な
肢体。

大人と少女の狭間にいる女性をターゲットにしたエアリのブランド
にはうってつけである。

「彼女は化けるわよ。私が選んだんだもの」

「で、肝心の彼女はいつ来るんだ？」

「もうすぐ来るから焦らないですよ。…ん？」

ポケットの中で踊る携帯。

エアリはポケットから携帯を取り出す。

それと同時に小さな足音が次第に大きくなり、近付いてくる。

ハアハアと息を切らしてやってきたのは白のタートルネックにクリーム色の布地にダルメシアン柄のパーカーを羽織った少女だった。

「あゝっ！」

「梨星…？」

少女に指さされ、シェリハは予想はしていたものの驚きのあまり動けなかった。

11 メイクアップ

エアリの携帯を鳴らした犯人は梨星だったらしく、彼女の姿を見つけるとエアリは携帯をしまった。

「あら、二人知り合いなの？…まあいいわ。

彼女は今回モデルやることになった梨星よ。

で、そっちはシェリハ。今回手伝ってくれる事になったの」

エアリはにこやかな笑みを浮かべ、営業スマイルが炸裂する。シェリハと梨星が知り合いである事にエアリは驚かなかった。

母校を紹介したのは彼女だったからだ。

出会ったとしても不思議はない。

「さて、早速撮影しましょうか。

梨星、着替えとメイク行こうか？

シェリハはちよつと待ってて」

「なあ、俺がいなくても撮影できるんじゃないか？」

「何言ってるのよ。ちゃっちゃと済ませた方がいいでしょ？」

細かい事は書類に書いてあるし、これ渡しとくわね」

大量の書類が入った袋をシェリハに押し付け、エアリは梨星を連れて着替えとメイクをするために別室へと消えてしまった。

（エアリの企画書、目を通しておくか……………）

シェリハは分厚い書類を取り出して、ペラペラと捲り始めた。

エアリー・レイ。

ブランドの名は自分の名前をもじったもの。

髪や頬を撫でる優しい風。

時に自然の力となり、人工的に作られた建築物を破壊する災厄となる。限り無く自由で気ままに途方のない旅をする…そう、まるで猫のように。

自然体の魅力と自由を掲げている。

それは元来人があるべき姿であり、最終的に辿り着く姿だ。

流行廃りに足下を掬われ、自分の好みがどれなのかわからなくなつてトレンドに身を委ねる。

結果、街にはトレンド一色のファッションで身を包む人々が生み出されていく。

トレンドに染まることが悪いことではない。

ファッションとは自己主張のようなもの。

色も形も様々な服を組み合わせて自分の好みを基準にコーディネートする。

好きなものがあるならば自らを抑制して、流行の波に乗らなければいけないことはない。

自分が満足するまで好きなようにカスタマイズすればいいのだ。

エアリのブランドは気取らない自然体だからこそ引き立つ魅力、品のある色気や女性らしさを前に押し出している。

合わせやすいモノトーンをベースに、時々冒険してみたいくつきりした印象を残すカラーを用意。

日常生活でも頻度が高そうなカジュアルで統一しているものの、基盤となるコンセプトは忘れない。

エアリー・レイは静と動。

大地にしっかりと根を張り、踏まれても力強く背を伸ばす。

例え摘まれたとしても。台風や風にも決して敗北を認めず、美しい緑をいっばいに広げる。

とりあえずは試作段階として生産する為、アクセサリーや鞆といった小物は後回しにしている。

そもそも小物に時間を掛けるほど、エアリに余裕はない。

エアリの仕事はこれだけではないからだ。

主役級の服があればそれでいい……それが作り手であるエアリの意思。

ボタン。

ため息の声を漏らすエアリと、まるで別人のようになった梨星が姿を現した。

軽やかな波を描き、毛先を遊ばせつつも元氣過ぎないウェーブヘア。臉全体にのせられたパステルのアイカラーは潤んだ瞳を演出し、綺麗にカールされた睫毛は決して長くはないものの瞳に華を添えている。

肌に馴染んだ赤みを帯びたベージュのグロスが唇を自然且つ健康的で、僅かな色気を漂わせている。

力を抜いた白のUネックのトレーナー。

両の袖と裾にハートを象った唐草模様があしらわれている。

ゆとりを持たせながらも脚が長く見えるスキニーのジーンズにも、トップスと同じ唐草模様が付いている。

脚は何故か分からないが素足だ。

「完璧でしょ？ 梨星のよさを最大限に引き出せたわ！

ようやくシェリハの定番よ。暇だったでしょ？」

「そう思うなら早く用意するぞ」

シェリハはけらけらと笑うエアリを尻目に見、その横で不安そうな目をする梨星に気が付いた。

「撮影といってもね、あまり難しく考えないでね。

友達と写真撮ったりするでしょう？」

あんな感じで全然いいからね」

「でも撮影って…」

エアリの笑顔につられて梨星もにっこりと齒を見せて笑う。

そして不思議そうな顔をした。

「あら意外だったかしら？」

人形みたいに綺麗な表情よりも、その人の自然の表情が私のブランドには一番近いのよ。

梨星、あなたの気取らない自然で可愛い表情がね」

エアリの顔が悪戯が好きな少女の顔から凜とした女性の顔に変わる。

一瞬呆気にとられた梨星だったが、すぐに天真爛漫な明るい笑顔になった。

上手いな…とシェリハは微笑した。

仕事に一切の妥協を許さないエアリはシェリハが知る限り、モデルを怒らせたことがない。

いつも褒めて伸ばすのだ。

決して貶したりはしない。

自分に自信を持っている人間はプライドが高いからこそ、繊細にできている。

一度貶されれば自信と同時にやる気を失う。

仕事に差し支えるなら、短所を引き出さず長所を活かす場所を見つければいい。

常に前向きなエアリらしい。

そして褒められることは万人にとって嫌がられる行為ではないはずだ。

否、誰もが欲している行為なのかもしれない。

撮影スペースに移ると、エアリは梨星を白い布の上に座らせた。一切ポーズは指示せず、リラックスさせる言葉を連呼した。

そしてシェリハにどんどんシャッターを切らせる。

「いい感じよ！…梨星、あと少しだからね。

シェリハ、枚数気にしないでばんばん撮って！」

「撮る度いい表情になるな。

モデルとはまったく別の…でも素人とは違うし…。

不思議な子だな」

「私の目に狂いがある時は業界を去る時よ。

さあ！」

梨星の目に不安の色はない。

むしろいきいきとしてシャッター音とライトを浴びている。

笑顔、まどろんだ顔：自由自在に操っているようにも見える。
シャッターを切る度にモデルさながらの、それに負けない表情を見せている。

化粧を施される事によって、内面までもがメイクされたのか？
不思議な思いを抱えて、シェリハはシャッターを切り続けた。

12 休息の鐘（前書き）

やっと梨星にとって大仕事が終了しました。早く恋愛に結び付けた
いものですが、順々になると言うことを考えるといつになることや
ら…。

12 休息の鐘

撮影も終盤に差し掛かり、慣れない作業とあつてか梨星は疲労していた。

…というよりも眠そうな表情をカメラに向けていた。

「もうそろそろ終いにするか。」

疲れてるみたいだ」

「そうね。梨星、大丈夫？疲れた？」

エアリが尋ねると梨星は相変わらずの表情。

閉じそつで閉じない、梨星の瞳。

眠気を覚まそうとぱちぱちと頬を叩くが、あまり効果がないらしい。その次には瞬きを試みる。

…だがこれも効果はないようだ。

「大丈夫…」

「そつ…？じゃあさつさと撮っちゃいましょうか―あら？梨星！？」

梨星を見ると瞼を閉じてすやすやと音を立てていた。

どうやら眠ってしまったようだ。

慣れない作業で疲れてしまったのだろうか。

「撮影中断…か。休憩するか？」

「梨星は休ませときましょ。」

疲れたんでしようよ…よくやってくれたわ。

…でも、チャンスよ！ちよつと見て」

エアリに言われて梨星の方を見る。

あどけない寝顔だ。

少女のように幼く、幸せそうだ。

寝返りを打ち、整えられた髪が崩れて乱れる。

顔に掛かる髪が作り出す陰影―光と闇のコラボレーション。

そこにはエアリが撮りたかった、自然な女性の姿があった。

「確かにお前のブランドには合うかもな」

「そうでしょう！梨星には申し訳ないけど…」

何かに誘われるようにシェリハは何度も角度を変えてシャッターを切る。

今日一番のショットだったような気がする。

撮影を終えてすっかり夢の旅に出掛けている梨星のために、メイクルームに置き去りにされていた黒のコートをかけてやった。

寝返りを打ち続けてもなお、梨星の寝顔は幸せそうなものだった。

梨星を起こすまいと、二人はできるだけ音を立てずに片付けを始めた。

重い機材はシェリハに任せ、エアリは小物を片付ける。

「さて…あとは梨星ね。どうしよう？」

エアリが膝を曲げ梨星を見遣った時だった。

重い瞼を開け、体を起こすときよろきよると周囲を見渡した。

エアリとシェリハを確認すると、自分が眠ってしまったのだと初めて知る。

「ごめんなさい。私寝ちゃって…」

「いいのよ。無事に終わったわ。疲れた？」

「ちよつとだけ。…もう大丈夫」

遠慮がちに梨星は言い放った。

それもその筈、梨星は専門学校生で体を動かす機会が高校時代に比べてあまりない。

まだ若いといえども体力やスタミナは確実に減少していることだろう。

慣れない姿勢を長い時間保ち続けることで、疲労するのはもちろんのことだが気力も浪費する。

おまけに梨星は小柄であり、気力はこの際おいておいて体力に自信があるとは思いがたい。

そして長時間の撮影ともなると、意外にもそれらの要素が必要になってくる。

何ごとも体が資本というわけだ。

「慣れない事をするとかれるものなんだ。

俺だって入社したての頃は疲労がひどかった」

シェリハは梨星に当時の自分を重ね、苦笑した。

第一印象から強烈だったエプミアンテの女社長。

その右腕として働く、副社長は非の打ち所がない。

仕事着に着物を選択をする同期のエアリ。

一般規格外の個性を持った社員に囲まれ、当時は外の世界を知らない無知な子供のように驚愕する毎日だった。

時が経つにつれて順応していったが、今思えばよくもまあ耐え抜いたものだ。

自画自賛するのもおかしい話だが、新入社員の精神を掻き乱す現実には社員の心にとってあまりにも過酷なものだった。

だがそれがプロの世界であり、基準値。

以後も勉強の日々だ。

同じ仕事を二度以上任されることがあっても、全く同じものはひとつとしてない。

苦しくはあるが、それがやりがいのひとつなのかもしれない。

「そうなの？じゃあ今は？」

「年々体力が落ちてくるから、どうにかしないといけないと思ってね。

毎日とはいかないけど鍛えてる」

「もう若くないもんねえ……だからこそいつでも新人を迎え撃つ用意をしとかないとね。

若い連中には負けないわよ」

梨星の問いに、手を腰に当て胸を張りながら答えるエアリ。

シェリハとエアリに共通すること――それは無駄な肉がないということとだ。

過酷な労働故かもしれないが、服の上からスマートであることがわかる。

エプミアンテはこれから成長する、まだまだ小さい会社。

デザイナーであるからといって、デザインだけをすればいいのではない。

現にラッドアークはデザインにこそ携わっていないものの、他社での実務経験を生かしたアドバイスから事務・雑用までこなしている。

…ただ単に人手不足ということもあるが。

つまり仕事はひとつではない、ということが言えるわけだ。

デザインだけではなく、パーツを含むモデルをすることもある。

勿論誰でもいいというわけではなく、イメージに合う人材が運良くいれば即起用となる。

体が資本となつているのは言うまでもないが、意外にも体を動かすことが少くない為に、体力と気力のいずれかが欠如すると業務に対する熱意が奪われる。

そうなると思いが元に戻るまでかなりの期間を要する。

もしくはその気持ちが無くなってしまう。

…そして辞めてしまうのだ。

デザイナーである前にモデルとして自分に鞭を打ち、体型保持に努めることも仕事の一部だとドーリーは言う。

「デザイナーさんも大変なんだね」

「そうよ。でも社長がね、それを実行してるの。」

高校時代から体型が変わってないの。

だからかしらね」

ふん…、と感心する梨星。

シエリハとエアリは時間を気にしてか、携帯を見る。

夜ではないが午後ではないー夕方の方の17時。

夕食にはまだ早い、梨星への礼もある。

ここは礼と交流を兼ねて、食事でもしたいところだ。

そわそわしながら、エアリが空気を断ち切るように切り出す。

「梨星、あなた門限とかあるの？」

「ないよ。基本的に放任主義だから気にしてないみたい」

ほつと胸を撫で下ろしたエアリは続ける。

「それはよかったわ。」

今から三人で食事でもどうかしら？」

「疲れてお腹も減っただろう？」

梨星さえよければ……」

優しい微笑みを梨星に向ける。

梨星は笑顔のOKサインを出して、シェリハの袖をぐいぐいと引っ張る。

大仕事を終えた三人は舞台の灯を消し、先ほどまであった賑やかさも一緒に連れて階段を駆け上がるのだった。

13 砂糖混じりの祝杯

外は薄暗く、鳥の姿がちらほら見える。

空へと投げ掛けるような誰もが知る彼らの声が、夜の幕開けを予告する。

ぽつぽつと小さな灯がネオンとなり、街を色付けていく。

まるで空に蛍光色の大輪の花が咲いているようだ。

三人は人込みに紛れながら、波を掻き分けて足早に人気の少ない場所へと移動していく。

心配になってかそれとも興味津津なのか、挙動不審なまでに梨星の目がきよろきよろと動く。

「ねえ…人あんまり通ってないよ？」

「この辺りは騒々しい店がないから、ゆっくりできる。」

食事の味が落ちるから」

更に歩を進めると、バーやキャバクラといった夜の店が集まる通りに出た。

だがこれといって危険そうな人物は見当たらない。

そして客寄せなども行われていない。

店を出て来る客はスーツを身に纏った会社帰りの男女ばかりだ。

「スーツの人ばかり…」

不思議に思っただけで梨星が呟く。

夜の街のイメージが異なっただのだろうか。

だがそう勘違いしてしまうのも仕方ない。

一見夜の街と見せかけてこの通りはすべてが飲食店だ。

昼間は夜に比べてネオンがない分、外観は地味だが通常の飲食店として機能し、実際に働いている学生もいる。

夜はネオンが通りを彩り、昼のメニューに夜用の品々が追加される。

大衆のレストランとは異なり、静かに食事を楽しみたい大人の男女

にはうつてつけだ。

入店の際には年齢確認がある為、学生が入り込むこともない。
マナーある社会人ばかりなので安心だ。

満員の際には歩行者を妨げないように専用の部屋があるので、寒空に凍えたり暑さに倒れることはない。

結果道はいつも整理され、客にとっても歩行者にとってもストレスのないようにできている。

「全部飲食店なんだ。

さ、着いたよ。入ろうか」

三人はログハウスのような建築物の前で足を止めた。

きらきらと輝く店ばかりに囲まれ、ここだけは質素で異様に感じてしまう。

木材の色は全て統一されていて、人間で言うならやや肌が白い…そんな色だ。

壁には美しい花々が掘られている。

繊細なラインで彫られた花は本物のように存在感がある。

屋根には抱き締めるような手付きをした人魚のレプリカが置いてある。

髪は長く、均整のとれた体。

人魚のようであるが、子を持つ母のように慈愛に満ちた表情は聖母のようでもある。

中へ入ると白のシャツの上に黒いジャケット、黒のスラックスを身に付けた男女がお辞儀をして出迎えた。

よく見ると胸元にワンポイントとして花が刻まれている。

それもひとつの種類ではなく、様々だ。

「いらっしやいませ」

店員はそう言っと、シェリハとエアリの顔を見た。

そして一礼をする。

エプミアンテ社の飲み会は殆ど此所で行われるので、VIP同然のようなものだ。

シェリハは仕事の付き合いだけでなく、プライベートでは友人や家族とここを訪れることもある。

丁重な扱いを受けても不思議な事はひとつもない。

そうして三人は店員の一人に個室に案内された。ひとつのテーブルの上にひとつのキャンドルが置かれていた。

そのためか照明は僅かに暗い。

だがその暗さが淡い光をムードあるものに仕上げている。

箸置きやお品書きなどの小物にも凝っていて、花々が刻まれている。それだけではない、壁や防音の役目を果たしている襖にも手が行き届いている。

「お飲み物はいつもの物になさいますか？」

「そうね…」

一瞬悩んで、エアリはカルピスサワーとオレンジジュースを注文した。

梨星を氣遣つてのことなのだろう、いくら祝いの席とはいえ未成年にアルコールを飲ませるわけにはいかない。

それがたとえ二十歳間近だとしてもだ。

エアリは適当に注文をし、店員は注文の内容を確認してから去っていった。

襖が隔てた世界はとても物静かだ。

小さな雑音の響きが聞こえるくらいで、リラックスするには申し分ない。

シェリハと梨星が向かい合わせとなり、彼女の隣にエアリが座っている。

三人は食事をする為に上着を脱いだり、おしぼりで手を拭いたりしている。

「私ジュース？」

「だって未成年だろ？」

「そうだけど家では飲んでるよ？」

エアリがジュースを注文したことが梨星にとっては少し不服だった

らしい。

梨星はねだるように唇を尖らせていたが、大人の二人には可愛い色目は通用しない。

まるで子供が新しい玩具を欲しがるような行為に、シェリハは吹き出してしまった。

「何がおかしいの？」

「いや、何でもない」

もう一度笑ってしまいそうになるのを我慢して、くだらないような雑談をしながら料理を待った。

学校の話や仕事の話。

色んな話を展開した。

それにしてもよく笑う少女だ。

シェリハが仕事で得た経験の代わりに失った新鮮さ、無邪気さが彼女の中にはある。

社会に順応するべく殺した自分の意志や意見。

彼女と対話していると、胸に閉じ込めていたものが溢れてきそうで少し怖い。

普段は頼りない妹のようなのに、時折胸を貫くような言葉を吐いてくる。

そう感じてしまうのは、シェリハと梨星が正反対の性質を持っているからだろうか。

シェリハが胸の中にもやもやを広げているうちに、華やかな料理が運ばれてきた。

大きな皿に盛られた料理を個別に与えられた小皿に取り分け、箸でつつく。

もちろん食べ物ならぬ肴は終了した仕事の話だ。

梨星にとっては初めての仕事。

エアリにとっては自分一人で手掛けたのは初めての仕事。喜びを隠せないのか、終始ご機嫌だ。

「さて、改めてお礼を言うわ。」

梨星、あなたなしじゃ終われない仕事だったから助かったわ。

…あとあんたもね」

エアリはグラスを傾け、中に入っている氷を揺らしながら呟くように言った。

明らかに付け加えであろうその物言いに反応するのは、今宵はやめておこう。

元より素直ではないエアリのことは長い付き合いの中で熟知している。

何より酒と食事が不味くなってしまう。

「副社長に頼まれたからな。」

ま、いいのが撮れてよかったよ」

そう言うと梨星は恥ずかしそうに俯きながら、小皿に移された料理を一一口味わいながら食べている。

頬を膨らませている姿はまるでハムスターのようだ。

三人は酒とジュースを片手に、密閉空間に雑談という花が咲き乱れた。

そうして楽しい時間は刻々と過ぎてゆくのだった。

14 終宴のはじまり

あれだけ大量にあった料理も僅かとなり、口直しにとデザートとドリンクを注文した。

料理と同じく三人を唸らせるほどの質と味に酔いしれるばかりだった。

「初めてだったけど、ほぐしてくれたから緊張しなかったの。あんなのでよかったのかな？」

「エアリのイメージ通りだったそうだ。」

初仕事にしちゃ出来だよ」

シェリハの言葉に謙遜しながらも、真っ赤になった梨星は誤魔化すかのようにジュースを飲んだ。

その時梨星の膝にエアリの手がそつと忍び込んでいた。

梨星がふと自分の膝元を見ると茶封筒が乗っかっていた。

当然中身は紙幣である。

今回梨星がモデルを引き受けたのは金銭が欲しいからではない。

新しい世界見たさに飛び込んだだけだ。

だがエアリにとって今回の件はビジネス。

未成年相手であろうと大人であろうとそれは変わらない。

金銭を渡したのはそれに見合う仕事をしてもらったからだ。

梨星もそれを理解できないほど子供ではない。

突き返すことでもすれば、受け取るまでは手を引つ込めないだろう。

梨星はそんなエアリの気持ちを察して茶封筒を受け取ると、さっと懐にしまいこんだ。

素知らぬ顔で食事に夢中になっていたシェリハは溜め息に似た声を漏らした。

梨星ならば突き返すのではないだろうか、と思ったのだ。両親の育て方が余程いいのか、年齢にしては礼儀正しい。

そんな親の教えを守り抜く少女が、知り合いになったとはいえ金銭を受け取ることなどしない―そう思ってしまったのだ。

だが事がうまく運んでくれたことでよかった、と胸を撫で下ろした。

「ね、ねえ」

「ん？」

「今日の写真、今度…見たいな」

足が痺れたのか、足を崩してリラックスしながら梨星が囁くように言った。

それはシェリハとエアリにとって意外な言葉だった。

今回のモデルは頼んだから快諾してくれたのであって、写真やモデルに関心があつて興味を惹くというレベルではないと思っていたからだ。

もしかしたら自分自身がどう写ったか、という好奇心なのかもしれない。

「写真に興味があるのか？」

シェリハが聞くと、梨星はこくりと頷いた。

携帯やデジタルカメラで撮った事はあるが、あくまでも自分はアマチュアの中のアマチュアの撮影であつてプロの撮影ではない。

自分がプロの手によってどんなふうに写し出されるのか、一番の関心はその点だった。

「ほんと！？」

シェリハの言葉に梨星の目が星のように輝く。

瞳に陰りの色ひとつすらない、新緑のようだ。

二人のやり取りがある間にエアリは鞆の中の名刺と睨み合いをしていた。

もしかまた会う時があるなら名刺を渡しておいた方が良さだろうか、と考えていた。

機会があるなら是非、梨星に続投して欲しい―その思いは変わらない。

エアリは意を決して名刺を取り出す。

「梨星、いつなら都合いいかしら？」

ほら、学校もあるし……」

「うん、エアリとシェリハの都合のいいときにでも……」

あ、連絡先とか聞いちゃダメ……かなあ？」

目元を人差し指でぱりぱりと掻きながら、照れ隠しをするように梨星が言った。

梨星の一言でエアリの心の中は曇りから、雲一つない晴天へと変わる。

取り出した名刺を梨星に手渡すと、彼女はエアリの名を指でなぞる。名刺入れなど持っているはずもないので、財布の中に収納した。

朝まで語り明かしたい宴だったが、未成年の梨星を夜遅くまで連れ回す訳にはいかなないので八時半を過ぎた辺りで店を出る事にした。

外に出ると冷たい空気と降り出す雪とでかなり温度が下がっていた。

露出した肌に突き刺さる雪と寒さは氷の槍のようだ。

エアリは家に帰る前に寄るところがあると言うので、途中で別れることとなった。

梨星を無事送るよう言付けられたシェリハは、ひらひらと手を振りながら小さくなっていくエアリを見送った後、通りに出てタクシーを拾い、飛び乗った。

疲労を蓄積した眠気眼の運転手によると、秋を越えて久し振りのお客のようだ。

だがそれは通りのせいかもしれない。

シェリハ達が戻って来た道は、酒を帯びた者が多いからだ。

オフィス街を通り抜け、人が行き交う駅前を離れると車はどんどん坂を上がっていく。

都会を離れて、広がるのは田畑ばかりだ。

ところどころに家屋があり、家屋はいずれも年代を感じさせる一戸建てだ。

「梨星、こんなところから通学してるのか？」

「うん。…あ、もうすぐだよ」

梨星に指示されるまま料金を支払い、外に出ると都会暮らしの体に澄み渡るような空気が染みてきた。

澄んだ空気。

緑と雪のコラボレーション。

ビルひとつない世界は心を穏やかにし、清水で洗われるかのようなうだ。

梨星の家はどこなのかわからず戸惑っていると、梨星がずっと指差した。

目の前に見えた光景は何とも不思議な家だった。

ジャングルの中にぽつんと存在する、不自然な一見ごく普通の一軒家―そんな家だ。

外観の大半が緑で囲まれ、かろうじて見えているのは表札くらいだ。

扉の境界がわからないほど、緑が生い茂り見事なまでに同化している。

最早シェリハの頭には、？マークしか浮かばない。

「梨星の家…ここなのか…？」

「そうだよ。…あ、ちよつと待ってね」

困惑するシェリハを放置して梨星が表札に触れると、出っ張りが内側へと引っ込んだ。

すると青々とした緑が銀幕のようにゆっくりと開き、扉が現れた。遠くからカツカツ、と誰かが歩いてくる足音がする。

定期的なその音は小さい物から大きい物となり、どうやらこちらへと近付いてくるようだ。

ガチャ、と扉が開かれると一人の女性が姿を見せた。

「お母さん」

「あら、わざわざ送ってくれたの？

…寒いでしょうからどうぞ？」

梨星の言葉に体を強張らせながら、シェリハは歓迎されるまま中に入っていた。

15 不思議な滝見家

靴を脱ぎ、部屋へと通される中でシェリハは見たことのない数々の装飾に圧倒されていた。

玄関に入ってすぐのところにあつた、マーブル色に染められた裸婦をモチーフにした傘立て。

虹に跨がった天使が描かれた壁紙。

蔦に絡まれた蛇を象った蛍光灯。

市販されていない、オーダーメイドであろう物ばかりだ。

梨星と女性が何か話していたが装飾品に心奪われ、シェリハは耳を貸さず気にも留めていなかった。

（それにしても彼女は誰なんだろうか…）

足を広げて寛いでいるような格好をした熊を象った椅子に座らされ、シェリハはふと思った。

この家にいるからには身内の者だろうが、母親にして少し若いような気がしていた。

色気を帯びたダークブラウンの垂れ目を味付けする、肌に馴染んだブラウンのアイカラーが更に魅力を引き立てている。

シミひとつ見当たらない、平面的で健康的な肌。

目の色と同じ髪は肩甲骨まで伸び、傷みの少ないストレートが美しい。

やや吊り気味の細い眉は意思を表現しているかのようだ。

体にフィットした赤のタートルセーターと黒のジーンズを見る限り、余分な肉は見えない。

均整がとれており、メンテナンスを意識しているのが窺える。

玄関先で見た天使の壁紙に、奇抜ともいえる個性的な装飾品は梨星の父親の趣味なのだろうか。

シェリハが惚けていると彼女は温かいお茶と茶菓子を用意してくれた。

「ありがとうございます…すぐ帰りますので」

「そう言わないで。娘をわざわざ送ってくれたんだもの、どうぞ」
そう言っただけ彼女は梨星も椅子に座らせ、微笑を浮かべた。
どこことなく優しい印象は梨星に似ている。

親子なら当然のことだが、年の離れた姉妹と言っても通用しそうな外見だ。

「シェリハ、はい。」

さっきお金払って貰ったから。 ゆっくりしてっね」

シェリハの懷に紙が擦れたような音を残し、茶菓子を口に咥えながら梨星は足早に部屋から姿を消してしまった。

懷に入れられた物を取り出すと、くしゃくしゃになった千円札だった。

気にすることは無いのに…と思いつつ、千円札を懷に戻してお茶を啜った。

すると女性は微かな笑い声を漏らし、シェリハの隣の椅子に腰かける。

「あなた…日本語がお上手ね？」

もう聞き慣れたその言葉にシェリハは笑みで返した。

何も好きで外国の血を持っているわけではない。

他人にあれこれ吐いたところで何か変わることはないのだから、仕方ないことだがシェリハにとっては最も気にしていることなので、つい敏感に反応してしまう。

父に似た外見のせいで幾度となくからかわれる材料になってきた。

英語が話せないのはおかしいだの、日本で育ったからといっても日本人ではないだの好き勝手言われてきた。

悔しいことにそれは真実であり、ひっくり返すことはできない。

整形しようにも骨格という手の施しようがない難問にぶつかってしまふ。

だからもう半分は諦めている。

「…よく言われます。父の血が濃かったみたいで」

「あら、あなたハーフなの？」

なるほどね。…私の旦那もあなたと同じなのよ。
今は旅行中でいないんだけどね」

彼女は相槌を打つだけで、深い部分には触れてこなかった。

シェリハは有り難く思い、ここに来てはじめて笑った。

彼女の夫がハーフであることに共感を覚えて、安心してしまったからだ。

「そういえば名乗ってなかったわね。

たきみせいな
滝見星風よ、よろしくね」

「シェリハ・マルフリーフェです」

シェリハがそう言うと、星風は目を点にした。

その瞬間、シェリハもはつとする。

いつか聞いたことのある名前。

…そう、幼い頃に出会った若く美しい絵本作家。

そして星風にとって心に残っていたファンであった少年。

出会った場所で交わした言葉が二人の脳裏に浮かぶ。

幼く若かった二人が時を経て、再会したのだ。

世間はなんて狭いのだろうか。

「まさか…あの時の？」

「ええ。あの時俺は小さい子供だった…。

でもあなたは変わりませんね」

シェリハのセリフに星風は吹き出し、彼の額を小突いた。

少年なのに大人っぽい、お世辞の上手い男の子。

無意識なのかもしれないけれど、大人になっても変わらない。

大人になって覚えたこともあれば、忘れたこともあるだろう。

少しは世間擦れして成長したのだろうか？と星風は母のような気持ちになっていた。

「あなたもそういうところは変わってないわ」

「そんなことないですよ。

まさかあなたに会えるとは思ってなかったけど…」

そう、会えるはずなどない。

それが作家とファンである一般人の距離。

ファンレターを読んで貰えるだけでもまだましな方だ。

シェリハにとって星風は憧れの存在だった。

そして今も未来に向かって現在進行形だ。

時は過ぎ、シェリハは少年から青年になった。

デザイナーになるべく、専門学校で知識と技術を学んだ。

遊びや恋にかまけたい休日を返上して、スキルの向上に努めた。

すべてを夢に、星風に近付くため。

もちろん恋と遊びに命を懸ける当時の恋人達は、誰一人理解してくれることはなかった。

寂しいと嘆き、当然のことながら関係は長続きしなかった。

鳴り止まぬコールに、秒毎に恋人の名を刻むディスプレイ。

そんな女性達に重さを感じ始めたシェリハは以降恋人を作るのを止め、一人の時間を勉強に費やす為に日夜動き続けた。

そしてこうして二人は立場を変えて再会することができた。

絵本作家とファンではなく、絵本作家とデザイナーとして。

職種は違えど同じフィールドに立つことができたのだ。

お互いは仲間であり、好敵手。

培ってきたキャリアとスキルを武器に、どこまで渡り合えるのか楽しみでならない。

「私もよ。でもあなたがこの世界に足を踏み込んできてくれたから、また出会えたのよ。」

夢を叶えたあなたの力に期待してるわ、シェリハ」

星風はどこか含みを持たせる意味合いの言葉とともに、笑みを零した。

ひとしきり無言で視線を絡ませた後、星風は時計に目をやった。

受話器を取り、一言二言話すとガチャ、と切った。

どうやらタクシーを手配してくれたようだ。

時計を見ると10の針を指している。

そろそろ去った方がいいと思っていたところだ。

シェリハは星風の気遣いに一礼し、椅子を引いて席を立った。

「大したことじゃないわ。もう夜も遅いしね。」

またあなたと話がしたいわ。

夕方以降は家にいるから、暇な日に相手をして頂戴」

「断る理由なんてありませんよ。」

是非また寄らせて下さい」

久方振りの再会に震える胸。タクシーに揺られる中、シェリハの脳内は眠る前とは思えないほど活動していた。

初恋を覚えた初々しい少年のように。

あの日と同じ、胸の高まりがあった。

16 月寿と星凧

シエリハにとって刺激的な夜の翌日。

彼はハイスペースで仕事をこなし、夕方に会社を出た。

理由はひとつ、梨星の母・星凧に会う為だ。

手が届いた憧憬の的という存在。

積もる話は山ほどある。

体ひとつでは足りないくらいだ。

先輩と後輩として話がしたい―それ以外の他意はない。

というのは星凧は主婦としての仕事を全うしながら、創作活動を行っているからだ。

しかもデビューは主婦になってから、と遅咲きだった。

それまでは絵を描くことを好んだ訳ではなく、何年ぶりに筆をとったのが処女作だった。

彼女に絵を描かせたのは子供に対する愛情―それだけだった。

夫の月寿は画家だというから、彼の影響力があったのかもしれない。

そうだとすると、彼女の引き出された可能性というのは素晴らしいものだ。

努力だけでは片付けられない、独創性があつたに違いない。だからシエリハは彼女の作品に惹かれた―彼はそう考えている。

シエリハはわくわくしながら、滝見家の戸を叩いた。

すると星凧が快く出迎えてくれた。

「いらつしゃい。

首を長くして待ってたのよ。

…さあ、どうぞ」

頭の天辺にきれいな円を描く団子を作り、パステルピンクのレースとボア素材のシュシュで頭を飾っている。

肩を露出したオレンジのセーターに、ボトムスはデニムの膝丈ス

カートに黒のスパッツを合わせている。

カジュアルの中に大人を思わせるスタイルだ。

星風到手招かれて、昨日と同じ部屋に連れられる。

竹で編まれた籠の中に下敷きとしてレース柄のペーパーが敷かれ、ラスクとハニートーストが目一杯顔を出している。

食欲をそそる匂いが部屋中に広がっている。

ラスクを頬張り、ブラックのコーヒーを一口してからはっ、と思いつ出す。―今日の目的を忘れてはいけない。

コーヒーカップを口から離し、テーブルの上に置いた。

「星風、貴女は何故絵本を…？」

「月寿に影響を受けたのかしらね。」

でも絵に関心はあったけど、それまで自分の手で描くことはなかったのよ」

星風はコーヒーカップに添える指を空に向けて遊ばせながら話し始めた。

月寿。…良くも悪くも自由な若き画家。

束縛される事を嫌い、一般の若者達と比較するとかかなりの変わり者だった。

猫のように自由な生活を送り、好きな事を気のすむまで行う。

絵を描く事に行き詰まればマンネリ打破の為だけに飛行機に乗り込み、海外へも何も考えずにその身一つで行ってしまう。

そして暫くの間音信普通になる。

それが原因で彼は恋愛を長続きさせることができず、安定と安心を求める恋人達は涙を流しながら月寿から逃げるように去っていった。

その時の星風の職業は絵本作家ではなく、小さな本屋の店員だった。

特にこれといった目的もなく、本を読むのが好きという単純な理由から本屋の社員になった。

自宅もしくはアトリエが近かったからか、月寿は度々星風の勤める

本屋にやってきた。

手に取るのはいつも背景がメインの資料ばかり。

不思議に思った星風が話し掛けたのが始まりだった。

『いつもこうだった本ばかり買われるんですね。もしかして絵を描かれたりするんですか？』

『仕事ですけどね。』

これでも画家の端くれなんですよ』

うつすらと日焼けした健康的な素肌に、あまり肉付きが良いとは言えない頼りなげな二の腕を露出したタンクトップと、ブーツカットジーンズを身に着けていた。

顔の造形はまるで石膏で造られた像のように、パーツそれぞれが整っていた。

目・鼻・口・眉、そのどれもが喧嘩せず、調和していた。

月寿の言葉に星風は驚愕した。

（こんなにきれいな画家もいるの？）

星風の想像する画家とはかなりイメージが違っていて、彼女は目を丸くしてしまった。

『画家：全然見えませんでした』

『よく言われます。まだ卵みたいなものですから、貫禄を身に着けないと』

決して嫌味ではなく自然に出た言葉だった。

彼の容姿に惹かれたのか、彼の不思議に惹かれたのかはその時はまだわからなかった。

時間は二人の距離をどんどん縮めていった。

店員と客の関係から、食事するような仲にまで発展した。

それが星風にとって不思議でならなかった。

こんなことは想像できなかったからだ。

『私と貴方は違うわ。だから私は貴方に興味があるのよ、きっと』

『…いや、星風と俺は似ているんだ。』

だから気になる、興味がある…好きや嫌いなんてその後について

くるもんだよ』

理解できなかった。

知らない世界に興味はある。

でも異性としての好きではない。

今まで付き合った男性にはないモノを持っている、初めて見るタイプ。

（…変な人。）

その時星凧は月寿のことを、その程度にしか思っていなかった。

17 茨の通過点（前書き）

数か月振りの更新となっていました。

「言の葉の栞」の更新ばかり優先してしまい、申し訳ありません。なかなか話が進まず、もしかしたら止まってるもしくは終わったのかも？と思っていらっしやる方もおられるかもしれませんね。

星風の過去話を聞いて、自分の仕事の姿勢に不安を感じるシェリハ。仕事の詳細はこれから度々出そうと思っています。

17 茨の通過点

何度か同じ時間を過ごして、わかったことは『変わっている』ということだった。

猫のように気紛れに電話をかけてきては、挨拶もなしに会話を始める。

またある時は仕事が終わると顔を出して、食事に連れて行って家まで送ってくれる。

けれどただそれだけだった。

別に何かを期待していた訳ではなかったけれど、穏やかではいられない。

友人のボーダーラインを飛び越えたい…そう思うようになってから、その時から星風は恋に落ちていたのだ。

だが時既に遅く、内なる恋愛感情に気付いたところで星風は行動を起こそうとは思えなかった。

月寿は変わり者だが、女性に好かれる男性だろう。

外国人と見紛うような容姿。

普段はアトリエに籠っているが、画家のイメージを一掃するほど都会的でいつも飽きない話題を提供してくれる。

その点だけ考えても、女性に困る男ではない。

それほど彼は星風にとって魅力的な人間だった。

星風が恋に悩んでいることなど知らず、ある日彼からのポストカードが届いた。

どうやらまた放浪しているらしく、今回はフランスのようだった。息抜きが目的でやってきたとの事だが、相変わらぬマイペースな文面に星風は微笑せずにはいられなかった。

(…仕方のない人。)

国内では見慣れない風景と一緒に写る彼の伸び伸びとした表情から、彼は何にも縛られていないことが見て取れる。

当てのない旅に身を投じ、日々メタモルフォーゼを繰り返す雲のように自由な彼。

自身の心の言葉に従い、第三者の声に耳を傾けるものの、断固として意志を曲げない。

星風はそんな月寿を羨ましく思っていた。

大人になれば環境が変わり、責任が付加される。

そして生きる為には思い描いていた自由や夢を手放さなければならぬこともある。

学校を出て現職に就いた星風ではあるが、安定は得れたものの将来の目標はこれといったものはまだなかった。

月寿のように何かになりたいだとか、何をしたいというものがないから別に構わなかったのだが。

彼といくと改めて考えさせられてしまう。

無駄な時を過ごしてはいないか。

何かしなければならぬことがあるのではないかと。

彼の口からそういった言葉を受けたことは一度もない。

だが彼の存在自体が彼女に何らかの影響を与えているのは確かだった。

そうだ。あれこれ悩むよりも、彼に会おう。

後悔するのなら、行動してから後悔した方がいい。

彼からの便りによると月寿が帰国するのは一週間後。

星風は強い決意を胸に、時を待った。

一週間後、星風はポストカードを手に彼が住む街を訪ねた。

賑やかな都会の裏側に閑静な住宅街がそこにあった。

目と都会に疲れた心を癒してくれる少しの緑と、噴水広場がある公

園がある。

人気の少ない道を進むと、ログハウスのような家が星風を出迎えた。木材に一切手を加えておらず、シンプルで無駄がない。

家の側には無造作に花々が植えられていて、小さな花畑のようなものが広がっている。

色鮮やかなパレットのようだ。

小動物が棲むようなサイズのログハウスは郵便受けだろうか。

凝り性なのか、ピンクゴールドの鍵は莖を象っており、花卉がリアルに再現されている。

郵便受けには『滝見』と書かれている。

重厚な木材の扉をノックすると、月寿が無言で現われた。

薄手の白いシャツに黒のカーゴパンツ。

ラフな格好でありながら、アイロンが掛けられているのか皺が見当たらない。

それは彼の几帳面さを物語っている。

「突っ立ってないで入ってくれ。」

大した持て成しはできないけどな」

「別にいいわよ、気にしなくても」

天の邪鬼な返事を返した後、彼の後ろをついていく。

畳柄のフローリングされた廊下を歩いていくと現れたのは、生活するのに必要最低限の物しか置いていないシンプルな部屋。

壁際にはピンク色の大きなキャンバスが独り寂しく立てられている。

モノトーンの色調で統一された世界の中に、ピンク色だけが浮いて見える。

キャンバスの中には花卉で作られた仮面を装備した、生まれたままの姿で座り込む少女の絵がそこにはあった。

ベールを想像させる真っ白な長い髪は彼女の秘めたる部位を隠し、カーテンのように地面に広がっていた。

割れた仮面から覗く大きな瞳は磨きあげたエメラルドのような色を持ち、輝きを放っていた。

赤ん坊のように上気した肌や頬がやけに現実味を帯びていて、星風は誘われるように手を伸ばして触れてしまった。

指先に張り付いたように残る、ザラザラとした質感。

パウダー状の絵の具か何かだろうか。

ぱーっと見つめていると、いつの間にかウェットティッシュを差し出してくれる月寿の手があった。

「速乾性の絵の具でもない、女性なら誰もが使う道具が珍しいのか？」

「これは何？」

「アイシャドウにチーク、肌はファンデーションだな。

絵具とはまた違った味わいが出てなかなかいいんだ」

「そう…こんな使い方もあるのね」

星風は囁きに似た声で言った。

化粧品は女が自分をより美しく、飾る為に使われる物だと思っていたから、絵具の代わりに使うなどという発想は考えられなかった。

もう既に彼女の虜になってしまっていた。

正しくは彼の描く彼女、かもしれない。

美しい人は沢山いるけれど、彼女のような美しさを持った女性など見たことがない。

美しい人が高価なドレスや、世界にひとつしかない宝石を身に着けても、彼女の前ではただの布切れと石ころなんだろう。この絵は彼の精神を表したかのようなのだ。

自由で見る者を惹き付け、強烈な印象だけを残して風のように去ってしまう。

まるで香水のようだ。

「！」

ふと星風ははっとする。自分は彼の作品を見る為にわざわざここに来たわけではない。

自分と彼の気持ちを確かめる為に来たのだから。「星風、紅茶とコーヒーどっちがいい？」

そこに座っててくれ」

「…じゃあアイスミルクティーでお願い」

椅子に腰掛け、彼が台所に消えていくのを見送る。

カチャカチャという二つのティーカップが奏でる音を聴きながら、星風はこの後どうやって切り出そうか考えていた。

彼との会話の中に彼の真意の片鱗すら窺えない。自分の一方的な想像だけが深くなってゆくばかりだ。

あれこれ思案しているうちに月寿がトレーを持って戻ってきた。

ひとつのティーカップの中で浮かぶ紅茶は天に向かって湯気を放っている。

もうひとつは自分が注文したアイスミルクティーが入った、グラスのコップ。

隣には一口サイズのカラフルなクッキーが皿の上に盛り付けられている。月寿の手作りなのだろうか。

作っている彼を想像できないが、所々少し焦げぎみのクッキーがあることを考えると彼の手作りに違いないのだろう。

「…自分で作ったりするの？」

「いつもだ。外食してたら金が嵩むからな。」

家で作った方が安くつくんだ」

彼の言う通り外食ばかりの生活ではないことは、きれいに整頓された部屋達が物語っている。

タッパーの中に常備している米。

小分けされた調味料。

全く散らかっていないキッチン。

まるで家政婦か家庭的な彼女でも住んでいるかのようだ。

(…やめよう。)

諦めを振り払い、用意してくれたアイスミルクティーを頂くことにする。

グラスコップに口を付け、ほんのり甘いそれをぐくりと飲み込んだ。グラスコップに唇の形の薄いルージユを残し、月寿の目を捉える。

「ねえ、月寿」

「何で呼んだの？…だろ？」

別に暇潰しに呼んだわけじゃない。

話があつたから…」

急に視線を逸らして、珍しく頬を仄かに染めている。

星風の中にある月寿のイメージといえば、ポーカーフェイス。

自由に落ち着いていて、動じることはない。

そんな彼が今は幼い少年のように見える。

若干苛々していた星風だったが、彼の新たな部分に触れたような気がして愛しささえ込み上げてきた。

「月寿、話って…」

「ああ！わかつた、言うよ。」

あの日からずっと好きだったんだ。

自分の事を理解してくれる女なんていなかった。…温度差があつたんだろうな、きつと」

月寿は諦めるように溜め息を吐き出した。

同じ心情でいたことに星風は嬉しさのあまり、口許を緩める。

満足そうな笑みを生んだ張本人である月寿は、頬を染めたまま恥ずかしそうに星風を見つめている。

「どうにか言ったらどうなんだ？」

はいとかいいえとか…何かあるだろう」

「そうね。どちらか選べって言うんなら、はいかしら。」

私もその用事で来たんだから」

月寿を上目遣いで捕える。

その視線が示すのは肯定のみ。

二人の間に必要以上の甘い言葉など必要ないことを、月寿と星風は互いに理解していた。

この日を皮切りに二人は恋人同士となり、長い月日を待たず結婚の

道を選択した。

不安定な職業と理解しながら、画家の道を選んだ月寿についていくことは生易しいことではなかった。

独身時代の生活を恋しいと思ってしまうほど、質素な暮らしを送る日々が続いた。

次第に元々細身であつた二人の身体は、目で変化を感じるほど痩せこけていった。

このままでは二人とも共倒れになってしまう。

そう感じた彼は星風^{ほしふう}にこれ以上ひもじい思いをさせまいと、睡眠時間を削つて絵を描き、悪天候の日も彼は絵を持って歩き続けた。

もう限界かもしれないと諦めかけていたある日の夕方、一人の男が疲れ切つた星風に声を掛けてきた。

『君は絵描きか。その絵を見せてくれないか』

『はあ…絵が好きなんですか？』

『ああ、私はこういう者なんだ』

そう言つて名刺を渡してきた男の名は洗名織大^{あらいなおりひろ}。

小さい出版社に勤めるデザイナーだった洗名との出会いから、月寿の生活は少しずつではあつたが楽になつていった。

画家として絵を描くだけではなく、ありとあらゆる職業の人々と一緒に仕事をしていくうちに、自身の幅を更に広げた。

そして二人は女の赤ん坊をもつけた。

それが梨星である。

やがて大きくなるだろう梨星に何かを残したい—そんな気持ちから

『RISE』という絵本が生まれた。

絵の才能があつたわけではない。

特別な感性があつたわけでもない。

彼女を動かした衝動が、星風を絵本作家への道に引き込んだのだ。

星風が思い出すように瞼を閉じ、最後に付け加えた。

「自分の意思を持ち続けていれば大丈夫よ。」

だけどそれが一番難しいことなの。
でもあなたなら…大丈夫ね？」

その道は決して易しい道ではない。
ビジネスだけではなく、プライベートも偏見による風の冷たさをこれまでに以上に痛感することだろう。

仕事の苦勞ならエブミアンテの仲間達の助力があつたから、彼女に比べれば自分は恵まれている。なのになぜこんなに胸が騒ぐのだろう。

ティーカップに頼りなげで不安な表情の自分が映っていた。

18 険しき道の心得（前書き）

これで星風とシェリハの語らいはラストです。

これから梨星とシェリハの絡みを深めていききたいと思いますが、かなり時間が掛かりそうです。

18 険しき道の心得

憧れに近づく夢の為、情熱を武器に勉学に勤しんだ。
成績は中の上。

決していいものではなかったが、日々の努力の積み重ねで結果があるわけだから、原因は自分にある。

入学したての頃は溢れ返るほどの学生がいたというのに、卒業式には数えるくらいの人数しか残っていなかった。

夢に弾かれた友を思いながら、残った友たちと地獄のような日々を耐え抜いた。

就職先は思いの外、すんなり見つかった。

会社の大小に興味はなかったが、社員の過半数が外国人という点に魅かれて、入社した。

専門学校以外の学校では外国人は珍しく、好奇の目で見られていたことが何よりも苦痛だった。

それ以上に偏見を持たれたことに胸を痛めたものだった。

母親の母国で生まれ育ち、英会話に興味も何もない人間が語学堪能なわけがない。

父親が米国人というだけで誤解され、それを跳ね返せるような後付けさえ用意できない自分を恨めしく思った。

入社先は自分と同じような外国人や、ハーフ・クォーターの社員ばかりだったから安心だった。

だがそんな安心は次第に不安に変わってゆく。

勤務時間は8時間ほどだが、終電ぎりぎりになるのは珍しくなく、納期が間に合わない日は泊まり込む日もあった。

勿論それが永遠に続くわけではなく、夜になる前に終わる日もあった。

だが数えてみれば、割合の数値は小さいものだった。

希望していた職場を体験することもなく、社員となったシェリハは

身体精神ともに苦痛を感じはじめていた。

あれだけ憧れていた仕事に嫌気さえ覚え、何の為に齷齪働いているのか分からなくなった。

そんな時に声を掛けてくれたのが、ドーリーだった。

「あなた…そういうえば絵本が好きだったと言っていたわね。

夢と情熱だけで夢を伝えることが、こんなに難しくて辛い事だなんて思わなかったでしょう？」

ただどね、どの作業もこれからのあなたを助けてくれるわ。

あなたが夢を忘れさえしなければね」

甘い考えを持っていたシェリハの心に突き刺さったその言葉が、彼を成長させるきっかけとなった。

過酷な毎日には果ては見えなかったが、仕事をやり切った時の達成感とクライアントの「ありがとう」の一言で彼は思った。

自分はきつとこの為に働いているんだ。

やるべきことをやり、知識と技術を身に付け、未来に向けて今は準備を整えよう。

やりたい事はそれからでも遅くはない。

次第に一人でも仕事ができるようになり、仕事を任せられるほどに成長した。

だが自分だけの力だけではない。

社長をはじめとする社員、幸福と不幸を分け合ってきた同僚たちがいてくれたからこそ、今の自分があるのだ。

彼らの手助けがなければ、右も左も分からず途方に暮れていたことだろい。

だからこそシェリハはもし自分が月寿のように孤立し、誰の助力も得られず、一人心を強く持つて夢に向かって駆けることができただろうかと、ふと考える。

誰かに支えられ仕事をしているのに、行き詰まるようではきつと無理だったに違いない。

月寿とは親子ほど年が離れている。

年が離れていれば時代が違う。

時代が違えば環境や扱いにも変化がある。

月寿は外国人ではないが、外国の血を色濃く継いでいるその容姿のせいで、きつとそれなりの扱いを受けてきただろう。

それでも挫けず、心が折れず夢を叶えたのは、彼の信念と強い意思が生んだ努力の賜物だ。

きつとこれから月寿が味わってきた苦しみを、シェリハも体験することになるだろう。

だが誰もが通る道を避けて通ることなどできない。

ならば精一杯足掻いてみせよう。

誰に強要されたわけではなく、自分自身が茨の道を選んだのだから目に見えない明日のことなど知らなくてもいい。幼き日の希望だけ頼りに歩いていこう。

明るい未来を想像していたら、次第にシェリハの口許が緩みはじめた。

そして無意識に笑声が漏れる。

シェリハを静かに見つめていた星凧も、つられて笑いを零していた。「今日はあなたに会えてよかったわ。

結婚する前の私なら、ファンに出会える楽しみを知らなかったんだもの。小さかったファンが今は成人を過ぎた大人で、夢を持ってくれたならこれ以上の報酬はないわ」

口許に手を添えながら、微笑む星凧の目尻に小さな皺達が集結する。幼子だったシェリハが成人を過ぎたのだから、星凧が老けて見えるのも当然と言えば当然である。

だが彼女の精神はあの頃と変わっていない。変化がないというわけではないのだろうが、気持ちの基盤は同じものだ。

子供が熱く夢を語れば、幼く静かな情熱で応えてくれる。

瞳の輝きは世界に落とされたばかりの子供のような、無垢に彩られ

ている。

十年後、二十年後の自分も彼女と同じように、少年時代の輝きのまま、いられるだろうか。

子供の時のように壁にぶつかったとしても、守り支え包んでくれる手はない。

強かに逞しく、前を向いて生きていかなければいけない。

どの世界でも弱者が強者の食材とされてしまうからだ。

「今日はありがとうございました。」

まさかまたあなたに、こんな形出会えるなんて思いませんでしたけど……」シェリハははにかみ、頭を掻きながら言った。

彼女がいくら年を取っていたとしても、シェリハにとっては少年時代に出会った若く美しい姉のような母のような、少し曖昧な存在なのだ。

だから視線を絡ませて話したり、直視したりされたりすることが恥ずかしく感じる。

「世間は広くて狭いものだわ。」

私だってまさか……あなたと競い合える日がくるなんて、思ってたなかったんだから。

でもこれからは特別な約束をしなくたって会えるんだもの。

シェリハ、自分に嘘を吐かないで、時々狡くなりなさい。

……少しだけね」

星風は子供に向けて歌う子守歌のように、優しく言った。

だがシェリハは全く別の解釈しかできなかった。

この世界で生き続けることは生易しいことではない。

汚れを知らぬ純粹さだけでは、いつかは壁にぶち当たる。

そして負の迷路に迷い込み、悩み続けては自分を責めることになる。だから時々でいい。

疲れ果てた自分を甘やかす狡さを持って、と。

シェリハの耳にはそう聞こえてしまった。

19 華美なる企みが喚く（前書き）

シエリハと星風の会話がようやく終了します。
本当に長かった…

ドーリーの企みは果たして…

19 華美なる企みが喚く

外の景色が夜色に染まり始めたのを理由に、シェリハはそろそろ帰ろうと立ち上がった。

星風は残念そうにしながら、玄関先まで見送ってくれた。少し長い帰路の途中、考えるのは今日あったことばかり。

家に帰り、BGM替わりにつけたテレビの内容が、頭に入らない。寝間着に着替えてベッドの上で横たわっても、目が冴えて眠れない。一体自分の体はどうしてしまったんだろう。

明日のデートが楽しみで眠れない、そんな興奮に酷似している。だが明日の為に眠らないわけにはいかない。

明日が休日ならともかく、今週の出勤日はまだ残っている。

この時世に多忙だと嘆くのも贅沢な話だが、シェリハが勤務する工ブミアンテは人手が少ない。

増員しても多忙に耐え切れず、辞職してしまうからだ。

一時は辞めようかと思っていたほど、激務が日常に溶け込んでいる。明日のことを考えると、憂鬱で仕方ない。

だが休日と給料の為に憂鬱に耐えなければ、シェリハの未来はない。

（横になってたら、知らないうちに寝てるかもしれないしな…）

シェリハは布団の中で横になり、目を閉じると暗闇の世界が広がる。何も考えないでいようと思えば思うほど、何かを考えてしまう。

そういえば彼女はもうしているんだろう。

あの撮影以来姿を見ていない。

無邪気な笑顔と少女のように純真無垢な彼女。

何故か雲のように白く、硝子のように透明感のある、優しい笑顔が脳裏に浮かぶ。

元気でやっているだろうか。

きつと課題の山で忙しない毎日を送っていることだろう。

梨星のことを考えていたら、ゆつくりと意識が遠退き始めた。

毎日同じ朝がやってくる。

会社に近づく度に、様々な服装の人々が行き交う。

着物やサリーといった民族衣装。

一見で職業がわかる、制服。

オーダーメイドで作ってもらったような、奇抜で個性的な服装。

出身国はそれぞれ違うのだから、人が集まれば色んな人間がいるのは当然である。

ファッションはその人が持つ主義や主張、志向を体现しているかのようだ。

中へ入ると、背後から小さな靴音が聞こえてきた。

徐々にその音は大きくなってゆく。

カツ、カツ、カツ。

ヒールと思われるその音のボリュームが最大に達したその時、シェリハは振り返った。

容易く想像はできた。

攻撃的な派手なメイクに、ピンヒールの赤いパンプス。

このトレードマークを装備しているのは、知る限りではドーリーだけだ。

黒のタートルネックワンピースが、細い腰と形のよい胸を強調している。露出した腿を黒のニーソックスとガーターが引き立てている。シェリハの格好といえば、黒のジャケットに合わせた同色のツータックパンツと、パステルブルーにネイビーのストライプのネクタイといった、一般的なサラリーマンと同じスタイル。

爽やかで清潔感があるが、ドーリーと比較するとあまりに地味過ぎる。

シェリハは色があるものをあまり好まない。

挑戦が難しい色だという認識があるのが一番の理由だが、明るい色より落ち着いた色の方を選んでしまう。

無難かもしれないが、体を引き締めて見せてくれるからだ。

その服装は目立つことが好きではない、彼の地味な性格を表現している。

「おはようございます」

「おはよう。今日も寒いわねえ」

下心はまったくないが、ちらりと踵になっている腿を見る。

秋や冬に肌を露出すれば、寒いのは寒いに決まっている。

寒いのが嫌なら厚着すればいいじゃないか、と言いたかったシエリハだったが、人様の服装にけちをつけるほどの立場ではない。

ショートパンツにはじまり、ミニスカート・チューブトップにワンピース。

ファッションを楽しむということは、寒暖に耐えなければならない事と同義なのか。

まったく女性の心理というものは理解できない。

「そういえばエアリがモデル決まったんですって？」

ドーリーの口角が引つ張られたように上がる。

ドーリーは手を空に泳がせながら、細く長いけれどしなやかな指先を、口許に添えながら言った。

社長としてあちこちを飛び回っていると言えども、社員の仕事にもしっかりと気を配っていることに關しては感服するばかりだ。

モデルが決まった事を既に知っているなら、撮影をした事もきっと知っている筈だ。

「ええ、まあ」

「今学生なんですって？」

エアリのお眼鏡にかなうなんて中々見つからないと思っていたけど、まさか学校に紛れているとはねえ…今から楽しみね」

企みを含んだどこか怪しい笑みを浮かべるドーリーを、シエリハは横目でちらりと見る。

ドーリーがこんなにも楽しみにしているのは、社員の自立を心の底から望んでいるからである。

そもそもエプミアンテ社を作るきっかけとなったのは、実務経験が全くない卒業したばかりの学生達を、一から育て立派なクリエイターとして羽ばたかせるため。

日本で活躍するのに一番ネックとなってしまったのが、自分の国籍日本人ばかりがいる環境では、独りで戦うことができなかった。

だから彼女は考えた。

国籍ではなく、実力で評価してもらえ環境を作ろう、と。

だが実務経験のない者は、信頼性がない。

それならば自分の会社で仕事を学び、覚え、自分の力にして貰えればいい。

そのためエプミアンテの社員は入社後、すぐに仕事を与えられることはない。

まず研修期間として、一年間先輩社員とともに仕事をしていく。常に先輩社員にマンツーマンで色々なことを教わりながら、成長していくこととなる。

研修期間が終了し、独りで仕事ができるようになるまでの期間は人それぞれだが、単独のブランドを作れるようになれば独り立ちに近い。

自分のブランドに専念したい者は退社し、自分を高める為に多くの仕事かしたい者は会社に残る。

だからドーリーは社員が自らの手で自らが手掛けた商品を作れるまでに成長してくれることが、何よりも嬉しく感じている。

だがなかなかそこまでに至らず、見送った社員の数は一握り。どうしても会社を辞めるといふ社員を、見送った人数は数えきれない。

エプミアンテで働いているシェリハも、そろそろ自立を考えている。他のクリエイターとのコラボレーションは勿論のこと、クライアントの期待に応えてきたつもりだ。

完璧には遠いかもしれないが、結果は残してきた。

それでもまた自己の研磨を理由に、エプミアンテに残留し続けているのは、自分のやりたいことが中々纏まらないからだ。

依頼主や他のクリエイターの為に企画や物作りに携わってきたが、自分だけの物となると頭がうまく働かない。

考える度に焦燥感を覚え、肩身の狭い思いをしている。

「経験がないからどうなるかと思いましたけど、カメラ前になると顔が変わるんです。

吃驚しましたよ」

シェリハの言葉を聞いてドーリーの目が光って見えたような気がした。

カメラを向けると一般的には緊張してしまうものだ。

相手が友人ならともかく、他人なのだから。

そして精神状態は顔に出る。

でも彼女はエアリのブランドイメージの少女を演じ切った。

エアリがイメージする、架空の中に生きる少女を。

梨星は決して格別美人なわけでも、スタイルに恵まれているわけでもない。

どちらかというと、どちらかとも武器になるとは言い難いものだ。

だがそれを補う魅力があるから、エアリの目に止まったのだろう。

ドーリーが目を光らせるのも、わからなくはない。

「へえ…いいじゃない。

また来てくれるのかしら？」

「来ると思いますよ。

出来上がり見たいだろうし…」

潤いを満たしたドーリーの唇は歓喜を表現している。

ただでさえ人数が少ない、この会社の担い手だ。

有望な人材を見掛けたら、狙いを付けずにはいられないのだろう。

彼女が変な方向に走らないことを祈りながら、自分のデスクに向かった。

20 甘辛く味付けされた石心（前書き）

副社長のルハルクが登場です。

お気付きかもしれませんが、彼の名前を変更しました。

20 甘辛く味付けされた石心

自分のデスクには、きれいに山積みされた書類で作られた塔がある。自分のデスクだけではない。

左も右も同じ状態だ。

「有り得ない……」

シェリハは目を丸くして、吐き捨てるように呟いた。

今日中に帰宅できるのだろうか。

どう考えても不可能に等しい。

気落ちしていた所に突然肩をぽんと叩かれ、シェリハは振り返る。

緑に近い青い海辺に、鷺が立ち尽くしている柄の着物。

海の色は上にいくにつれ、白とのグラデーションになっているのでやや地味な印象を与えている。

帯は黒色で下半分のみ、白でレースが描かれている。

髪は不自然なまでに艶がある、純粋な黒。

前髪は横に流し、そのまま垂らしている。

前髪の隙間から覗く眉色が黒ではなかったことから、髪はウィッグかエクステンションであると思われる。

「エアリ、他人事じゃないだろう」

「本当困るわよね。嶺猫がいないだけで、こんなになっちゃうんだから」

はあ、と溜め息を付け加えて、エアリは言った。

嶺猫とはエブミアンテにただ一人の事務員だ。

彼女が入社するまでは副社長であるルハルクが行っていたが、嶺猫が入社するにあたり一切の事務作業を委任した。

ルハルクの指導の甲斐あって、今ではいなくてはならない存在だ。年はシェリハより少し下だが、童顔らしく中高生にしか見えない。そして甘すぎるソプラノボイスが更に年齢を低く見せる。

清楚で愛らしいガリーリなカジュアルを好み、ドーリーの魅力とは

対照的だと言える。

タイピングに関してだけいえば右に出る者は、ルハルクを除けば存在しない。

仕事中の嶺猫は欠伸をしたり、眠そうな素振りを見せたりと印象はよくない。

だが常にスピードを落とさず、正確な仕事を熟しているから文句ひとつ言う者はいない。

個性よりも協調を大切にする会社なら、首切りは確実だろう。

マイペースで頑固な彼女は仕事で結果を残すことが、協調より個性を買ってくれた会社に対する酬いだと思い、毎日働いている。

会社に事務員が一人しかいないことも問題なのだろうが、彼女が一日休むだけで会社は大変なことになってしまふのだ。

「事務増やして貰わないとなあ。

一人じゃきついだろ」

「そうでもないみたいよ？

ほら、あそこ」

カチャカチャカチャ。

エアリが指差した先に、キーボードを叩くルハルクの姿があった。然もスピードが並ではない。

視線はディスプレイに向けられていて、指先などまるで見ていない。そんな状態でも消去のキーを押すことはない。

シエリハとエアリの目には、それが神業にしか見えなかった。

「シエリハにエアリ」

ルハルクが二人に背を向け、ぼそりと呟くように言った。

相変わらず指の動きは止まっていけない。

二人は視線を絡ませながら、妙な緊張感を感じていた。

ルハルクは決して気難しく、頭の固い人間ではない。

どちらかと言うなら親切で、面倒見がよい。

それなのに緊張感を感じさせるのは、彼が社長の右腕であり、肩書きに似合いの実力を備えているからなのだろう。

「つまらん仕事だろうが、これも仕事のうちだ。

嶺猫がいない分カバーに回されるのは、仕方のない話だ。

わかるな？」

「つまらないなんて思っちゃいけませんよ」

シェリハが言い返すと、ルハルクは口許を緩めた。

ブラックホールのように、底が見えない黒い瞳が二人を映し出す。椅子を回転させ、二人の前に向き直る。

「…顔が言っていたんだよ。

しっかりな」

そしてまた体の向きを変え、ディスプレイを見つめながら口を閉じた。

再開するキーボードが作り出す音が、二人にプレッシャーを与える。この無言が一番恐ろしいのだ。

二人は仕方なく持ち場に戻った。

ディスプレイに向かい合って十分、シェリハは溜め息を吐き、コーヒーを一口飲む。

時計の針を気にしても、一向に時間は過ぎてはくれない。

常人ではない者の真似事をして、どうにかなるわけではない。

捌くスピードそのものが違うのだから。

そもそもシェリハはタイピングが得意ではない。

普段は絵を描く事が多く、タイピングする時は企画書を作る時くらいだ。

こんなふうに時間に追われて、大量の活字を打ち込む機会自体が少ないので、彼に合わせていたら腱鞘炎になってしまいそうだ。

シェリハは紙の塔を少しでも切り崩す為、感覚がおかしくなってしまう指先でタイピングを再開した。

それからしばらくして、時計の針が十二時を指した時。

やっと解放されたと思い、シェリハが立ち上がる。

彼が動くよりも早く、ルハルクは何処かに素早く電話を掛ける。

「エブミアンテのルハルク・マリエイドですが。
日替わり弁当三つ。

あとは…ああ、マンゴープリン三つ追加で」

相手が電話を切るのを待ってから、自分も電話を切る。

この作業が終わらない限りは外には出れない…シエリハはそう悟った。

シエリハを見ると、彼はニヤリと笑った。

「…残念だったな。

終わるまでは外に出すつもりはないからな。

ちなみにデザートは奢りだが、弁当は自腹でよろしく」

そう言い残し、ルハルクは何処かに去っていった。

やがて弁当とデザートが到着する。

できたての味は美味である筈なのに、やる気とともに削がれて味気無く感じてしまった。

短い夢を味わった後、持ち場へと戻る。

マンゴープリンの甘い口どけを、コーヒーで調和を取る。

昼食後の眠気覚ましには丁度良い。

気は重いが、ディスプレイと向かい合う。

チラチラとキーボードを見ながら、文字を打ち込んでいく。

(…これが毎日なんて耐えられないな…)

活字だけが視界に飛び込んできて、ふと思う。

事務処理に追われる日々なんて、きっと耐えられない。

それはなぜだろうか。

企画の段階ではコンセプトやテーマなど、文字で説明することも少くない。

だが最終的に用いるツールは、絵を選んでいる。

絵本を好きになってからは、文字よりも絵の方が愛の比重が大きいからかもしれない。

情報収集や教養を深める為に本を読む事はあるが、強く惹かれるとまではいかない。

もしそうであれば、事務の仕事にも精を出せることだろう。

書類を捌き始め、もう数時間が経過した。

太陽は布団の中深く潜りはじめ、月が目覚めの準備をしている。

時計の針が4の数字を指したところだ。

紙の塔の高さかというと、軽く見積もって半分くらいといったところか。

吐き出して幾度目かになる溜め息を飲み込んで、再び文字の打ち込みを始めたシェリハの視界に指先が飛び込んできた。

手の甲を中心に浮き出た血管。

骨張った指先は男性らしさを感じさせる。

現在この場所にいる男性はルハルクとシェリハだけだ。

腕の持ち主はルハルクだろう。

自らに課されたノルマだけでは飽きたらずに、シェリハの仕事を手伝うとでもいうのか。

ルハルクは無言のまま、書類を半分ほど掴み取った。

「だめですよ、それは俺の分ですから」

「そうかもしれないが、俺が暇になるだろう？」

どうせやるなら誰がやるうが、構わないだろう」

口調は淡々としているが、これは彼なりの優しさの照れ隠しなのだろう。

ルハルクの絶妙な飴と鞭の使い方がとても好きだ。

上司の肩書きを武器に偉そうな態度を取ることもなく、どうでもいい話にさえ耳を傾けてくれ、冷たくあしらわれた社員はいないと聞く。

誰にも分け隔てないこの態度。

仕事に対する情熱と徹底ぶり。

だから彼は社員に慕われ、愛されているのだ。

男女問わず彼に憧れを抱くのも、わからないでもない。
トウルルル。

電話音が静寂を切り裂いた。

ルハルクが電話を取り、何か話をしている。

だが相手は得意先ではないようだ。

敬語を使うこともなく、笑い声が零れる。

口調がどことなく優しく感じるから身内か年下の人間だろう。

ルハルクは電話を切ると、シェリハの元に再びやってきた。

「シェリハ、手を止める。

大切な客人がくるらしい。

例のモデルの子だ」

そう言い放たれた瞬間、シェリハは時が止まったのかと思った。

驚きで大きな瞳と口が開かれた。

21 新入社員誕生？

梨星が来るというので、シェリハは写真を持って応接間に移った。アイボリーで統一した部屋の雰囲気はリラックスを誘うように優しいものだ。

テーブルを囲むブラウンのコーナーソファ。

白の壁紙にレースと花柄でシックにまとめている、アイボリーのカーテン。

ドリーリーの私室が華美であったことを考えると、ルハルクの趣味だろうか。

華やかさはないが、上品で万人が受け入れられるものだといえるだろう。

無難に温かいコーヒーとレモンティー、大抵の女性は甘い物が好きなので、ショートケーキを用意して彼女を待った。

コンコンコン。

応接間のドアがゆっくりと開かれる。

膝上丈のベージュのトレンチコート。

ラウンドトゥの黒いパンプス。

寒さから頬はチークを施したように、血色が良い。

肌に馴染んだブラウンのアイシャドウが、彼女の印象を更に柔らかく見せている。

「…ごめんなさい、突然」

「寒かっただろう？どうぞ」

梨星は部屋に入るなり、トレンチコートを脱ぐ。

デニムに裾をボアで飾ったショートパンツから、黒のニーソックスを穿いた白い脚が晒される。

トップは横広のラウンドネックにパフスリーブの白いニット。

紺色のリボンがひとつ、袖の上でひっそりと自己主張をしている。

梨星がコーナーソファに座るのを待ってから、自身もゆっくりと

腰掛ける。

「この間の写真、見せて貰ってもいい？」

「ああ、どうぞ」

シェリハは封筒から数枚の写真を取り出した。

モノトーンの洋服と黒髪が白い肌を際立たせている。

表情のバリエーションが富んでいることにびっくりしているのは、モデルの当人である梨星だ。

普段の自分の表情ではないと、写真を食い入るように見る目が物語っている。

まだ知り合って間もないから熟知はしていないが、素直で明るく擦れた所もなく、誰からも愛されるようなキャラクターだ。

だがお世辞にも色気を感じるとは言い難い。

どちらかという色っぽいという言葉より可愛らしいという言葉が合っている。

だが写真の中の梨星は違っていた。

気怠そうな表情は色気を作り出し、黒髪と白い肌は少女のイメージを引き出している。

つまり大人と子供が同居している女性なのだ。

人は誰しも二面性を持っているというが、写真の中の彼女の変貌ぶりには、そんな次元の問題ではない。

同じ人間の所作だとは思えない。

変身願望が強いのか、モデル経験がなければ有り得ない話だ。

だが彼女は経験がない、素人であると言っている。

ということは当て嵌まるのは前者の方だろう。

良くも悪くも恐ろしい、とシェリハは思った。

「知らない人の前で、こんな顔するなんて知らなかったよ。

エアリとシェリハいると、すごく落ち着くの。

だからかな」

「そりゃよかったよ。

だからいい写真が撮れたんだな」

梨星が笑うと目が細くなり、何とも言えない甘く高い声が漏れる。まるで子供のような笑顔だ。

気取りのない彼女の側にいると、リラックスを覚える。困憊気味の状態さえも吹き飛ばしてくれるかのようだ。

そんな楽しい時を過ごす二人の間に割って入るように、ドアをノックする音が聞こえてきた。

ゆっくりとドアが開かれ、スーツ姿のドーリーが入ってきた。

シェリハはこの事に驚かずにはいれなかった。

ドーリーが私服ではなく、スーツで現れたからだ。

勿論それだけではない。

普段の彼女は華美な私服で飾り、スーツ姿を披露することが殆どないからだ。

「楽しいところをお邪魔して申し訳ないわね。

…初めまして、あなたが滝見梨星さんね？」

「はい…」

黒を纏っていてもなお、華やかさが内から滲み出ている。

その圧倒的な存在感に、梨星の目はドーリーに釘付けになっていた。

黒の色が彼女の吊り目を、より強く印象づける。

同色のピンヒールのパンプスが脚を長く、美しく見せている。

ドーリーはシェリハの隣りに腰掛ける。

梨星の表情が変わっていない事に気付き、彼女をリラックスさせようと微笑を浮かべた。

すると梨星も強張った顔を緩ませ、笑みを形作った。

「そんなに硬くならないでちょうだい。

部下からあなたの話を聞いてね。

あなたと話をしたかっただけよ。

私はドーリー・エブミアンテ。

よろしくね」

名刺を渡されて受け取る梨星を見ながら、シェリハは確信した。

ドーリーは確実に梨星を迎えようとしている。

梨星が是非と言うのなら、快く歓迎したい。

だがそうではないのなら、この会社を選んで欲しくはない。梨星には自由な活動をして欲しい。

できることなら大人のルールに束縛されて欲しくないのだ。

「エブミアンテ…会社と同じ名前なんですネ」

梨星がそう言うと、ドーリーは手を添えながらくすくすと笑った。自分の会社なのだから、自分の名字が使われている事は不思議な事ではない。

だが梨星の目には不思議に映ったのだろう。

「だって私の会社だもの」

「え…社長さん？こんなに若いのに…」

お世辞であるにしろないにしろ、社長イコール若いというイメージはあまりない。

黙ってさえいれば年齢不詳のドーリーも、若社長の部類に分類されるだろう。

「まあそんなことはおいといて。

あなたのことを少し聞きたいわ」

「私のこと…？」

ドーリーの唇と瞳が怪しく光る。

口調は穏やかだが、梨星だけに狙いを定める狩人のようだ。

ドーリーの魅力という名の魔力に屈し、梨星は話し始めた。専門学校でのこと。

楽しみなようで不安な将来のこと。

何社か面接に行ってはみたが、現実と理想が違いすぎて自分でもどうしたらいいかわからない、と彼女は零すように言った。

それもそのはず、そういった会社での勤務経験がないからだ。だからといってフリーになることはあまりに危険すぎる。

そういったことで梨星は悩んでいたようだ。

「…なるほどね。

会社の立場からしてもらうと利益を生んでくれる人が欲しいわ。

それもすぐにね。

でもそんなことを新米社員に求めるのは…どうかと思うのよ」

ドーリーは頬杖を突き、表情を曇らせた。

隣のシェリハも伝染したように表情が暗くなり、眉間に皺を寄せた。確かに会社として一番に欲しいのは、利益を今すぐに作ることできる者だ。

高度の技術と幅広い知識を持つ、できれば経験のある人材が好まれる。

あとはそれなりに協調性・順応性があれば言うことはないだろう。だがエブミアンテ社ではそうだったことは重視されない。

技術・知識の面で優れていたとしても、人間性が悪ければ不採用とすることになっている。

つまりその逆であるわけだ。

すべてにおいてと素人であったとしても、他に類を見ない個性・斬新な切り口のアイデア・仕事を愛する情熱・子供のように果てなき夢を持つ心のどれかを持っている人材を採用することになっている。実際の仕事のマニュアルは何もない。

仕事を経験したことのある上司自身がマニュアルなのだから、手元に置いておく必要がないのだ。

上司の元で日々学ぶことにより、経験を積んでいけばいい。

そしてその経験で培った技術や知識を、新米社員に与えて欲しい。

ドーリーはそう願っている。

だから即戦力となる人材は求めている。

長期に渡る指導の末に、力となってくれる人材を欲している。

「どうしてですか？」

梨星が不思議そうに首を傾げた。

「社会経験がない人に完璧を求める方がおかしいでしょう。

無理に決まってるんだから。

経験があつたとしても、会社によっちゃやり方だって違うから、難しいところなのよ」

ドーリーの答えにシェリハは頷く。
入社した頃の自分を回想してみる。

若く幼く、知識だけが先走りして自分一人では何もできなかった。
ひとつの問題を解決しては、またひとつ問題が生まれてゆく。
時には目を瞑りたくなるような失態もあった。

今となつては笑いの種だが、当時は苦い思いをしたものだ。
だが今はそれでいいと思っている。

失敗があつてこそ、成長するものなのだから。

「仕事してれば嫌でもそんなものは身に着いてくるもんだよ。
俺だって最初は何も知らなかったし、できなかった。

だから行きたい所に行けばいいんだ」

シェリハの言葉を聞きながら、梨星は何度も小さく頷いた。
彼らはそれが何を意味するかはわかつていた。

きつと拒否ではない、いや絶対に！ そう思いながらドーリーは口を
開いた。

「梨星、あなたうちの社員になる気はない？」

梨星は一瞬だけ目を逸らして、すぐにドーリーを捕捉したかのように
にじつと見つめる。

その目は一点の曇りもなく、揺れもしなかった。

22 現実はずべての甘味を忌む（前書き）

おとなしい女の子のようで、いまいち掴めない梨星。

当面の間、社内全体が彼女に引つ掻き回されることになります。

22 現実はずべての甘味を忌む

このことを予想していたかのように、梨星は落ち着いた表情を見せていた。

エプミアンテ社に来る前に、ドーリーカルハルクから知らせを受けていたのだろうか。

もしそうならここで話すこともない筈だ。

重い沈黙を破ったのは沈黙を始めた当人の梨星だった。

「ドーリーさん、私がやりたいことは知っているんでしょう?」

「もちろんよ」

「じゃあどうして?」

私はデザイナーになりたいんじゃないやありません」

その言葉にドーリーは笑いを漏らした。

エプミアンテ社の社員たちは皆が皆デザイナーではないからだ。

確かにデザイナーも存在するが、画家・イラストレーターなど物作りに携わる様々な職業のプロがいる。

デザイナーしか在籍していないのではないかということの意味する梨星の発言に、ドーリーはつい吹き出してしまったのだ。

「ごめんなさいね、違うのよ。」

確かにうちにはデザイナーがいるわ。

けど5割よ。残りは他のクリエイター…何もデザイナーに限定しているわけじゃないの」

そしてドーリーが分かりやすく説明する。

エプミアンテ社に在籍する限り、自分が望んだ仕事だけを全うするのは難しい。

会社の規模の割に舞い込んでくる依頼件数が多いからだ。

例えばデザイナーであつたとしても、デザインだけが仕事ではないということだ。

つまり絵本作家志望の梨星が入社するとしたら、絵を描く以外の仕

事もこなさなければいけない。

「だからシェリハは撮影の仕事もしてたんだ」

「そういうこと。すぐにやりたいことができるわけじゃないから、精神的にはとてもしんどいことだと思うわ。」

でも未来の肥やしにはなれると思う」

理想を描いていたであろう、夢の真実の姿に梨星は即答できず、絶句していた。

必要な技術を学び、身に付け、学校を卒業すればすぐにも絵本作家になれると信じていたのだろう。

どの職業でもスムーズに歩める道なんてものはない。

茨の道はあれど、平坦な道はない。

悪魔に心売りさばいたとしても、どんでん返しがあることを考えれば得策とは言えない。

好き勝手なことばかりいう客人に相槌を打たなければならぬし、絵を描くために引き籠もる余裕はない。

常に変化する世の中の波を知るために学び、錬磨を怠っては置いていかれる運命にある。

新しいものが全てだとは思わないが、古いものだけで構成できないのは事実だ。

愛と情熱を持っていなければ、続かない仕事であると言える。

逃避したくなるほど辛い苦しいことは多いが、それらは経験となり表現の幅を広げることだろう。

素質があるならば燦らせてはいけない。

力を発揮できる場所を提供してあげたい、ドーリーはそう思ったのだ。

突然梨星が立ち上がり、ペこりと一礼して見せた。

どういうつもりなのだろうか。

「ドーリーさん、私他の会社は受けません。」

でも少し考えさせてください。

必ずお返事はしますから」

曲がらない視線と真剣な眼差し。

その言葉がその場だけの取り繕いでも、嘘でもないこともわかつている。

きつと嘘が吐けない、真摯な態度を鏡に映したような性格なのだろう。

「ご両親と相談すればいいわ。

きつと気になるでしょうし」

「それは大丈夫。

あんまり気に留めてないみたいで。

基本的に放置主義なんです」

梨星は再び腰掛け、掌を合わせた後レモンティーを飲む。

温かい飲み物を飲んだからか、頬が少しだけ上気しているように見えた。

そんなことよりも気になるのは、先程の梨星の発言だ。

愛娘の将来に関心のない親なんて、本当に存在するのだろうか。

クリエイターは変わり者が多いと聞くが、わが子の未来に興味がないとは思いがたい。

「でも少しくらい…きつと内心は心配してると思うけどな」

「自由主義なんだって。父さんは自分で将来を決めたから、自分のやりたいことをしたらいいって言ってた。

母さんもそうだったんだって」

梨星はケーキを食べたくて仕方がないと言っている目をこちらに向けて、二人の表情を窺っている。

「シェリハがあなたのために用意したんだから、食べていいのよ」

ドリーにそう言われると、梨星はショートケーキを食べ始めた。

ちまちまと小動物のように食べ、頬を膨らませている姿は何とも愛らしい。

シェリハは梨星の顔を見ながら、彼女の両親のことを考えていた。

梨星が自分達と同じ茨の道に足を踏み入れようとしているのに、本当に彼らは気に留めていないのだろうか。

定まった給料はなく、仕事が絶える日だっていないことはない。画家の妻となつた星風なら、その苦勞は身に沁みている筈だ。我儕極まる依頼者に心を痛めることだつてあるだろう。

常に時間と心の葛藤との戦いだ。

体も心も限界まで擦り切れることだろう。

それをわかつていて放任するのだろうか。

自分が子を持つ親の立場ならば、きっと心配で仕方なくなる筈だ、とシェリハは思った。

残念ながら子供を持った経験がないから分からないが。

「ご馳走様でした。

ここのケーキすごく美味しかった」

「ありがとう。喜んでもらえてよかったよ」

につこりと笑う梨星を見て、シェリハの口元が綻びる。

ずっとこの時間が続けばいいのに。

そして時間が止まってしまえばいいのに。

そんなシェリハの気持ちも空しく、分針は容赦なく時を刻み続ける。梨星が学校に寄らなければならぬと言うので、まだ早い時刻だったが席を立った。

「ごめんなさい。もうちょっといたいんだけど…」

「またいつでもおいで。

首長くして待つてるよ」

満面の笑顔を残して、梨星は去つて言った。

彼女自身が出す答えはまだ分からないが、もし社員になると言うなら、同じ職場であるの笑顔を毎日見ることができると思つとシェリハの胸は静かに躍った。

23 冬に舞い込んだ春風（前書き）

忙殺されていた社員達の久方振りの休息。
そして梨星が下す答えとは？

23 冬に舞い込んだ春風

そして月の半ばが過ぎ、慌ただしかった社内も落ち着きを取り戻していた。

あれからというものの、梨星からの連絡はなかった。

専門学校生が忙しいのは、実際に体験しているから知っている。

だがシェリハをはじめとする社員はみな梨星からの電話を待ち望んでいた。

社員自らヘッドハンティングを試みることは少ない。

母校のOBとしてセミナーに呼ばれたり、後輩の作品を見に行ったりする中で、お眼鏡にかなう人材がいれば試みるが、なかなかお互いの条件は一致しないものだ。

そんな中で久し振りに獲得したいと思ったのが、梨星である。

エプミアンテには年若い新米社員は少ない。

社長であるドーリー、片腕のルハルク、エアリは30代。

シェリハはぎりぎり20代だが、ほぼ30代だ。

ある程度の経験を積むと、柔軟な考え方ができなくなってくる。

だからこそ卒業したての新米社員が必要なのだ。

自由で新しい発想と新風で掻き回すしてくれるような、そんな社員が必要なのだ。

あれだけ忙しかったというのに、今では閑散としている。

普段ならば書類や資料で散らかし放題のデスクはきれいに整理整頓され、食事中に目にするものばかりがあるではないか。

社員たちはお菓子や紅茶・コーヒーを並べ、暇そうにティータイムを楽しんでいる。

「はあ、あれだけ忙しかったのが嘘みたい。

暇過ぎて味の余韻を楽しめるわ」

そう言いながら田舎饅頭を頬張るのはエアリだ。

水色の布地に菖蒲とラジオラスが描かれた着物。

クリアな素材に赤いラメをあしらった簪。

オフィスに着物姿はかなり浮いている。

だがこれは彼女にとって制服のようなものだ。

「そう言ってられるのも今の内だけだ。

年が明ければ忙しくなる」

隣にいたシェリハがぼそりと呟いた。

彼は年中変わり映えしないスーツ姿だ。

だがこれが一般的に正装である。

惚けた状態で田舎饅頭を小さく千切り、口に放り込む。

食事を楽しむ時間がないシェリハにとっては至福の時間だ。

シェリハが餡が奏でるハーモニーを楽しんでいた時、電話が鳴った。
トゥルルル。

電話が鳴っているのに誰も出ようとはしない。

電話の呼び出し音は切れることなく、鳴り続けた。

トゥルルル。

誰からかかってきているのかはわかっていた。

十中八九梨星だろう。

誰もがシェリハの顔を見て、早く電話に出るよう促している。

だがシェリハは無言で拒否していた。

梨星の返事がイエスだとは限らないと思ったからだ。

断られた拳句、謝られでもしたら受け入れるしかない。

「シェリハ、きつと彼女からの電話だ。

シェリハが出た方が喜ぶだろう」

「あなたも待つてたんでしょう？

梨星がここに社員として来てくれることを。

たぶん断りの電話じゃないわ。

さあ、早く出て」

いつの間にかやって来たのか、ドーリーとルハルクがコーヒーを手にしながら言う。

今日ばかりは二人とものんびりしている。

ガチャ。

シェリハが受話器を取る。

「…梨星なんだな？」

「遅くなつてごめんなさい。」

ずっと悩んで…どうしたらいいかな…って」

機械を伝つた彼女の声はワントーン低かった。

静まり返つた皆が固唾を飲んでシェリハを見守っている。

期待してもいいのだろうか。

言葉を選べば選ぶほど、何を言えば言いのか分からず沈黙を選択してしまう。

相手の出方を待つてしまう悪い癖が出る。

「でも今決めなかったから、絶対後悔すると思つたの。」

後悔するならした後にする方がずっといいに決まつてる。

だつてあの頃はこうだつたなんて、言い訳するのは格好悪いもんね」

梨星のまっすぐでひたむきな意思を乗せた声が、蜂に刺されたかのようにシェリハの胸を突き刺す。

事を成し遂げることよりも、嘘で塗り固めることは実に容易い。

自分自身を洗脳すればいいだけだからだ。

けれど時間の経過とともに麻痺から解き放たれた思考が、導き出す

答えは後悔だけだ。

大人に近づく度に自分に都合のいい言い訳をして、逃げるように目を背けていた。

自分がいかに小さい存在であるか、思い知らされるのが嫌だつたらだ。

夢とは天使のような甘い声で囁いてきて、目を背けたくなるような、試練とは名ばかりの悪夢をつきつけてくる。

打たれ弱い人間ほど、一度奈落の底に突き落とされたらなかなか上がつてはこられない。

夢と現実とは身近なようで、まったく違うのだ。

奈落の底を前にしても怖じ気付かない梨星に感心する。

「強いんだな、梨星は。」

思っているほど優しい世界じゃあないけど、梃子でも動かない意思があるなら歓迎するよ」

シェリハの口許が緩み、口調にまで影響が及んでいる。

正直なところ、彼女にはエブミアンテには来て欲しくはなかった。

何も知らない彼女が違う色に染められてしまうのではないか。

そう思っていたからだ。

梨星が自らの意思で選んだ道ならば、第三者にそれを阻む権利はない。

もしそんな人間が現れたとしたら、全力で阻止をする覚悟だ。

それに一度決めたことなら、貫き通す手伝いをしたい。

そして一度決めたからには、自分を信じて貫いて欲しい。

日々の努力がすべての結果を作っていくのだから。

「ありがとう。社長さんが都合のいい日に、見学にきたいって伝えてもらえる？」

「ああ、伝えておくよ」

受話器の向こうに笑顔が見えてしまいそうな明るい声。

まだ少し聞いていたかったが、梨星が電話を切るのを確認してから受話器を置いた。

若き社員の入社決定に、社員達は歓声を上げた。

24 幼い心で踊る大人達（前書き）

梨星の入社が決まり、心踊る社員達。

次話は阿柴とシェリハのコラボレーションの集結となります。

そんなわけでデザインや企画の話が少しでてくるかもしれません。

24 幼い心で踊る大人達

シェリハの伝言を聞いたドーリーは、梨星を少しでも早く出迎える為に準備を始めた。

社長自ら梨星に連絡を取り、相手の都合に合わせて日程や時間を素早く決める。

その姿に抑え切れない逸りの心が垣間見えた。

エプミアンテ社が社員を受け入れること自体、数年振りのことだ。ヘッドハンティングやスカウトを試みたが、長続きしなかったりいい人材が見つからなかったのだ。

エプミアンテ社にとっては久し振りの収穫となる。

今回を逃せば当分新人に期待はできないだろうと、ドーリーは感じている。

期待はできなくても一向に構わない。

やる気と忍耐力さえあれば、きっと長く続けられるはずだ。

長期に渡る勉強はきつとクリエイターとしての彼女の幅を広げてくれるだろう。

人より少し遅いスピードでもいい。

何も知らずに飛び込んでくるのだから、それは承知の上だ。

一人で仕事ができるようプロの技術を学び、個性的で特徴のあるクリエイターになって欲しい。

それがドーリーの望みだ。

成長を望む対象は梨星だけではない。

梨星の入社によって、仕事に慣れてしまった社員達は個々の発想に新たなスパイスを加えられる事だろう。

そして影響が及ぶのは社員だけではなく、エプミアンテも関わってくる。お互いが刺激し合い、高められる良い関係になるはずだ。

社内のカレンダーには、赤ペンで書かれた丸で囲まれた数字がある。約束の日は翌週の水曜日だ。

子供が遊ぶ日を決め、楽しみでなかなか眠れないように、皆待ち切れないという思いを抱いていた。
シェリハも例外ではなく、起床と就寝の前に日にちを指を折って数える。

揃いも揃って寝不足の顔で、梨星を歓迎することになってしまった。

そして当日がやってきた。

一人の少女が社内を見学に来るだけだというのに、何か特別な用事があるかの如く華やかな装いだ。

社長であるドーリーをはじめ、社員達はスーツやドレスに身を包んでいる。

特に気合いが入っていると感じられたのが女性陣だった。

上に押し上げられた長く濃い睫毛。

アイシャドーに彩られ、存在感ある目元。

純粋な乙女を思わせる、チークで上気させた頬。

コーティングされた整えられた爪。

まるで合コンを控えているかのようだ。

「どこかでパーティーでもあるみたいだな。」

梨星が見学に来るっただけでこんな騒ぎになるなら、首相が来訪したら大変だな」

シェリハは呆れたように溜め息をつきながら、冷たく言い放った。

彼の服装はいつもと変わらない。

入社してから着ているスーツは、一度も買い替えていない。

サイズに変化がないということは、スタイルを維持しているという努力が見受けられる。

体型維持も仕事のうちだ。

「へえ…シェリハも言うじゃない。」

筆笥の肥やしになるよりはいいと思うけど？」

シェリハの背後で靴音を響かせながら、エアリが姿を見せた。

瞼に広げるパープルのアイシャドウが妖しい印象を添える。

マスカラで伸びた睫毛は瞳をより大きく見せている。

赤みを消した肌色に近い、艶のある唇。

青の背景をバックに古い寺院を描いた着物。

外国人らしい彫りの深い顔立ちに和服はアンバランスだが、着続けていることで似合うように見えてくるのが不思議だ。

「本当に和服が好きなんだな」

「いいわよ、和服は情緒があるでしょ？」

それにデザインも色々あるし」

熱く語り出すエアリの横にドーリーが割って入ってくる。

ドット柄の白いニットベレー帽。

シヨッキングピンクのパフスリーブワンピース。丈は膝下だがスリットが入っており、黒のガーターがちらちら見えている。

何とも彼女らしい。

「あなたは本当に地味ねえ。

たまには気分転換に普段と違った服を着ればいいのに」

「モノトーンが好きなんですよ。

色々と合わせやすいですしね」

シェリハの答にどこか不満そうなドーリー。

木陰に隠れるように地味な色を好むシェリハは、この業界に向いていないんじゃないかとふと思う。

ファッションに強いこだわりを持つ方ではないから、仕方のない事かもしれない。

世間話を楽しみながら時を過ごしていると、ドーリーのポケットから携帯のバイブレーションの音が漏れた。

徐に携帯を取り出し、ディスプレイを見ながら彼女の口許が綻ぶ。

大方相手は梨星なのだろう。

「じゃあ私は失礼させてもらっわね。

あ、今日阿柴ちゃんが来るらしいから。

急いでるみたいだから、今日中に終わらせなさい。

忘れないようにね」

手をヒラヒラと振りながら、ドーリーは部屋を出ていった。

社員のことは何でもお見通しなのだから、怖いものだ。

ドーリーの予告通りに来訪するという、阿柴からのメールが届いた。場所は社内では都合が悪いとのこと、ホテルの一室で会うことになった。

時間は午後からということもあり、シェリハは早速準備を始めた。

25 パルポラピーサー誕生の時（前書き）

この回は一番私が大好きな作業・企画が初めて出てきました。
本来ならばベビー専門のブランドをリサーチしたりすべきですが、
今回は全くしませんでした。

自分の中でこんなのがあればいいな、という希望は入れましたが、
これからは度々こんな話が出て来ると思います。

25 パルポラピーサー誕生の時

指定されたホテルは都心から少し離れた、雪の帽子を被った木々に囲まれた所にあった。

一見何の変哲もないビジネスホテルだが、ロビーに入ると現れたのは和の空間だった。

リアルな畳の絵が描かれた床。

まるで本物の障子を再現したかのような壁紙。

ホテルという洋の空間というよりかは、雰囲気だけなら旅館という和の空間の方が近いだろう。

従業員も和の雰囲気が漂う着物を身に纏っている。

だが帯にアーガイル・ドット・チェック柄などがあしらわれていて、単なる和のイメージで終わらせていない。

従業員がシェリハに気付き、につこりと笑い一礼をする。

ポニーテールにした黒髪。

紺色をベースにした、菊が描かれた着物。

華々しい印象はないが、素朴ながらの良さがあり好印象を与えている。

「シェリハ・マルフリーフェ様ですね？」

阿柴様ならカフェの方にいらっしゃいますよ。

貸切となっておりますので、ゆっくりなさって下さいね。

「こちらです、どうぞ」従業員に案内され、階段を下りてすぐの所に広々としたカフェがあった。

従業員は一礼すると、静かに音を立てず去っていった。

使い込んだ年数が分かるような、少し黄ばんだ襖の絵が入った壁紙。所々に小さな花の絵が鏤め^{ちっは}られている。

テーブルや椅子は切り株を使って作られており、形や長さが不揃いで歪みがあるが、ハンドメイドならではの味を感じる。中央の椅子に一人の男が両手を組んで座っている。

闇を想像させる黒い髪。

黒いスーツに白のカッターシャツ。

ネクタイは黒い生地に紺と白のストライプ。

厳しい瞳をサングラスで隠しているが、それが却って印象を冷たくさせている。

シェリハの存在に気付くとサングラスを外し、目尻に皺を寄せた。

「足を運ばせて悪かったな、シェリハ。

社内でもよかつたんだが、新人が入るとかどうとかで騒がしくなるようだったからな。

落ち着かない場所で仕事するわけにもいかないだろう?」

十中八九梨星の事である。

エプミアンテ社を卒業したとはいえ、元はエプミアンテの社員だ。会社にとつては社員が入社することは非常に喜ばしいことだ。

そんな中で仕事の話をして、和やかな空気を壊したくない、という阿柴の心遣いなのだろう。

確かにあの雰囲気の中での仕事は仕事にならなそうだ。

「さて、気を取り直していくか。

言い出しつぺは俺だからな。

俺から見せよう」

そう言つて机の上に一冊のスケッチブックを広げた。

野菜や果物の形をした容器。

色はパステルカラーを用い、子供が怪我をしないようにできるだけ丸みをもたせている。

外見はレイヤードのオールインワンだが、涎掛けが付いたカットソーを重ね着したようなオールインワン。

涎かけにはボタンと丸襟のリアルなプリントが入っており、外見だけでは涎掛けには見えない。

色はネイビー・ブラック・ホワイトの展開になっているので、男女問わず着られそうだ。

「いいですね、これ。ディテールは?」

「七分丈のニット。パンツはかぼちゃパンツかサルエルパンツだな。どっちがよりいいと思う？」

そう尋ねる阿柴の瞳の輝きはまるで子供のものようだった。プライベートなどお構いなしの仕事人間が見せる、素の顔。

より良い物を作り出す為には一切の妥協も許してはならない。

そしてこの作業に果てという物は存在しないのだ。

同じ工程の中に同じケースがないからこそ、飽きがなく魅せられる。それはすべての物作りに携わる者の共通点ともいえるだろう。

「男児と女児で二種類にしたらどうでしょう？」

どちらにしてもゆとりのもたせすぎはよくないと思います」

そう言うとシェリハはボールペンと自身のスケッチブックを取り出し、さらさらと描きだしてゆく。

シェリハの考えはこうだ。

阿柴の考えるデザインは無地でシンプル。

だとするならば形に拘りをもたせればいい。

女児用は肩から肘まで丸みのあるパフスリーブにする。

そこから下は男児用と共通の、腕にフィットしつつも少しゆとりを持たせる。

女児用はかぼちゃパンツ。

男児用はサルエルパンツ。

どちらもゆとりがあり過ぎると太っているように見えそうなので、ほどよくフィットするということだけは譲れない。

そして腰穿きは厳禁である。

胸元か裾部分にはブランドロゴのプリントかワッペンを施す。

「確かにそれもありだな。

だが肝心のロゴなんだが……」

「そういえば見当たりませんかね。

じゃあロゴも考えましょうか」

二人はペンを取り、暫くの間沈黙となる。

シンプルで装飾を控えた、あっさりしたものがいい。

その点は二人の考えは一緒だった。

ブランド名から想像できるものはアクティブなイメージ。

ネガティブを連想させる要素は入れられない。

シェリハはアルファベットのPをシルエットにして、カラーは青と白のマーブルでまとめてみた。

ブランド名は白抜きにして、シルエットに合わせて入っている。

阿柴は生い茂る草木をシルエットにし、Pの形にトリミングしてみた。

カラーは黄緑か緑。

シェリハのようにブランド名をすべて入れたりという作業は除いている。

「ロゴについてはサンプルを作ってから決めようか？

紙と布ではイメージも違ってくるだろうし」

「そうですね。ではサンプルができてからという事にしましょうか」
さくさくと順調に話が進んでいた。

すると阿柴が催促するように、手の平をシェリハノ前に出した。

「じゃあ次はシェリハのを見せてもらおうか」

阿柴の目がスポットライトを浴びたかのように光り輝いた。

期待していると言わんばかりのそれが、シェリハにプレッシャーをかけた。

26 淡色なる展開（前書き）

パルポルピースーの打ち合わせは終了です。

企画やらデザインが入ると、話が行き詰まって仕方ありません。
大好きな作業なので仕方ないことなのですが。

26 淡色なる展開

シェリハは仕方なく自分のスケッチブックを手渡した。
花をモチーフにした、哺乳瓶の吸い口を清潔に保つ為の蓋。

デザインはマーガレット・パンジー・シオンの三種類。

できるだけ丸いフォルムで幼児が触れても怪我をしないようにと配慮している。

幼児なら誰もが一度は世話になるであろう絵本。ひとつは食品だけを使用した賞味期限があり、食べれるという新鮮なもの。
もうひとつは布だけを使用した絵本。

最先端の技術は使わず、すべて手作業で行う。

質感の違う布を切り貼りし、文字は様々な色の糸で縫う。
視覚・触覚で温度を感じることを目的としている。

「なるほどな。洗うとはいっても確かに不衛生だし、これなら哺乳瓶だけでなくカップやペットボトルつてのもいいかもな」

「本当ですか!？」

賞賛の言葉に目を輝かせるシェリハ。

途端に阿柴の表情が厳しくなり、溜め息をつく。阿柴曰く食べる絵本というのがあまりよくないようだ。

第一に食品だけで作らなくてはいけないので、コストがかかりすぎる。

コストが上がれば値段を上げなければいけない。

大量生産を予定していないから、安価にならないことは既に決まっている。

ということは高値になってしまうということだ。

「食べる絵本が悪いんじゃない、食べる為だけの絵本とするならそれが問題なんだ。

例えばこの、布の絵本のような」

「つまりは目的が必要ということですね?」

シェリハが尋ねると阿柴は静かに頷いた。

出来合いのものを食べるだけでは、確かに意味がない。

用意されたものをさも当たり前のように食べる。それでは食の大切さはきつと理解できない。

ならば一緒に作るのはどうだろうか。

完成品ではなく、完成前のキットとして発売するのだ。

母もしくは父、兄弟・姉妹・従兄弟・友人同士でも構わない。

だがブランドのコンセプト上、できれば身内間であつた方が望ましい。

親子の交流を深める為の共同作業としては、料理することは地味な作業に見えるが、食べることの大切さや大変さを知るいいきっかけとなることだろう。

食の有り難さや大切さを学ぶという大義を抱えるなら、この商品はきつと発売することができるはずだ、とシェリハは確信した。

「阿柴さん、キットにするのはどうでしょう？」

完成品ではなく、いちから作るんです」

「それなら価値がありそうだな。

ならキットにしよう。

絵本なんだからストーリーは考えてあるんだろうな？」

阿柴の問いに勿論です、と自信満々に答える。

ひとつは姫が様々な姿に変身する冒険もの。

もうひとつは遅い姫とどこか頼りない王子のラブストーリー。

漠然とした内容で阿柴がOKサインを出してくれるはずもなく、詳細を述べるよう要求してきた。

だがシェリハは深く考えていなかったため、言葉を詰まらせてしまった。

「小さな姫君が魔法をかけられて、魔法を解くために旅をするんです。

自然物を多く使いたいと思います。

虫や動物、花とか……」

「なるほどな。百歩譲ってそれは認めよう。

だがそのラブストーリーはリアリティがあつてよくないな」

シェリハの提案に阿柴はさらりと答える。

彼の意見はこうだ。

絵本は子供のための本である。

いくらブランドのターゲットが親子であるといっても、主役はあくまでも子供でなければいけない。

絵本とは子供たちの想像力を養うためのもの。

物語はファンタジーに溢れ、現実的なものであつてはならない。

それを考えると現代の男女を彷彿とさせるような、恋愛物語は許可はできないというのだ。

「もちろん設定は表向きのもですよ。

最終的にはオーソドックスな姫と王子にします。

ラブストーリーといつても好きか嫌いか、それくらいなら身に覚えがある感情でしょう」

子供の感情はまだ幼く、細かく分けられていない。

友に対する好きと親に対する好きの区別など、きつとまだできてないだろう。

感情は生まれたばかりなのだから、それで当たり前なのだ。

シンプルな感情を持つ子供が内容を分かってくれさえすればそれでいい、とシェリハは考えている。

愛情を分類するのはまだ早すぎる。

分類するのは実際に恋をしてからでも遅くはないだろう。

だからテーマやコンセプトに装飾など必要ない。ひとつだけ明確な物があればそれでいい。

「あ、エプロン欲しいですね。

フリルやレースばかりじゃなくて、男でも使えるようなあっさりしたやつです」

「突然どうした？」

気になるから全部聞かせてもらおうか」

突然の思い付きを言葉にするシェリハを見、阿柴はほくそ笑んだ。
そんな彼に気付くこともなく、シェリハは意識を集中させてペンを
走らせる。

エプロンの色は三種類用意する。

男性用はパステルブルー。

女性用はパステルピンク。

子供用はネイビー。

男性でも使いやすく、ということでフリルやレースは一切使用しない。

エプロンといっても甘い要素は一切排除する。

柄はあつさりとしたストライプ。

安全性を考慮してボタンで着脱できるようにになっている。

フロントはシャツの襟とネクタイが付いたリアルなプリントが施されたエプロンだが、バックはジャケットそのままのデザインとなっている。

「エプロンって甘すぎて男性は着られないでしょう？」

コスプレみたいなエプロンは嫌ですし、シンプルにすれば兼用できるデザインになるかなと思ったんです」

「シンプルでいて個性的だな。

色も柄もあつさりしてて、うるさくない。

シェリハのアイデアは思い付きなのか考え抜いたものなのか区別がつかないな」

そんなことはありませんよ、と謙遜するシェリハ。

阿柴の褒め言葉は真実であり、嘘ではない。

彼は好きなものは好き、嫌いなものは嫌いと言えない男なのだ。
おべんちゃらなど以外の外である。

クライアントはともかく、同志であるデザイナーには手厳しいと有名なほどだ。

そんな彼の言葉にどんな意味があるのか、シェリハは理解していないだろう。

エプミアンテ社に留まっているのは卒業するに値しないからだ、自分を卑下してしまっているからだ。

クライアントに対応できる企画とデザインは優れている部類に入ると言えるのだから、もう少し自信を持って欲しいものである。

これで漸く一通り打ち合わせは終えた。

残るは工場との話し合いだけだ。

「仕事は終わったことだし、休憩にしようか」

阿柴の一言でシェリハの肩の力が抜けていく。

阿柴の表情が仕事用から普段用に切り換えられたからかもしれない、とシェリハは思った。

27 目に見えぬものは歪に愛される（前書き）

今回は男性同士の恋愛トークを挟みました。

食事の風景など当たり前の情景を書くのがとても楽しかったです。

27 目に見えぬものは歪に愛される

小腹が空いてきたと阿柴が呟いて、メニューを差し出してきた。軽食がメインだが、酒や肴といったものも置いているようだ。

ホテルの中ということもあるのだろうか、昼間は喫茶で夜間は居酒屋というスタイルにしているのかもしれない。

「疲れただろう？小腹が空いたんだが、どうだ？」

「そうですね、じゃあ…」

シェリハはホットココアと黒糖サンドイッチを指差した。

阿柴は徐に携帯を取り出し、電話を始めた。

何処に電話をしているのかは分からないが、先程シェリハが指差した物の単語と片仮名が飛び交っている。

カフェのキッチンに通じているのだろうか。

そういえば何故呼び鈴なるものがないのだろう、とシェリハは疑問に思った。

貸し切りにした為の配慮だろうか。

しばらくして店員が料理を持ってやってきた。

御辞儀の角度や皿の置き方、客に対する言葉遣いなど一流のサービスと言えるクオリティーだ。

上司の教育が行き届いている証なのだろう。

料理を運び終わると、軽く御辞儀をして静かに去っていった。

テーブルに置かれた料理は食欲をそそるものばかりだった。

湯気が立ち、温かさを誇張するホットココア。

黒糖パンで魚のフライを挟んだサンドイッチ。

紅茶とは言い難い、真っ白なホットミルクティー。

赤・青・黄色のアイスクリームとイチゴ・ブルーベリー・バナナで彩られたホットケーキ。

彼は甘党だっただろうか…と思いつながら、シェリハはナイフとフォークを阿柴に手渡す。

お絞りで手を拭き終えりと礼を述べて受け取った。

「お茶するなんていうのも久し振りだな」

「ええ、仕事以外じゃ顔を合わさなくなりましたからね」

そう言いながらシェリハはココアを一口飲んだ。

エプミアンテを卒業するまでは世話になっていたが、卒業してからは仕事以外では顔を見ることもなかった。

それもその筈、阿柴が独立し、家庭を持ったからだ。

新妻に幼子がいるとあっては、今までのように軽々しくは誘えない。先輩が幸せになることは喜ぶべきことなのだろうが、今までと同じ距離で付き合えなくなりシェリハは寂しさを感じていた。

だが今日は仕事とはいえ、久し振りに語り合えるのだ。

シェリハの心は踊らずにはいられない。

「ああ、そうだな。」

風の噂で聞いたんだが彼女と別れたのか」

一瞬ではあったがシェリハの表情が曇った。

彼女とは好き嫌いの感情だけで別れたわけではない。

栄光の道を歩む彼女と、いつまでも芽が出ない自分。

そんなシェリハを彼女は一度も責めはしなかった。

でもその優しさが彼にとっては一歩辛かったのだ。

彼女といったら自分は益々駄目になってしまう。

お互いをよきライバルとして認識し、刺激し合うのではなく依存し
てしまうであろう未来が目に見えていた。

だがそんなことはシェリハのプロ意識が許さなかった。

職業意識が彼女に対する愛情を冷やし、関係を断ち切った。

決して綺麗な形で別れたとは言えないが、シェリハにとっては最善
の選択だった。

一方的だと批判されたこともあったが、お互い話し合って至った結
果だ。

「もう終わったことですから……いいんですよ」

シェリハは短く言い放った。

もう無関係なのだ、と自分に言い聞かせるようなそんな言葉だった。フルーツを頬張りながら阿柴はシェリハの言葉を待つ。

気まずいと感じているからか、シェリハはサンドイッチを頬張り口を閉ざした。

やがて口の中が先に空っぽになった阿柴が口を開いた。

「そう思ったならそれが正しかったんだろう。

でも終わったなんて言うなよ。

まだ若いんだから」

シェリハは若いと言う阿柴の言葉に反応した。

老いてもいないが、若いという年でもない。

学生の立場だったなら終わった恋をしまいこんで次に走ることができるのかもしれないが、今のシェリハはどちらが大切かと言えば仕事だ。

仕事で寂しさを紛らわせている感も否めない。

同じような価値感を持ち、時に叱り、時に優しく支えてくれる。

そんな相手が理想だが、なかなかそんな女性に出会うことはない。

「理想は理想だ。好きなタイプと必ずしも付き合うに至るって訳じゃないだろう？」

俺だって最初から彼女が理想って訳じゃなかった」

阿柴の告白にシェリハは目を丸くする。

阿柴の彼女とは顔見知り程度の関係だったから、詳しいことは知らなかった。

阿柴は子供時代の思い出を思い出すように語り出した。

彼女はエブミアンテの社員だった。

担当はスタイリングとメイクアップ。

きっかけは偶然仕事を共にすることになった、といういわゆる社内恋愛だ。

面倒見が良く、優しい性格なので一緒にいると癒されると社内では高評価だった。

だがエブミアンテ社に意思薄弱な社員がいる訳もなく、仕事の件で

口論になることも少なくなかった。

やがてそれは習慣となり、一步も譲らないその態度が真摯に映った。それから互いを認め合い、好意を抱くようになって今に至る。

結婚と出産を経験したことで多少は性格が丸くなったのではないかと感じているが、彼女は仕事の話が絡むと相変わらずだ。

一目惚れをしてゴールデン、なんて夢物語とは程遠い。

好意すら感じなかった相手をよく知り、愛を感じて家族となった。

自分が望んだ仕事に誇りを持っているからこそ真摯に向き合い、互いの仕事を深く知っているからこそ理解もしてくれる。

だから干渉してくることはない。

阿柴にとって彼女はできた妻だ、そう思っている。

「そうだったんですか…そんな激しそうな人に見えませんでした」
「完全な人間なんている訳がない。」

人生のすべてがうまくいかないようにな。

そうだろう？」

阿柴の質問に答えられなかったシェリハは戸惑っていた。

彼女と別れたばかりなのに、気になる女性がいるなんて尻が軽いと思われるだろうか。

28 年はとっても未開の心（前書き）

阿柴とシェリハの恋愛トークが漸く終わりました。

書き始めの頃は季節外れでしたが、もう十二月なのでちょうどいいかなと思っています（開き直り）。

次回は忘年会を予定していますが、遅筆な私のことなのでペースはどうなるかわかりません。

28 年はとっても未開の心

自分の経験上、こんなことは未だかつてない。

付き合いの長さだけでいうなら、情に揺れるのは絵舞に対してだろう。

けれど仕事もプライベートもよく知る絵舞よりも、年内に知り合ったばかりの梨星に惹かれている。

恋なのか愛なのか今の時点では把握しきれていない。

まるで子供のような。

「わかってます。でも別れたばかりなのに気になる子がいるなんて…自分でも訳分かりませんよ」

さらりと告白した後、逃げ場所を求めるようにサンドイッチを食し、ホットココアを流し込むように飲み干した。

溜め息をひとつだけついて、阿柴を見つめる。

阿柴はうつすらと笑みを浮かべていた。

そんな彼を見ているとからかわれているような気分になり、シェリハは恥ずかしくなって俯いた。

「長い間一緒にいると分からなくなるよな。

友人として好きなのか、異性として好きなのか…空気みたいになったら選択肢はふたつしかないな。

でもシェリハの場合は少し違う気がするな」

「…というと？」

阿柴の静かな言葉に釘付けになるシェリハ。

阿柴は彼を焦らすように、ナイフで食べやすい大きさに切ったホットケーキを口に運ぶ。

それは非常に馴染みにくい光景だ。

甘い物を食すなというわけではないが、あまりにも彼の印象と合っていない。

「学生の頃は友人だけじゃ少し物足りない、誰か側にいて欲しくて

本当に好きってわけでもないのに、付き合った覚えはないか？」

「ないことはありませんね」

シェリハは阿柴の問いに迷うことなく即答した。

成長するにつれて友人が男女の付き合いを覚えるようになり、シェリハもそれに便乗するかのようにならざるを得なかった。

だが求めるものがあまりに違いすぎたのか、青い恋は長くは続かなかった。

女性達は目に見える平安を、シェリハは目に見えない精神的な支えを。

女性の扱いが分からなかったシェリハは静かに去ることしかできなかった。

絵舞との恋は学生の時にしていた恋に似ている、と阿柴は言いたいのだろうか。

「シェリハはデザイナーという共通点を通じて、彼女と仲良くなった。

お互い好きになって恋人関係になった。
なつてからが問題だ。

仕事に恋が絡んだら…自分が考えていたものとは違っていた。
違うか？」

「肯定も否定もできませんが、それはあるかもしれませんが可愛らしくも憎らしい未熟だった恋。

別れたとはいっても元は恋人であった女性。

似合いの男性と幸せになつて欲しい、と心から願っている。

幸せにする両腕は自分の腕ではないけれど。

今は失敗した恋を乗り越えて歩き出そうとしている。

出会ったばかりで彼女のことは知らないことが多い。

それはそれでいいのだ。これから時間を掛けて知っていけばいいのだから。

「でも“気になる子”は違うんだな？」

さては………新入社員か」

なぜわかつたんだろう、とシェリハは恥ずかしさで顔が熱くなった。阿柴は微笑みを浮かべながらミルクティーを飲み干した。

微笑みというよりかはにやけているように見えた。

シェリハは間断なく浮き名を流すタイプではない。一人の女性と付き合えば長く付き合い、別れがくるとすればいつも相手の側から切り出されることが多く、振るより振られることの方が多かった。

そんな彼が久方振りに訪れた恋に揺れているのがそんなに嬉しかったのだろうか。

「まあ……」

「社長が雇ったんだからどこか人と違う人物なんだろうな」

どこか人と違うといえましょうかもしれない。

でなければこんなに引き付けられることはないだろう。

画家と絵本作家の親を持つている時点で異質であるといえる。

彼女を育てたのは環境だけではない。

環境に甘んじることなく重ねてきた努力が彼女を育てたに違いない。すべては彼女がエプミアンテ社で働くようになれば、見極められることだろう。

エプミアンテ社は彼女のおかげで賑やかになるのは間違いないが、新しき風邪を吹き込む兵器となる梨星だけに期待してはならない。

社員一人一人が切磋琢磨し、成長のために歩まなければ意味がない。クリエイターは一人であり、一人ではないからだ。

お互いが食事を終えて、時刻は夜になりかけていた。

早く阿柴を家族の元に返さなければと思い、シェリハは彼に目配せをした。

できれば夜ご飯と一緒に食べたかったが、妻子のことを考えれば気軽に誘えない。

今日はこの辺で引き下がろう。

また仕事の一件で近いうちに会うことになるのだから。

「さて、楽しんだことだしそろそろ行くか？」

「そうですね。サンプル楽しみにしてますから」
シェリハはにつこりと笑い、軽くプレッシャーをかける。

相手の希望に応えたいという思いと、常に良い物を生み出したいという欲望が彼を燃えさせるのだ。

サンプル品を作る段階に至ったといっても完成ではない。
そこからまたアイデアを出し合い、完成に近付けてゆく。

物作りにおいてデザイナーはあくまでもデザインをすることしかできない。

物を生産するという作業はできたとしても、プロに劣るクオリティでしか作ることができない。

だから直接生産を行っている工場に依頼して作ってもらうのだ。
デザイナーにはこだわりがあるから妥協することができない。

工場側はまず予算のことを考えるため、オーバーしない範囲内で物を作る。

双方の譲歩で成立する話なのだが、物作りを仕事にしている者は皆頑固である。

故に易々と譲り合うことはない。

すべては根気と時間にかかっている、といってもいいくらいだ。

消費する時間は瞬く間という短い時間で終わるのに、生産するのに要する時間は海のように深く長く険しいものだ。

それでも彼らは仕事から足を洗うことができない。

新しい物を自ら生み出す喜び。

クライアントの希望に応えられた喜び。

構想していたものをイメージ通り作ることができた喜び。

そついった喜びが彼らをつき動かしているのだ。

「後は交渉次第だな。」

作る側からすればこちら側の提案は無茶苦茶以外の何物でもないだろうし。

じゃあサンプルが出来次第、連絡するから待っててくれ。

シェリハ、自分の腕と心に自信持っていいんだ。

恥じる物なんて何ひとつない。

褒めるなんて柄じゃないが、いい物持つてるんだからな」

「はい」

シェリハは噛み締めたかのように短い言葉で対話を切った。

これで今年最後の仕事は幕を下ろした。

29 凸凹な蜂蜜（前書き）

小さい子供を書くのが本当に楽しくて仕方ありません。
次回は宴会（笑）編です。

29 凸凹な蜂蜜

新入社員歓迎会行われると連絡が入った。

場所は子供を持つ社員もいるので、安全性を考慮してレストランで行われることになった。

忘年会や新年会という居酒屋が決めりの場所だが、居酒屋では子供たちにとってよくないからだ。

社長としてあちこちを飛び回るドーリー自身が年末年始くらいは家族と過ごしたいから、ということで日程は休みに入る前ということになった。

自己のプライベートのためだけではない。

社員には休日くらいは仕事を離れ、家族や恋人と過ごしてほしいというドーリーの細やかな優しさである。

会社の長として活躍するドーリーは、社員であり社長であり一児の母でもある。

一日中世話をすることはできないので、帰るまでは妹に面倒を見てもらっている。

子供はまだ小さく、甘えたい盛りだ。

けれど母を思えばこそ、我儘も言わずおとなしくしている。

だから休みの時くらいは一緒に過ごしてやりたい。

子供が親と体験するような、ごく当たり前のことはできるだけ叶えてやりたいと彼女は考えている。

ともかくにも一日だけは仕事を忘れ、楽しむことができるのである。

きつと皆着飾ってくるに違いない。

エプミアンテ社の社員の服装に規定はないといっても、他人に不快な思いをさせないためにスーツやジャケットといった一般的な装いが義務付けられている。

エアリのように特定の服装に執着する者は例外だが。

つまり自分が好む服装を楽しめるのは休日だけということになる。シェリハの場合は私服も仕事の服も大して差はないように映る。日頃からモノトーンを好み、特に変化のないコーディネートばかりになってしまふ。

色味のあるものを加えるとすれば、ネクタイくらいである。

全身モノトーンのコーディネートは重くなり過ぎるので、一点だけ色物を投入すれば重々しさが少しは軽くなるように思える。

何を着ていこうか、と箆笥から服を取り出して物色しはじめる。

色も形も似たりよつたりな服ばかりだ。

シェリハにとって衣服とは着て楽しむための物ではなく、着なければならぬから着ているだけである。

購買意欲もそれほどないので、ワンシーズンに数枚買い足す程度だ。箆笥を漁っていると底から派手なジャケットが出てきた。

赤をベースにしたブロックチェックのジャケットだ。赤身のない白い肌によく映えることだろう。

ジャケットに合わせて次々と無難な服を選んでいく。

黒のネルシャツ。

裏地フリースのスキニーパンツ。

色はライトベージュ。

そして防寒対策に黒のトレンチコート。

普段のシェリハの格好を知る者からみれば派手に映るだろう。

だが今日は普通の平日ではないのだから、たまにはそんな装いもいいだろう。

シェリハは風を通さない完全武装で家を出た。

イルミネーションが徐々に暗くなる空間に華を添えている。

プレゼントを片手に家路へと急ぐ人、レストランで細やかな贅沢を楽しむカップルなど様々だ。

暗いニユースに落ち込む景気と明るいことは少ないが、皆とても幸せそうな笑みを浮かべている。

なにも豪華なものなど必要ない。

豪華とは言えなくても温かい笑顔があればそれでいい。

大通りを歩きながら通り過ぎる人々を見てみると、そんな気持ちになつてくる。

ほんの少し惚けていた間に冬の街とはかけ離れたものが立っていた。お好み焼きの大きさの煎餅で顔を隠した子供が立っていた。

膝丈まであるアイボリーのダッフルコート。

コートから覗くパステルピンクのニットスカート。

服から覗く手足は華奢ながらも子供らしくふつくらとしている。

冬だからだろうか、服から覗く肌がとても白い。

日本人のような黄味のある肌ではないので、ひよつとすると外国人なのかもしれない。

ばりばりぱりっ、と音を立てて子供は煎餅を少しずつ齧^{かじ}っていく。

煎餅の面積が少なくなり、子供の姿が晒される。

少し下がり気味の細い眉。宝石のように大きく、濁りのない目。

寝癖がついて色んな方向に向いている睫毛はとても長い。

肩にかかる長さのウェーブがかかった髪は細く、眉や目や睫毛と同じキャラメルのようなブラウンだ。

彼女はシェリハの先輩であるレオニキーラの愛娘・チエルニだ。

おませだが利口で素直と評判がよい。

「シェリハっ！」

「シェリハっ！」

シェリハを見つけるや否や、空気を切り裂くような大きな声で叫ぶ

とシェリハに向かって全速力で走り、いきなり抱きついてきた。

そしてシェリハの衣服をぎゅっと掴む。

思い切りシェリハの衣服を掴んだ両手には、先ほど食べたばかりの

煎餅の油分がたっぷりについている。

チエルニはそんなことなどまったく気にしていないだろう。

気にしていたらもっと控えめの挨拶をしているはずだ。

だが体を離すわけにもいかず、仁王立ちしていると突然チエル二の体が離れた。

「シエリハと交流を深めてるだけなのに…お父さんひどい」

チエル二に父と呼ばれた青年・レオニキーラが彼女を抱き上げたことで、シエリハは解放されたのだ。

彼はチエル二の体を降ろしてやり、シエリハの服を汚した罰として軽く頬をつねった。

ダークブラウンの短髪に同色の双眸。

トレンチコート、コーデウロイのストレートパンツ・エンジニアブーツと黒で統一されている。

背丈は高いとはいえないが、姿勢が良くすらりとした細身の体系なのでタイトな服が似合う。

いかにも優しそうな印象を与える目は、ほんの少し似ているかもしれない。

第三者から見ればきつと親子には見えないだろう。

親と感じさせない彼の見た目の若さからいって、年の離れた兄妹と認識されるに違いない。

彼の年齢で子供がいるのはおかしいことではない。
むしろ自然なことである。

問題はレオニキーラとチエル二の年齢差だ。

エプミアンテ社に入社して同期だったリルーナと二十代のうちに結婚し、チエル二が生まれた。

結婚してからリルーナの浮気が発覚し離婚を考えていたが、チエル二がまた小さかったため踏みとどまっていた。

しかしチエル二のことを考えればこのままではよくないと、とうとう離婚を決意し今に至る。

「そのまま抱きついたら服が汚れるだろう？」

シエリハ、汚して悪かったな」

「いやべたべたするやつじゃないから気にしないでくれ。

納豆とかだったら困るけど」

シェリハは苦笑しながら言った。

粘り気のあるもので汚されてしまったら、洗う気も失せてしまう。それだけはチエルニに感謝しなければいけない。

チエルニはレオニキーラの隣で満面の笑みを浮かべている。

母と別れた幼い少女とは思えないほど明るく、無垢で無邪気だ。幼いながらも無意識に父に心配を掛けまいとしているのだろう。

「ねえねえ、寒いから行こう？」

レオニキーラの裾を引っ張りながら、チエルニが白い息を吐きながら言った。

一人だけ元気にスキップしながら歩いていくチエルニを見つめながら、新入社員歓迎会が行われるレストランへと向かった。

30 奇創者の楽宴（前書き）

宴会編です。

バレンタイン間近のまたもや季節はずれになってしまいましたが、宴会風景など華やかに書いていきたいです。

30 奇創者の楽宴

レストランにたどり着くと既にエプミアンテの社員が集まっていた。一瞥しただけでエプミアンテの社員とわかるのは服装が個性的だからだ。

どこで売っているのかと問い掛けたくなるほど、奇抜な色や形の服ばかり身に付けている。

男性陣はカジュアルで色を控えめにしたモノトーンのコーディネートが多い。

女性陣はというとその逆をいっていて、華やかすぎるほどだ。

レストランの外観はダークブラウンの外壁に白抜きで店名が入っているという、至ってシンプルなもの。

中へ入るとまるで一家庭の食卓をイメージしたかのような、温かく広々とした空間が視界に飛び込んできた。

千鳥柄のテーブルクロスを敷いた、広々とした黒のダイニングテーブル。

ダイニングテーブルに合わせたチェア。

壁紙には雪原を櫂そりで滑るトナカイとサンタクロースが描かれている。プレセントの箱や袋、クリスマスツリー、ジンジャーマンなどがある。ここに描かれていて、見ていて楽しい気分になせられる。

「いらっしやいませ！」

エプミアンテ様ですね？

用意が整っていますので、こちらにどうぞ」

白いエプロンを着たウェイトレスがこちらに近寄り、にっこりと笑いながら挨拶をする。

エプロンはシンプルな形だが、パステルブルーの水玉柄がエプロンをポップに仕上げている。

ウェイトレスに促され、団体用の広いテーブルに案内された。

テーブルいっぱいに置かれた皿には色とりどりの料理がきれいに敷

き詰められている。

奥から順番に席に座っていくが、ひとつだけ椅子があまつている。不思議に思ったドーリーは社員の顔を見ながらはっとする。

彼がまだ来ていない。

「シアンがまだ来てないわね」

「シアンはリハーサルがあるから遅れるんだろう。」

そのうち来るんじゃないか」

真っ白のシャツに星柄のネクタイを結んだルハルクは、いつも通り涼しい顔をして静かに席に着いた。

立っいても仕方ないので、シルバーのспанコールをふんだんに使用したVネックのワンピースを身に纏ったドーリーも彼に続いて席に着いた。

ドーリーは新入社員歓迎会を始めるために、ウェイトレスに目配せをして人数分のグラスを用意させた。

子供もいるのでジュースなどのソフトドリンクや、ワインが置かれている。

「ねえねえ、シアンって誰？」

隣に座っている梨星がシエリハに小声で聞いてきた。

彼女はまだ彼に会ったことがないから、知らなくて当然だ。

エプミアンテ社の社員にしては珍しく、デザイナーの類のクリエイターではない。

エプミアンテ社に入社する前は一バンドのギタリストとして活躍していた。

だがバンド内のメンバーとの度重なる争いが原因で、一時音楽業界を離れていた。

あれほどまで大好きだったギターすら弾くのが嫌になり、無気力状態だったシアンは偶然ドーリーに出会い、あることを条件にエプミアンテ社に入社した。

あることとは期限付きで寝床と食事を提供する代わりに給料は払わないこと。

音楽の技術を磨く為だけに努めること。

ドーリーがいう音楽の技術を磨くということは、ギター以外の楽器を弾けるようになることだった。

並大抵の苦勞ではなかったが、ドーリーと顔見知りの作曲家兼バイオリニストのスパルタともいえる厳しい指導により、立派なプレーヤーに成長した。

「今はエプミアンテの社員じゃないけど、音楽のクリエイターだな」「じゃあ楽器弾く人？作曲する人？」

「両方やってるよ。作詞作曲したり、サポートメンバーとしてライブで弾いたり、最近は販促の企画にも参加してるって社長が言ってたな」

興味深そうに相槌を打ちつつ、早く食事をしたいのか飲み物や食べ物を見つめている。

彼の噂話をしている時、当人が現れた。

襟足が肩に掛かる長さのウルフカットにした金髪。

優しそうな雰囲気醸し出しているやや下がり気味のダークブラウンの目。

それとは対照的に吊り上がった同色の整えられた太めの眉。

ゼブラ柄のブルーのネルシャツ。

スタッズが付いた赤のネクタイ。

手錠をはめている人魚のプリントが小さく入った、黒のサルエルパンツ。

メタリックカラーのグラデーションが眩しいスニーカー。

レッド・ブルー・イエローが使われていて、爪先には同系色のラメがきらきらと光っている。

真っ白に近い素肌に男性とは思いがたい細い腰は中性的だが、ネルシャツから覗く喉仏や鎖骨は男性的だ。

「すいません、遅れました」

彼はそう言いながら、全員に向かって深々と頭を下げる。

しかしその割に急いだ形跡は見当たらない。

息を切らしている訳でもなく、汗が浮かんでいるわけでもない。きつとマイペースに歩いてきたのだろう。

「謝る割には時間に間に合うよう努力したようには見えないな、シアン。」

「だが今日は仕事じゃないから大目に見ておくか」
いつもの調子でルハルクが呟いた。

遅れたといっても数分程度の微々たる事なのだが、仕事に完璧を求めるルハルクの前ではどんな言い訳も通じない。

さすがに真面目な彼も今日ばかりは大目に見てくれるようだ。ルハルクの許しを得たところで、シアンは空いている席に静かに座る。

するとドーリーが立ち上がり、グラスを手にする。

「さて、今年はまだ終わっていないけどご苦労様。みんなのおかげで素敵な年を迎えられそうだね。

来年からは可愛い新入社員が入社することになったの。

右も左もわからない新米だから、フォローしてあげてちょうだいね。さて堅苦しい話はここまでにして、今日は気が済むまで食べて飲んで迷惑かけない程度に騒ぎましょう！」

ドーリーの挨拶が終わると拍手が巻き起こった。

ドーリーがグラスを天高く上げると、社員たちも彼女を真似てグラスを高く上げる。

「乾杯！」

社員たちの声が重なり、皆グラスに口を付ける。

こうしてクリエイター集団による宴の幕が開いた。

31 楽宴の体温（前書き）

今回で忘年会？は終了です。

次回はライブ編を考えています。

趣味に走って申し訳ありません（笑）が、お付き合い頂ければ嬉しいです。

31 楽宴の体温

薔薇の形になるよう配置された彩り豊かなサラダ。

ケーキのように何段にも重ねられ、一度にたくさんの食材を楽しめるドリア。

チーズフォンデュ用に切り抜かれた、サンタクロース・トナカイ・クリスマスツリー・ハート・星の形をした温野菜。

和食に洋食、中華料理となんでもござれだ。

「チョコフォンデュは？」

「食事が終わってからな。」

まだいっぱい残ってるだろう？」

早くデザートが食べたいのだろうか、頬を膨らませるチエルニに優しく諭すようにレオニキールが言う。

遅れてやってきたシアンは肉じゃがや鯖の味噌煮といった和食ばかりつまみ、アルコールではなくソフトドリンクを流し込むように大量に飲んでいる。

ため息を二つ三つ吐き出すと、閉ざしていた口を開いた。

「こうして集まって食べるのもいいよなあ。」

ところでどこでこんな可愛い子を見つけてきたんだ？」

「エアリの勧めで専門学校に行ったら、偶然目に止まる作品があった彼女がいたんだ。」

そうだよな？」

シエリハに話を振られて梨星は無言で頷く。

無言で頷いたのは食物がまだ口の中に入っている為である。

シアンは興味深そうに梨星を見つめている。

シエリハが発掘し、ドーリーが勧誘したことは風の噂で聞いている。社長自ら勧誘したということはそれなりの個性を持った人物だということだ。

そんな彼女にシアンが興味を抱くのは極めて自然なことだ。

「てことはグラフィックデザイン？

それともイラストレーション？」

「イラストの方なんです。」

絵本とか、テイストは子供向けだと思っています」

シアンに聞かれて梨星が答える。

自分のことを聞かれたから答えたのに、彼は自分のことを言おうとしない。

興味を持ってくれるのは嬉しいけれど、やはり彼がどんな人間であるのか気になって仕方ない。

得体の知れない人間がいれば知りたいと思うのが自然である。

だがなかなか自分から言い出せず、会話に困った梨星は食事を始めた。

「ああ、紹介が遅れたな。初野^{ういの}シアン。元々はエプミアンテ社の人間って事になるけど、今はフリーで楽器弾いたり、アーティストの手伝いしたり色々やってるよ。」

「あ、俺に敬語は使わなくていいから。」

なんか苦手なんだよな、敬語使われるの。

それが嫌でも後輩にも一切使わせてないから、もっと楽に友達みたいに接してくれると嬉しいんだけど」

きょんと見つめる梨星にシアンはにつこりと笑う。するとチエルニがシアンの傍にやってきて、遠慮なくシアンの膝を椅子代わりにして座り込む。

酔ったサラリーマンのようにテンションが高く、ボディタッチならぬフェイスタッチをしてくる。

小さな手の平がシアンの顔を滑り、質感を確かめるように何度も触れてくる。

男性にしては平面的で触り心地が良く、至近距離で見なければ髭の剃り跡さえも確認できないほどの美しい肌だ。

その美しい肌を愛でながら、チエルニは恍惚の表情を浮かべている。「いつもすべすべだねえ。」

真つ白だし女の子みたい。

シアンって本当に男の人なのかなあ？」

「ありがとう。見ての通り正真正銘男の人だよ。

でもご飯が食べられないから、席に戻ろうな」

シアンはチエル二の誉め言葉を肯定しつつ、できるだけ優しく席に戻るよう促す。

だがチエル二が素直に戻るわけがなく、シアンの首に腕を回してしがみついた。

「やだあ！シアンはね、体にきれいな絵があるんだよ。

前は芍薬だったんだけど、今度は般若とか不動明王はどうかなあ？」

とても十に満たない少女の発言とは思えない言葉に、社員達は絶句している。

その時ちようどいいタイミングでウェイトレスが、ちょっとした軽食やデザートを運んできた。

南瓜を練りこんだ生地に鳴門金時をふんだんに使用したスイートポテトパイ。

雪だるまがちょこんと乗った、ホワイトチョコレートでコーティングされたケーキ。

星・ハート・サンタクロース・トナカイの形をしたココアクッキー。次々と現れる甘い誘惑に目を奪われたチエル二は、素早く自分の席に戻り食事を始めた。

「シアンはお酒飲まないの？」

社員達はチューハイやらビールやらを飲んでいるが、シアンだけが梨星やチエル二と同じくソフトドリンクを飲んでいる。

彼曰くレコーディングやライブの前は一切飲まないというルールを決め、実行しているらしい。

酒を一度飲んでしまうと止まらなくなり、酔っ払っては誰にでも絡んでしまうという無意識の悪い癖があるというのだ。

飲まない理由はそれだけではない。

翌朝の体調や喉の調子に障るからだ。

そして人前で演奏をするという仕事をしている手前、太らないよう体重にはひどく気を遣っているようだ。

だが一人暮らしなので食生活に関してだけは最悪の環境を自ら作ってしまったている、と彼は言う。

「でもシアンは楽器を弾く人で、歌ったりはしないんでしょ？
だったら少しぐらいいいと思うけど」

「飲んだら止まらなくなるから。」

無茶すると体はだるいしがらがら声になるしで大変なことになるんだ。

毎日がそんな状態だったら仕事にならないしなあ……」

シアンはため息を吐きながら、オレンジジュースを飲んでいる。
いい大人が宴会の席でひたすらジュースを飲むなど、かなり珍しい光景である。その時シェリハはドリーやルハルクにお酌をする合間に、チーズフォンデュをたっぷりつけたポテトフライをつまんでいる。

「あ、そうだ。シェリハ明日来てくれるんだろ？」

突然シアンに声を掛けられてシェリハは手を止めた。

敬語を使うなどと言われているので普通に話しているが、彼は年齢もキャリアも自分より数が上の先輩である。

企画には積極的に参加するものの絵を描けないシアンがまだエブリアンテ社にいた頃、独創的なアイデアを持つグラフィックデザイナーと噂されていたシェリハに目を付けたのが事の始まりだ。

創るものは違えどクリエイターに変わりはないので、両者は仕事を通じて刺激し合った。

シェリハはライブの販促では定番になっているTシャツ・タオル・ステッカー・ポスター・パンフレットなどのデザインを担当した。
それ以外にもライブのテーマやコンセプトに沿ったセットの提案なども行^{おこな}っている。

「ああ、もちろん」

「何から何まで世話してもらって、本当いつも助かってるよ。」

ペアチケットだから誰か連れてこいよ」

そう言われてチケットを受け取るものの、誘えるような人がいるわけもない。

シエリハが戸惑っていると、シアンが梨星を見てにやりと笑った。関心がなければ断られるだろうが、若年層の女性ならきつと頷いてくれるに違いない。

無料で行くことに遠慮があるというのなら、理由なんていくらでもある。

卒業祝いや入社祝いはまだ早いけれど、そんなことはどうでもいい。梨星を誘うことに決めたシアンは行動に出た。

「なあ梨星、明日暇？」

「何で？」

「今聞いてたから知ってると思うけど、明日ライブがあるんだ。シエリハを誘ったはいいいんだけど、もう一人行かないと勿体ないんだ。」

二人一組のチケットだから。

音楽聴いたりとか、嫌いじゃないだろ？」

我ながらかなり強引だが、そんなことは気にしてられない。

シアンの提案に梨星は迷っているようだった。

いくらこれからお世話になるであろう人物だったとしても、初対面なのだから遠慮することは自然なことであるといえる。

「気にしなくていいのよ、梨星。」

先輩からの入社祝いつて事で貰ったらいんじゃない？

可愛い後輩からお金をとるなんてことはしないわよ。

それにそういう場所に遊びに行くのも、いい勉強になるかもしれないしね」

そう言うのはワインを傾けるドーリーである。

梨星が卒業前ということもあり、作品の制作に力を入れるのもいいかもしれないが、羽を伸ばすことも必要だとドーリーは思った。

普段とは違った環境が新たなアイデアを授けてくれることもあるか

らだ。

「じゃあ…行ってみようかな？」

「チケツトはシェリハに渡しとくから、待ち合わせて一緒に来たらいいよ」

シアンに言われて梨星は照れ笑いをしながら、頬を染めた。
こうしてクリエイターによる晩餐会の幕が閉じたのだった。

32 魔の旋律に魅せられた男（前書き）

ライブ編に突入するつもりだったのに、無駄に長くなってしまいました。

次回こそはライブ編…のはず。

32 魔の旋律に魅せられた男

翌日の朝、いつものように目覚めて携帯を開く。
まだ食事をするのには少し早い時間だ。

今日の予定は夕方以降なので、慌てる必要はない。

シエリハがもう少しだけ寝ようか、と思った時携帯が鳴った。

朝っぱらから何事だろう、と見てみるとエアリからメールが入っていた。

『今日副社長も一緒に行くことになってるんだけど、待ち合わせ場所は妄流ヶ丘（もろいし）に来てちょうだい。

時間は四時ね。

そこで梨星とも待ち合わせてるから』

妄流ヶ丘とはバスの停留所の名称のことである。

駅前ということもあり朝は通勤ラッシュで人が多く、待ち合わせ場所としてはあまりよくない場所であると言える。

だがシアンが出演することになっているライブの開演時間は午後5時。

余裕を持って待ち合わせれば、人の波に吞まれて待ち合わせ時間に会えないということはない。

それにしてもルハルクが同行するというのがかなり気になるところだ。

印象だけで言えばそのような場所に足を運ぶイメージは欠片もないクラシックやオペラなら想像できるが、所謂大衆向けのものは彼と正反対のイメージなので想像できない。

ポップやロックのライブではしゃいでいる彼の姿を誰が想像できようか。

大方偶然スケジュールが空いたのが、ルハルクだけだったのだろう。メールで目が冴えてしまったので、とりあえず起床して食事を摂ることにした。

布団を片付け、トースターに食パンを入れる。

食パンが焼き上がる間に、パンに塗るジャム・牛乳・皿を用意して待つこと数分、いつものシェリハの朝食の出来上がりだ。

ジャムを塗ったできたてのトーストに牛乳、フルーツがたくさん入ったヨーグルト。

音のない空間でひとりで食べるのも少し淋しいので、テレビの電源のボタンを押す。

すると白のタートルネックカットソーと黒のプリーツスカートを身に付けた、モデル顔負けのアナウンサーが悲しみにあふれたニュースを淡々と実況している。

時間が経つてもこのテイストのニュースは新しいものが次々に出てくる。

殺人や窃盗など、挙げればきりが無いほどネガティブな要素で満ちあふれている。

それならば誰と誰がくつついたとか、結婚したとかいう類のニュースの方が心地いい。

そんなことを思いながら、シェリハは食パンを齧りつつテレビを見つめている。世の中は平等なようで不平等だ。

飢餓に苦しむ者がいれば、食に飽きるほど恵まれた者もいる。

貧困に嘆く者がいれば、埋もれてしまうほどの札束で世界を動かす者もいるのだ。

幸いこの国は平和といえるだろう。

戦争のために血を流すこともなく、飢餓に苦しむこともない。

必要とすればいつでもありとあらゆる物が入る。

不必要になれば廃棄し、すべての物に対する価値観は安っぽいものになっている。

それは物に対してだけではない。

人に対してもそうではないのだろうか。

会社の利益にならないと判断されれば、首を切られても文句は言えない。

エプミアンテ社の社長であるドーリーはああ見えても情の深い女性なので今は切られずに会社に滞在できているが、この先はどうなるかはわからない。

シエリハは何よりもそれが恐ろしいのだ。

（やめよう。考えれば考えた分だけ、黒い気持ちに包まれる）

シアンの演奏を見に行くのだから、こんな気持ちを会場に持っていくのはよそう。

シエリハは自分にそう言い聞かせた。

食事を終えると今は日何を着ていこうか、と思案する。

冬とはいえ人口密度の高い空間に飛び込むわけだから、動きやすい格好が一番いいだろう。

ということは必然的にセーターやニットといった厚手の物、凝ったデザインの服は除外しなければならないということだ。
外は寒いといっても中は熱気で包まれることだろう。

それなら薄手のカットソーにパーカーを羽織り、その上からコートを着るくらいでいいだろう。

黒のトレンチコート。

ダークブラウンのUネックカットソー。

ベージュの裏地がフリースのストレートジーンズ。

そして防寒対策にマフラーと手袋を身に付ければ、いつでも出かけられる。

食事後の片付けや洗濯といった家事をして、シエリハは夕方までのんびりとして過ごした。

真面目な副社長が来るとのことだから、待ち合わせより少し早く来るだろうと思い、シエリハは三十分前に家を出た。

まだ帰宅ラッシュの時間はないので、人はそれほど多くもない。約束の待ち合わせ場所近くのベンチに一人の男性が座っている。白のショート丈のトレンチコート。

黒のコーデュロイのパンツ。

黒の短髪に涼しげな切れ長の目。

エプミアンテ社の副社長・ルハルクである。

「副社長！お早いですね」

「シェリハか。お前も早いじゃないか」

シェリハが駆け寄ると、ルハルクは立ち上がり手を振る。

先にシェリハに座るよう促してから、年長者でありながらも自分が後に座るといふ動作はまるで紳士のもののようなのだ。

シェリハは横目でルハルクの端正な横顔をちらりと見る。

クールでポーカーフエイスな彼が、ライブ会場でどんなふう to 弾けるのだろう。

シェリハの頭の中はそれだけでいっぱいだった。

「妙なことを考えているだろう」

突然ルハルクに話し掛けられて、シェリハはびっくりとする。

抑揚のないトーンで言われると冷たく聞こえて、教師に怒られているような気分になるのだ。

「いやそんなことないですよ。」

副社長が来られるとは知らなかったんで、意外だなあと思って思ったんです」

「そうだろうな。どうせ機械みたいに冷たいだの、仕事が恋人だの、好き勝手噂してるんだろう」
あなが

そう冷たく言い放たれ、強ち嘘とは言いきれないがシェリハはとりあえず否定した。

でも確かにそのイメージが先に浮かぶのは確かなのだ。

多忙な社長の片腕となり、オールマイティーに仕事をこなす。

それは社員の憧れであり、逆に言うともあまりにも完璧すぎて社員の目には非現実なものに映った。

完璧を求める社員という偶像を作られることによって、顔にこそ出さないが疲れ切っていた。

そんな彼を癒したのはシアンがギターの弦を弾いて紡ぐ音だった。激しい音でありながらもどこか優しく、自分が持つ世界へと引き込

もうとする。

そう、まるで絵本の世界にでも連れて行かれたかのように。

『俺が言うのもなんですけど、俺なんかのギターの音に癒されるなんて、副社長かなり病んでますよ。』

字や絵はその人の精神状態を表すなんて聞いたことがありますけど、音もそうなんですよ。

俺の音、雑で荒いでしょ?」

いつかは忘れてしまったが、シアンは照れながらそう言っていた。

一人で活動するようになり、仕事が増え続けても尚自分を過少評価している。

その謙虚さとアーティストとしての頑固さを合わせ持ったシアンを知ってからというもの、同性でありながら虜になってしまったというわけだ。

「あの人衣裳もそうですけど、メイクとスタイリングも極力自分でやるみたいですからね。

特に顔見知りじゃない人には触られるの嫌みたいですし」

「エプミアンテにいた頃の習慣がまだあるようだな。

アーティスト活動もそうだが、こだわりをもってやっているから中途半端にされるのが一番嫌なんだろう」

シエリハやルハルクの言う通り、シアンはすべてにおいてこだわりを持っている。

煌びやかな服装はもちろんのこと、仕事や人との付き合い方など常軌を逸しているものがある。

先ず仕事中は急用でない限り、電話に出ることはない。

家族や友人、クライアントであっても絶対に出ないのだ。

そう、それがたとえ恋人からであってもだ。

そのため彼に電話を掛けると、必ずといっていいほど留守番電話に繋がる。

彼にしてみればマナーモードにしているても、サブディスプレイの光さえ煩わしく、作業に集中できないというのだ。

唯一許してくれている手段のメールさえ、返信は作業の目処がついてからである。

シアンがこういう人間であることは、彼と長い間仕事を共ににしたことがある人達は理解しているので、今更説教などする気にはなれない。

したところで変えてくれる気がないのはわかっている。

人との付き合い方も同じことが言えるだろう。

基本的に愛想がいいが、全ての人との関わりを必要としていない。気に入った人間とだけ付き合っているわけではないが、どうしても反りが合わない人間という存在も出てくる。

彼の場合体が拒否反応を示したら反りが合わない証拠なので、できる限り関わらないようにしている。

いいことだとは思っていないが、努力してもどうにもならないことなのでどうしようもないと割り切っている。

それとは正反対に気に入った人間とは仕事以外でも頻繁に連絡を取っている。

エプミアンテ社の社員がいい例だろう。

簡潔に言くと初野シアンという人間は、個性的な人物であるということだ。

「もうそろそろ来ますかね？」

「そうだな、ああ…あれじゃないか？」

ルハルクがシエリハから視線を外す。

その先には女性のシルエットがふたつ。

数秒後にそのシルエットが近付いてくる。

エアリと梨星であることを確信し、二人は立ち上がった。

33 異色の組み合わせ（前書き）

やっと次話でライブに入ります。
かなり前置きが長すぎましたね。

33 異色の組み合わせ

「ごめんなさいっ！ジャストに着いたらいいかと思って…」

「すみません、副社長が時間に律儀な人だって忘れてました。随分長いこと待っていたんだんでしょ？」

息を荒くしてやってきたのはエアリと梨星。

エアリは珍しく着物を着ていない。

メタリックのパープルが眩しいポンチョ。

クラッシュ加工を施したブラックのショートパンツ。破れた部分からは白と黒のストライプが覗いている。

エナメル素材に蝶を描くようにスタッズが配置された、黒のバレエシューズ。

跳ね上げた黒のアイラインに黒のアイシャドウが大人の色香を醸し出している。

梨星は黒のダッフルコート。

白と黒のストライプ柄のネイビーのジーンズ。

薔薇柄の白いレースで甘く味付けされた、ダークブラウンのウエスタンブーツ。

エアリの華やかなメイクとは対照的に、ヌーディーでナチュラルである。

天使のように白い肌の上に映える、ピンクのチークとピンクが混じったブラウンのアイシャドウ。

少女と女性の間9#OKはにいる、そんなイメージだ。

「いい女は男を待たせるものだ。

…とはいっても約束した時間だけでいうなら、それほどは待っていない。

俺たちが時間よりも早く来たのが、悪いんだからな。さ、行くとしようか」

ルハルクはさりとて言うと、丁度タイミングよくやってきたバスに

乗り込んだ。ルハルクはなんてスマートな男なんだろう。女性から見てもそう映るだろうが、男から見ても相当スマートである。

背は高くすらりと伸び、背筋はぴんと張っている。

体にフィットした服を着ると様になる、適度に筋肉の付いた体。

そして自信に満ちあふれた態度や言動、行動。

その姿こそ大人という言葉が相応しい、とシェリハは思う。

それは彼を苦しめる材料になってしまっただろうけれど。

シェリハ達もルハルクに続いて、バスに乗り込んだ。

車内は空席もなく、立っている乗客が目立つ。

シェリハ達もその一人なのだが、背が高いこととエアリが派手な色の服を着ていることでかなり悪目立ちしている。

梨星はよく言えば日本人らしい、平面的な薄い印象の顔の持ち主なので、彼女を除いた三人が目立っていると言っても過言ではない。特にエアリは化粧をしている為、深い彫りが更に強調されている。

「人いっぱいだね。みんな何処に行くのかな？」

「そうね、私の考えが外れていなければ目的地は同じはずよ」

梨星の問いに優しく答えたエアリはちらりと乗客を見る。

エアリに勝るとも劣らない、奇抜な衣装に身を包んだ若者で溢れている。

中には地味な格好の者もいるが、数としては少ない方だろう。

その奇抜な衣装を私服と称するには斬新過ぎるデザインである。

衣服というよりかは衣装という言葉がよく似合う。

諄^とすぎるほどティードを重ねたレースとフリルでデコレーションされた、ワンピース。

裾からレースがはみ出した、背中にリアルな髑髏が描かれた真っ赤なロングコート。

メイクや髪型も人数の分だけ様々だ。

シェリハからすれば人前でそんな派手な格好をすることなど狂気の

沙汰である。

父親に似たおかげで暗い色の服に身を包んでも目立つというのに、何故わざわざ自ら目立つ格好をするのか理解に苦しむところだ。

いや、理解したくないだけだ。

それは彼が目立ちたくないという地味な性格が影響しているのだろう。

「じゃあみんなお客さんなの？」

「そうだと思うわよ。乗客にしちゃみんな派手でしょ？」

人のこと言えないけど」

苦笑しながらエアリが言った。

エアリと梨星が談笑している間に目的地へと辿り着いたらしく、乗客が次々に降りていく。

皆向かう先は同じ建物だ。

その建物はごく普通の多目的アリーナだ。

ライブハウスではないところが彼らのバンドが、如何に大きな存在であるかを痛感させられる。

中に入ると空気が一変していた。

照明は辛うじて足元が見えるくらいの明るさだ。

色は紫のグラデーションで統一されており、妖しい雰囲気醸し出している。

「席に着く前にまずは荷物だな。

荷物は少ないようだし、全部一緒にまとめようか。

上着も必要ないだろう」

そう言いながら全員の不要な荷物を回収したルハルクは、ロッカーを探しに一人でその場を抜け出した。

涼しい顔をしているから表情でわからないが、楽しむ気満々である。副社長の肩書きを持つ男とて、ここではただの一般人なのだ。会社の副社長ではなく、ただの成人男子に過ぎない。

仕事のストレスから解放され、今はこの空間で楽しいひとときを過ごしたい。

社会人であるシェリハやエアリは勿論のこと、学生である梨星もそう思っている筈だ。

デザイナーであるシェリハやエアリはこうして観客として、自身が企画に参加したライブを楽しむことはあまりない。

そもそも機会が殆どないのだから当然だ。

機会はあるてもスケジュールが合わなかったりで、いつも見ることなく終わってしまう。

だが今回はタイミングよく休みが合ったので、足を運ぶことができた。

そしてシアンの厚意で今日はここに来ることができたのだ。

いくら企画に参加したとはいえ、主役であるアーティストに比べれば部外者同然であるのは言うまでもない。

そんな部外者に自らチケットを手配するなどという行為はまず有り得ないのだ。今回のようなケースは奇跡的だと言ってもいいくらいだ。

「私こんなところに来るなんてすごい久し振りだよ」

「やっぱり学校忙しいんだなあ。」

大学なら休みが多いんだろうけど、専門学校は課題やら制作やらで休まないもんなあ……」

梨星の言葉にシェリハは自身が専門学校に通っていた時を思い出していた。

好きで専門学校選んだのに、学校生活と呼ぶにはあまりに相応しくない日々だった。

クリエイターとして活躍する教師による厳しい授業。

限界を定めない無茶ともいえる課題。

頭の中で思い描いたデザインが思い通りに表現できなかった日は、女々しくも子供のように独り泣き続けた。

そんな苦い思い出は今となっては良い経験だったと思えるようになった。

きつと梨星もそんなことを経験してきたのだろう。

梨星に対して明るく無邪気な少女という印象を持っているのだが、実際はきつと明るく無邪気なだけではない筈だ。

強い意志を持ち続け、目標のために努力を怠ることなく邁進することとができれば、学校の中とはいえ生きてはいけないからだ。そうでなければクリエーターとしてはやっていけないだろう。

だからこそこんな日くらいは学校のことを忘れて楽しんでほしい。今のシェリハにはそれが彼女にできる精一杯のことだからだ。

「待たせたな。開演までまだ時間があるが、席に座ろうか」

話をしている間に戻ってきたルハルクが微笑みを浮かべながら言う。シェリハ達はチケットの番号を見、静かに席に着いた。

34 自由を問い掛ける手の平（前書き）

ライブ編は今回で終了です。

彼らはサブキャラなので細かいことは描いていませんが、以前のステージからなぜ空白の時間があつたのか、都森の声はなぜ震えていたのか、彼らとキャラクターの絡みがあつた時に追々書いていきます。

次回はライブ後の晚餐編です。

34 自由を問い掛ける手の平

小鳥の甲高い囀りなげと川のせせらぎが聞こえる。

そして控えめなドラムの音がリズムを作る。

前でもなくとも舞台が見えるよう設置されたモニターに、森と鍵の掛かった鳥籠が映る。

まるで意志を持ったかのように木々が蠢き鍵穴に侵入し、錠が地面に落ちた瞬間鈍い音を立てながら鳥籠の入口が開く。

囚われの鳥は空高く羽ばたいていく。

小鳥の囀りと川のせせらぎの音が同時に止み、ギターをはじめ様々な楽器がワントテンポずれてシンプルなメロディーを鮮やかなものにしていく。

その時舞台の照明が足元からゆっくりとメンバーを照らし、観客は彼らを確認すると総立ちになり会場は賑やかになった。

だがルハルクだけ座ったままだ。

「副社長、始めましたよ」

「こんなところまでそんな呼び方をするなよ。」

俺は座って見るから気にしなくていい」

立ち上がらないルハルクを見て、シェリハは不思議そうな顔をした。彼は楽しみにしていた筈なのに、座って観覧とはどういうことなのだろう。

立ち上がり全身で踊るような激しいものを好まず、座って音楽を楽しむタイプなのだろうか。

ボーカルは左のサイドのみゆるいウェーブをかけたブラックのウルフカットの青年。

体格だけで言うなら青年というよりは、青年にしてはやや小柄で全体的に華奢なので成長途上の少年という言葉が最も相応しいかもしれない。

ナチュラルメイクながらやや垂れがちの大きな目と天を向いた長い

睫毛は女性のようなである。

女性の寝起きを連想するような、ソプラノにハスキーを混ぜたような声はどこか色っぽい。

V字を描くようにフリルをあしらった黒のシャツ。

フリルにはフリンジが付いており、彼が動いたび違う顔を見せている。

サスペンダーを垂らしたベージュのチノパン。

皺がプリントされたブラウンのショート丈のウェスタンブーツ。

ベースは眉にかかるかかからないかという長さの前髪のみストレートで、ダークブラウンの短髪にゆるいウェーブをかけた青年。

切れ長のダークブラウンの目は意志の強さを象徴しているかのようだ。

瞼にのせられたマットな質感のブラックのアイシャドウが、さらに意志の強さを誇張している。

ゴルドの王冠が大きくプリントされた、黒のUネックカットソー。引きちぎられたパールのネックレスがプリントされた、ダークインディゴのストレートデニムパンツ。

白と黒のボーダー柄のスニーカー。

バイオリンは黒の中折れ帽を被った、ピンク寄りの明るいブラウンのセミロングストリートヘアの青年。

グレーをベースにしたパープルのアイシャドウのグラデーションがとても艶っぽい。

大きくも小さくもない目だが瞼が凹んでいるため、アイシャドウがよく映えている。

ベージュのニットトッパーカーディガン。

胸元にフリルをあしらった、豹柄のシフォンブラウス。

サテン素材のブラックのガウチョパンツ。

肌が見えないデニールの、シンプルなグレーのタイツ。

エナメル素材の黒の編み上げブーツ。

ドラムはサイドのみコーンロウにし、それ以外は襟足を胸の谷間

に当たるくらいの長さの露草色のウルフカットの青年。

髪色に合わせているのか、ビビッドな暖色系のメイクが目を引き。
ブラックとカーマインのボーダー柄のVネックのニット。

シルバーホワイトのスキニージーンズ。

ブラックのワークブーツ。

そしてギターのシアンは金髪を振り乱しながら、ギターを弾いている。

グレーのアイシャドウで瞼を彩り、アクセントとして目尻にチェリーピンクのアイシャドウを乗せている。

クラッシュ加工を施した、パンジーのオフショルダードルマンニット。

ニットから透けて見える、レイヴンのタンクトップ。

左腕に広がる鮮やかな刺青。

羽を広げた孔雀と枝下桜したれが描かれている。

ブラックのコーデュロイサルエルパンツ。

メタリックカラーの配色が眩しい、マーブル柄のハイカットスニーカー。

メンバーそれぞれが個性的で異彩を放っている。

エアリと梨星はまるで子供のようにリズムに身を任せて踊り、はしゃ燥いでいる。

ルハルクは相変わらず座っているが、笑みを浮かべていることから楽しんでいることが窺える。

「可愛がつて育てた後輩がこうも成長してくれると嬉しいものだなあいつらがこんなになるなんて思わなかった。」

シエリハ、お前もだ」

「え…？」

爆音の中音を掻き分けるように二人は話していた。

シエリハはなぜ自分の名前が出るのか不思議に思い、聞き返した。

「いつも下を向いておとなしくて、自己中なクライアントに当たった時、泣きそうになってた時もあっただろう。」

そんな奴が長いこと勤めるなんてできるのか、とさえ思ったが…見てみる。

今日の舞台はお前が作ったも同然だ。

お前が作った世界に酔い痴れてる、俺もエアリも梨星だってそうだ」ルハルクの言葉はまるで魔法だ。

澄んだ水のように心に染みていく。

普段から厳しい人だと知っているから、こういう時の甘い褒めを信じてしまいそうになる。

彼の言葉がくれた余韻に浸っていると、突然楽器の音が止み、ドラムの音だけが僅かに聴こえる。

楽器の音というには小さなもので、まるで心臓の鼓動のようだ。

「終わるのは淋しいけど、次でラスト。

以前のステージから空白の時間があって、わけあって今日久しぶりのステージだったんだけど、…やっぱり歌と音を封じられることほど、辛いことなんてない。

解放されたからこそ、どれだけ幸せだったか痛感したんだ。

選択肢が多いからこそ、みんなにも自分にとって相応しい自由を選んでほしい。

その手の中にみんなが求めているものがありますように…。

…長くなったけど冷めた顔するのは、まだ早いぞ！」

玉のような汗を浮かばせながら、ボーカルの都森^{つもり}は所狭い舞台を駆け回る。

メンバーの音に合わせ、水面に浮かぶ舟のように静かに声を乗せていく。

その声は僅かに震え、滴り落ちる汗が涙のようにも見えた。

35 飢えた意思は石のように（前書き）

ライブ後のお話になります。

ルハルクは頑固なのでこういう時は譲歩しません。

疲れているときだからこそ、そういう行動を取ったのかもしれないが。

次回は食事編です。

35 飢えた意思は石のように

会場を出ても尚、ビートは胸の中で残っている。

激しくも美しい音と、都森の声のハーモニー。

夢のような時間はあつという間に過ぎてゆく。

そう思うと一気に現実に取り戻された。

「あつという間でしたね。」

ルハルクさんずっと座ってましたけど、楽しかったですか？」

そう訊くのは終始エアリと年相応に騒いでいた梨星だ。

ルハルクは始まりから終わりまでずっと座っていた。

観客がメンバーの名を大きな声で呼んでいても、つられることなく座ったまま観覧していた。

そんな彼を見て大概の人は彼らのライブを楽しんでいるとは決して思わないだろう。

「ああ、もちろん楽しかったよ。」

今回みたいなライブは騒いでなんぼ、な所があるジャンルなんだろうが、俺はどうも騒ぐのは苦手なんだ。

第一俺が梨星やエアリみたいに騒いでいたら…おかしいだろ？」

ルハルクに言われて三人は微笑する。

確かにルハルクが梨星のように騒いでいたら、彼に対して持っているクールな印象は崩壊してしまうだろう。

だがこんな時くらい多少暴れるように騒いだっていいのではないかとシェリハは思った。

座って静かに観ることが彼の主義なら、どうすることもできないが。

「さて、今からどうしようか。」

何か食べて帰りましょうか？」

この面子でっていうのも珍しいでしょう？」

エアリの提案で四人で夕食を食べに行くことになった。

当然の事ながら店を選ぶのは年長者のルハルクだ。

とは言っても自分勝手に決めるのではなく、三人の希望に沿うよう決めていくという、誰に対しても平等なルハルクらしいやり方だ。ライブで騒いだ後ということで極力疲れさせないよう、場所を付近に限定しているのが彼らしい気遣いだ。

彼が選んだ店はダークブラウンを基調とした、シンプルなレストランだ。

レストランといっても大衆向けの安っぽいレストランではない。

大きめのテーブルや椅子のカラーリング、カーテンなどの細部ひとつひとつに拘り、お洒落でリラックスできる印象を与えている。

「いらっしやいませ」

黒髪のポニーテールのウェイトレスが笑顔でこちらへと歩み寄ってくる。

制服のエプロンもブラウンを基調としているが、野暮ったい印象はまったくない。

裾に付いた花を模したレースのおかげなのだろうか、華やかに見える。

「お客様、誠に申し訳ありませんが本日は団体のお客様の予約がございまして…」

ウェイトレスがルハルクの顔色を窺うように言う。

彼女の様子を見る限り、どうやらここで食事できそうにもない雰囲気だ。

だがはいそうですかと店を出て、新しい店を探してシェリハ達を疲れさせることを選ぶルハルクではない。

「ああ、予約はしていないから無理は言えないな。

一番狭い席でいい」

「いえそうではなくて…本日は貸し切りのお客様がいらっしやいます。

席をご用意するのが難しいんですよ」

ウェイトレスの一言にルハルクの眉がぴくりと動くのを、シェリハは見逃さなかった。

顔色には出してはいないが、彼は確実に不快な気分になっている。
ウェイトレスの言葉は丁寧ではあるが、ここでは食事はさせないと
言っているようなものである。

「客を選ぶようになったとは、この店も随分大きくなったものだな。
お嬢さん、店長を呼んできてくれ」

「でもっ……」

反抗の意思を表すもののルハルクの無表情の圧力に、ウェイトレス
は真つ青な顔をしながら店の奥へと駆けていった。

恐らく自分一人では対処できないので、店長を呼びにいったのだろ
う。

少し店員を不憫に思ったシェリハはルハルクに話し掛けた。

「副社長、ここが無理なら余所にしましょうよ」

「またこれから外に出て延々と歩くことになるんだぞ？」

俺たちは悪くない。だってそうだろう？

貸し切りにするなら何らかの貼り紙だとか看板だとか、客に知らせ
る手段を取るべきだろう？

だがそれをしなかった。

店側のミスだ。俺たちに非はない」

ルハルクは腕を組みながらきっぱりと言った。

頑固な彼を動かせる者はどこにもいないだろう。

ルハルクとシェリハが会話していると規則的な足音が聞こえてきた。
割烹着を着た長身の男性と先程のウェイトレスである。

カーマインのバンダナで黒髪を覆い、割烹着の下にスノウホワイト
カットソーを着ている。

格好からしてキッチンで作業をしている者と見受けられる。
だからだろうか、カットソーの袖を捲り上げている。

太めの眉にまんまるの大きな目。

睫毛は短く少ないが、大きな目が印象的だ。

ルハルクが静であるなら、彼は動のイメージだ。

袖から覗く二の腕はやや肉付きがよいものの引き締まっている。

割烹着がややサイズが小さいようにも思えるが、腹や背中に余分な肉は見受けられない。

それを考えると彼は筋肉質なのだろう。

「いつからこの店は客を選ぶような高級な店になったんだ？アティータ」

「ミィハーどもから目立つ職業の人間を守るのは当然のことだ。社員にもバイトにもそれを優先するように言っている。

彼女はそれを守ろうとしただけだ。

あまり責めないでやってくれ。

今日はUNISEが打ち上げでここを使う予定になってるんだ。

彼らに危害を加えないなら好きなように使ってくれていい。

彼らを守るためとはいえ悪かったな」

アティータと呼ばれた男性は深々と頭を下げた。

ルハルクは納得したのか、口角を上げて満足そうに笑った。

そんな彼を見て三人は胸を撫で下ろしたのだった。

36 花に囲まれたレストラン（前書き）

ライブ後のディナー編です。

花とは咲く美しいそれではなくエブミアンテ社員、デザイナー・イラストレーターUNISEやシアン（シンガー・プレイヤー・サポーター）のことです。
次回もディナー編となります。

36 花に囲まれたレストラン

店長のアティータから許可を得たところで、エアリと梨星は皿を持ってその場を去ってしまった。

皿に料理を盛り、互いの顔を見て満面の笑みを浮かべている。他愛もないことで燥^{はし}ぐ姿はまるで姉妹のようだ。

シェリハとルハルクはそんな二人を静かに見つめていた。

「あれだけ暴れたのにまだ元気があるんだな。」

若いつてだけで次元が違う生き物のような、そんな気がするな」

ルハルクは苺を浮かべたメロンソーダをストローで吸い上げながら言った。

三十路を過ぎた男性がジュースを飲んでいるこの光景は少し異様だ。梨星やエアリが飲んでいるならそうは映らないのだろうが、メロンソーダはクールのイメージを貫くルハルクとは対照的な存在だ。ようやく梨星とエアリが戻り、料理とともにテーブルに華を添えた。海の幸を飾ったピザ。

野菜を磨り潰して揚げた色鮮やかなフライドポテト。

チキンライスをふわふわの卵で包んだオムライス。

洋食がメインだが、和食や中華など幅広くある。

「何がいいか分からないから、適当に選んできました。」

和食や中華、あとは見たことない外国の郷土料理なのかな？

そんなのもありました」

梨星はそう言いながら全員に箸とおしぼりを手渡し、席に着くや否や食事を始めた。

よほど腹を空かしていたのだろうか。

食事の合間に飲んでいるのはオレンジジュースだ。

子供ではないといつても、こういった細かいところで幼い部分が出てしまうのだろうか。

「炒飯を餃子の皮で包んだやつも美味しかったぞ。」

オムライスとはまた違った味わいがある」

「へえ、面白いですね。」

あとで見に行こうかな」

ルハルクとシェリハの会話が終わる頃、梨星はふうっ、と息を吐き出した。

満腹になったのだろうか、幸せそうな顔をしている。食事を終えた後、梨星は挙動不審だと思われても仕方ないほどにきよろきよろと辺りを見回している。

「どうしたんだ？さっきからそわそわして」

「え、シアンがいるのかなあって思ってた……」

梨星のミーハー丸出しの発言を聞いて、大人達は意地の悪そうな笑みを浮かべている。

現実的に考えて、ミーハーでなくても気になってしまふのは当然のことである。

学校の中ではデザイナーを志す生徒や現役の教師しかいないので、シアンのようなアーティストは梨星にとって特異な存在だ。

発想を形にするのにペンを用いるのは共通しているが、梨星が個人の世界を視覚化するのに対しシアンは世界を聴覚化する。

その点に於いて彼は梨星にとって劇薬のような存在なのだ。

「へえ、アーティスト様に会いたかったわけだ？」

でも会えないことはないわよ？

先輩と後輩の仲なんだし？」

「違うよ」。ただ純粹に人柄と音楽が好きなだけ。

すっごくきれいだったなあ……」

エアリに茶化され、梨星はシアンの姿と音を脳裏に思い浮かべながら、うつとりとした表情を浮かべた。

同性から見てもアーティストとして、一人の人間として彼は魅力的な人物だ。

独自のライフスタイルや仕事にこだわりを持ち、誰に対しても気さくで面倒見がよく、目下の人間からすれば兄のように身近に感じら

れるような存在だ。

シェリハから見てもシアンはするように映っている。

シェリハ達が店内を独占していたその時、店内に幾多もの声が重なる音とともに団体客が来店してきた。

性別も年齢も様々な人々は七分丈のカットソーにジーパンといったラフな格好をしている。

その中にサングラスをかけ、背が高くすらりとした体型の青年が数人いた。

格好は他の人々と同じようにラフではあるが、漂う空気が少し違っていた。

「あれ…まさか…」

無意識にシェリハが呟くと、通り掛かった彼らがシェリハ達の方を見た。

サングラス越しに本人だと確定できる双眸が見えた。

メイクを落としたのか華やかさはないが、面影は残っている。

素肌は決して若くはなく、年相応の大人の肌だ。

「シェリハにエアリにルハルクさん。…それと妹さん？」

誰のかは知らないけど」

サングラスを外して声を掛けたのは都森だ。

都森の言葉に梨星は首を振った。

先程ステージに上がっていた歌手が目の前にいることで、緊張しているのかもしれない。

同じ世界で生きている人間同士なのに、特に芸能界に身を置いている人間というものは一般人にとっては雲の上の人のような存在なのである。

だからきつと彼らが目の前にいることが非現実的に映ってしまうのだろう。

「都森さん、お知り合いなんですか？」

そう言いながらシェリハ達の顔を横目で見ているのは、七分丈のカットソーにジーパンの格好をした男性だ。

どういった関係なのかは分からないが、おそらく彼らをサポートしている者なのだろう。

七分丈のカットソーはみんな色が違うようだが、デザインは同じものようだ。

人ひとりの影もない森に置き去りにされた、開いたままの鳥籠がプリントされている。

ひょっとしなくとも販促用Tシャツかもしれない。

「ああ、前の会社の上司と後輩だ。

今でも一緒に仕事をすることもある。

シェリハには今回もかなり世話になったんだ。

…また後で顔を出すことにするよ。

じゃ、行こうか」

都森はそう言いながらシェリハに意味ありげな視線を送る。

それはまるで男性から女性に投げ掛けるような、色気を感じるものだった。

そして都森はUNISEのメンバーとシアン、サポーターであると思われる男性を連れてその場を去っていった。

37 偶像も溶け込みたい

エアリと梨星は皿を前に真剣な表情を浮かべていた。

目の前に広がるのはパレットのように色彩豊富なアイスクリーム。

そして一口サイズに切られた、まるでおもちゃのようなケーキ。

二人とも堅く口を閉じたまま、皿にアイスクリームやケーキを盛り付けていく。

その様子を見つめていたシェリハとルハルクは浴びるようにジュースを飲み続けていた。

シェリハはホットのレモネードを、ルハルクはホットのココアだ。

いい年をした大人2人がジュースとは、彼らの容貌や服装に全く似合っていない。

「腹に入れば消化されるのは同じなんだがな。」

「まったく理解に苦しむな」

「可愛いものや綺麗なものの、美しいものが好きですからね。」

でも旨そうですよ？ 胃がもたれそうだけど」

諦めを込めた台詞を吐きつつ、二人は口元を手で覆った。

食事を終えたばかりの二人には刺激が強すぎる、尋常ではない量のスイーツが皿の上に置かれていた。

アイスクリームやケーキ、フルーツが数字のように美しく並べられ、

エアリと梨星特製のスイーツは華やかな彩りで目を奪われるほどだ。

さすがはデザイナーと絵本作家志望のたまごでもいべきか、とても独創的なセンスを持っている。

エアリのものは原色のアイスクリームをメインに、ブラックやブラウンのケーキで地味なイメージを与えている。

仕上げにカラースプレーを用いることでかなり華やかになっている。

梨星のものはカラースプレーを埋め尽くすように付着させたアイスクリームを円形になるように並べ、その周りを囲むように様々なフルーツで埋め尽くされている。

「疲れた時は甘いものが食べなくなるのよね。

…やっぱり副社長の目に狂いはありませんね。

副社長とご飯を食べに行ったら、ハズレに当たらないんですもん」
エアリはそう言いながらスプーンで掬い取り、口に運んでアイスクリームの甘さと冷たさを楽しんでいる。梨星は無言でひたすら食べ続けている。

その姿はまるで小動物のようだ。

ひたすら食べ続けていた梨星の手の動きが突然止まった。

長くしなやかな指がスプーンに添えられていた。

「シアン、食べられないじゃない」

「せっかく挨拶がてらきたつてのに、ガツガツ食べてるから。

…今日見に来てくれたんだよな、サンキュ」

指を添えていたのはメイクを落としたシアンだ。

素顔に中性的な魅力はなかったが、年相応の男性的な魅力が見え隠れしていた。彼の来訪に3人は笑みを浮かべ、歓迎していた。

エアリだけが無表情で1人だけ仲間外れにされているように見える。

「エアリもきてくれたんだな」

「副社長が誘って下さったからよ。

UNISEのパフォーマンス嫌いじゃないしね」

エアリが突き放すように冷たく言い放つ。

シアンに対するエアリの態度が冷たいのには理由があった。

エアリは日本独自の文化や風景に興味を持ち、来日に至った。

次第に彼女は外国人ではなく、日本人らしい女性になっていった。

そんな常識人の彼女がシアンと出会うことになる。

面接ではなく社長自ら拾ったという、少々変わったギタリストがいることは知っていた。

でも音楽業界の人間と関わることはない、エアリはそう信じて疑わなかった。

その時までにはまさかシアンと関わることになるとは思っていなかったのだ。

先ず距離を縮めたのはシアンの方だった。

彼はCDジャケットに相応しいモデルを探していた。男性の興味を惹くような色気ではなく、自然な色気を持った成人を過ぎた若い女性を。

その時シアンの脳裏に一人の女性が浮かんだ。

外国人でありながら和装を好み、尚且つ着熟きこなしている女性。

グラマラスというよりはスレンダーで、自然な色気を持つ女性。

シアンは考える間もなく、彼女に会いに行った。

『エアリ。エアリ・ブルークトだよな？』

『ええ、そうですね。あなたは？』

『ああ、悪い。俺は初野ういのシアン。』

初対面の相手に申し訳ないとは思っただけで、モデルを探してて。あんた以外には考えられないんだ。

一度切りでいいから、してくれないか？』

シアンの必死さにエアリは快諾しようとしたが、内容を聞いて前言撤回した。

彼が要求してきたものはセミナーだったからだ。

初対面の人間にそんなことを頼むなんて、あまりにも非常識すぎる。怒りに任せてエアリはシアンの頬を打った。

『あなたが先輩だつてことは知ってますけどね、非常識すぎるわ！恥ずかしいとは思わないの！？』

『作品を完成させる為なら恥もプライドも捨ててやるよ。』

元々なんもんじゃないしな。

…ってことで頼む！』

彼は初対面の女性に頬を打たれても、責めることも怒ることもしなかった。

きっと自分に非があると分かっていたからだろう。

こだわりを譲れない気持ちを語る言葉と目に嘘はなかった。

寧ろ生まれたての赤子のように、真っ直ぐで濁りひとつないように見えた。

ジャンルは違えど物作りに対し妥協しないというのは理解できる。だからといってはいそうですか、と受けるわけにはいかない。

彼に妥協できない部分があるなら、自分にだって妥協できない部分がある。

これはエアリのプライドの問題である。

一時間の口論の末、エアリはモデルとして彼と仕事をする事になった。

セミヌードではなく肌が透けるワンピースを着ての撮影。

一步も譲らない彼に出した交換条件。

それが無理ならば自分は手伝えない、とエアリは断言した。

それからというもののエアリはシアンに対して苦手意識を持っている。いつても嫌悪感を抱いているわけではない。

面倒臭がりながらも後輩の世話をよくしているし、彼を慕う後輩も少なくない。

きっと図に乗るだろうから言わないけれど、仕事をしている時の彼を先輩として尊敬している。

でも真っ正面から真剣に付き合うと疲れてくるのである。

その意志の強さの前に誰もが据^ねじ伏せられてしまう。

自分に嘘を吐かず、誰にも媚を売らず、とても自由な生き方をしている。

エアリはその点に関してだけは羨ましく思った。

「嘘でも『よかったわ』とか言ってくれりゃいいのに。

たまには先輩を立てるよな」

「だって主役はUNISE。

シアンはサポートじゃない？

それに嘘は嫌いでしょう？

…まあ、悪くはなかったわ」

エアリの素っ気ない返事にシアンは微笑んだ。

第三者から見れば仲が悪いように見えることだろう。エアリは彼を適当にあしらひ、シアンは冷たくされているように見せかけて寛大

になつて彼女のすべてを許している。
例えるならば兄と妹のようなものだ。

「漫才が響いてるぞ。」

俺らも仲間に入れてくれよ」

いつやってきたのかわからないくらい、UNISEは突然やつてきた。

予告はしていたから、突然という言い方は正しくないかもしれない。
酒を飲んだのだろうか、少し顔が赤い。

「主役が抜けてきて大丈夫なんですか？」

「スタッフには言つてあるから。」

…女の子は甘いのが好きだよなあ。

見てたら食べたくなつてきた。

俺も食べようかなあ」

シェリハ達を囲うようにUNISEのメンバー達は空いている椅子に座つていく。

禧さいわはスイーツを求めてその場を去つていった。

彼らはアーティストであることを忘れ、今はただの一人の男性に戻つている。

女性のように甘いものを好きな者もいれば、庶民的な料理を好む者がいる。

アーティストと言われる人間も仮面を脱げば、ファンと同じただの人間だ。

普段はイメージを崩さぬようアーティストとして振る舞っているが、家で寛くつろいでいる時や友人の前では平々凡々なのだ。

「エブミアンテはいいよなあ。」

女性ばつかしなあ…俺らなんか男ばつかで、たまには癒されたいなゝつて思つたりな。

なあシェリハ、そう思つたろ？」

「はあ。…女性ばつかりつていうならスタッフとかもいるんじゃない？」
都森はコーラを片手に何故かシェリハに絡んでくる。

肩や腕へのボディタッチにかなりたじたじた。

都森は女子高生を痴漢している中年のサラリーマンのようだ。

シェリハはどうしていいのかわからず、取り敢えず相槌を打っている。

ふたつ返事をしていたら当然のことながら、都森は不機嫌になった。だがシェリハは不平不満を言ってくれるということが少し嬉しかった。

都森らUNISEのメンバーはシアンとは同期で、シェリハやエアリにとっては大先輩だ。

光栄なことに現在仕事で顔を合わせることもある。

仕事を一緒にして感じたことは、シアンにも通ずるものがあつた。

面倒見が良く、個性的な世界観を持っている。

とても積極的で行動力が飛び抜けている。

対等だなんてこれっぽちも思っていないが、たとえそれが愚痴であつたとしても自分に吐露してくれたことが嬉しかった。

シェリハはそんな彼を可愛いとさえ思つた。

37 偶像も溶け込みたい（後書き）

これでディナーの語らいは終了です。

シアンやUNISEのメンバーなど元エプミアンテの社員が出てきていますが、彼らはシェリハよりも先輩です。

年齢とキャリアだけでいえばドーリーやルハルクとあまり変わりません。

彼らは特別扱いされることを嫌っているので、敬語を使わせたりしていませんがシェリハとエアリの会話と比べ、少しよそよそしいものがあります。

エプミアンテでは上下関係はありながらもそこまでは厳しくないのですが、シェリハやエアリはその部分を意識していると思われます。真面目で努力を怠らない二人は彼らからかなり可愛がられています。特にシェリハはまだ二十代ということで、シアンや都森らとは少し歳が離れているので弟のような存在です。

これでライブ編は終了です。

物語の季節はまだ冬なので早く近付けていきたいですね。

会話も弾み、これからがいいところという時に都森のポケットからバイブレーションの音が聞こえてきた。

「はい、ああ…わかった。今から行くよ」

都森ははあ、と溜め息を吐き出して電話を切った。

少しトーンの低い声から察するに、スタッフからの電話だったのだらう。

やはり打ち上げに主役がいなくてはつまらないに違いない。

「主役がいないと退屈してるんだろう」

「元気そうな顔見れてよかったですよ、ルハルクさん。
みんなも来年まで元気だな」

都森はシェリハにウィンクをして、メンバーを連れてスタッフの元へと帰っていった。

UNISEとシアンという嵐が去って、一気に静かになってしまった。

「相変わらずだなあ、あいつらは。」

UNISEも昔はエブミアンテにいたんだ」

「デザイナーだけじゃなくてアーティストもいたんですね」

梨星はケーキを頬張りながら感心している。

専門学校ではジャンル毎に区分けされているので、少し不思議そうな顔をしていた。

会社すべてがこういったものというわけではなく、これはエブミア

ンテ社特有のものである。

エプミアンテ社自体はまだ若い。

人種により差別を受けたドーリーは向上心があるすべての者を受け入れた。

体も精神も悲鳴を上げるほど仕事は過酷だったが、ドーリーやルハルクはとにかく社員思いで優しさに溢れていた。

共に泣き、共に笑い、共に悲しみ、いつもすべてを分かち合っていた。

その結果様々なジャンルの社員が集まったのだ。

「シアンもUNISEもかなり早い段階から活動してたんだ。だから俺たちからしたらかなり先輩ってことになる」

「派手だし若い格好してるから、あんまりわからないけどね」

シエリハとエアリのやりとりを聞いて、目を丸くしていた。

完全武装している時の姿は年相応には見えないだろう。

特にシアンは早くにメイクを覚えたため、自分の長所を最大限に生かすことができる。

化粧の映える肌の白さとシアンの独自の技術があれば、最低でも五歳くらいは若く見せることができる。

「もうそろそろお開きにしますか？」

「そうだな。未成年がいるからそうしようか？」

ルハルクが梨星の顔を見ながらそう言うと、子供扱いされたと気付いたのか頬を膨らませた。

感情を表に出して笑ったり怒ったりする梨星を見て、シエリハは自分が子供だった頃を少し思い出した。

彼女と同じように感情を表に出して、泣いたり笑ったりした幼少時代があった。

感情のままに笑ったり怒ったり、いつからしなくなっただろうか。誕生日がやってくるたびに、感情をコントロールするようになってしまった。

妹が生まれて自分は母と父の子供であると同時に妹の兄となり、我儘や不満を心の奥底に閉じ込めるようになった。

それは愛する父や母、妹に迷惑をかけないためだった。

手のかからない子供になろうと思い努力していたら、現実を冷静に見つめることができる大人になった。

初めて付き合った女性と別れを経験した時、理由と原因を作り物語のように完結させておけば必要以上に傷付くことがないと知った。

次第に言い訳の項目は増えていき、今では保身という言い訳が第一位に輝いている。

傷口が開かれることを恐れ、痛みを避けるのは弱い自分を守るためだ。

きっとドーリーやルハルクがいなければ、会社を辞めていたことだろう。

意志の強い上司や仲間が引っ張ってきてくれたから、こうして今の自分があるのだ。

だから感情に素直な梨星を羨ましく思う。

今からでも戻れるなら、今すぐにでも素直だった頃に戻りたい。

でも長年積み重ね体に染み付いた習性は、すぐには消し去ることはできない。

梨星の温かい心に触れるたび、大人になってしまった自分の嫌な部分が見えてくる。

そして心が洗われたような気持ちになるのだ。

彼女に惹かれた本当の理由はそこにあるのかもしれない。

会計を済ませ店を出ると、シェリハ達は徒歩で駅へ向かった。

バスで駅へ向かおうとしたが、帰りの本数は少なく乗れそうにないということと徒歩で向かうことになった。

ルハルクはタクシーで向かうことを提案したが、エアリと梨星が冷

たい風に当たりたいと言うので、彼女らに合わせることとなった。

「もうお腹いっぱい。」

「すっごく美味しかったあ……」

「良く食べたわね。」

私も久しぶりにガツガツ食べちゃったわ。

味も良かったし、一人でくるのもいいかもね。

梨星が働くようになったら、また食べにいこうね」

エアリは慈愛に満ちた笑みを浮かべながら、梨星の頭を撫でる。

他人同士なので似ていなくて当たり前なのだが、道行く人から見れば姉妹にしか見えないだろう。

エアリは兄弟姉妹がいない、いわゆる一人っ子で父と母の愛を一身に受けて育った。

だが早くに来日し一人暮らしを始めたため、淋しさもあり兄弟姉妹というものに憧れを抱いていた。

シェリハとエアリは同期だが、年齢はエアリの方が年上のため、お姉さん風を吹かせている。

二人は性格は対照的だがデザイナーという共通点もあり、入社して間もなく友人となった。

今では同性の友人以上に仲が良く、シェリハに恋人がいた頃は仲を疑われたほどだ。

エアリにとってシェリハが気の合う弟なら、梨星は目に入れても痛くない妹といったところだろう。

「姉妹みたいだな、エアリと梨星は」

「そういえばエアリは兄弟いないんだっただな」

「ええ。だから梨星を見てると妹みたいで可愛くて」

エアリの言葉に気を良くしたのか、梨星は甘えるようにエアリに凭もた

れかかる。

女同士ならではの猫のような戯れ合いを見ながら、シエリハは内心羨ましいと思いつつも目も細めて笑った。

そんなやり取りをしている間に駅に辿り着いた。

今日はここで解散し、シエリハに梨星を送らせようと考えていたルハルクだったが、さらりと流すように断られてしまった。

「私の家ここから遠いから、タクシーで帰ります。

いつもそうしてるので」

「そうか…大丈夫か？」

「子供じゃないんですから帰るくらいできますよー。…今日はありがとございました！」

すっごく楽しかったです」

梨星はそう言うのと左右に大きく手を振り、別れを惜しんだ。

そしてシエリハらは少し早い年末の挨拶を住ませ、独り寂しく家路へと急いだ。

38 dear trigger (後書き)

今回で正真正銘ライブ編のラストです（諄^とい）。

今回梨星と第三者とのやり取りを見て、シェリハは昔を思い出します。

学校を卒業し成人を過ぎ、大人の汚いところや醜いところを見て、彼は素直ではなくなったと思っています。

ですが、先輩から見たシェリハは素直で真面目で優秀な一人の青年です。

彼は元々意志が強かったり、頑固だったりという性格の持ち主ではありません。

エプミアンテ社の中ではかなり地味な性格の持ち主です。

アメリカ人の父の血を色濃く継承し、派手な容姿に恵まれながらも地味に徹しています。

唯一執着の強さを窺わせるのは、デザインに関してのみ。

仲間や先輩の存在も大きかったですが、これがあつたからこそ、彼はこの会社で生き残ってこれたのだと思います。

大人の嫌な部分を見ながらもその嫌な部分を取り入れ、狡い大人になったシェリハですが梨星を見て、昔に戻りたいと思います。

妹が生まれる前後くらいから彼は子供らしくない子供になろうと心がけてきました。

迷惑を掛けたくないから。

大切な人の手を煩わせたくないから。

そのため甘えた経験が少ないのです。

だから昔のように素直になれたなら、仕事に対する意識だけではなく全てが変わるのではないかと思っています。

シェリハの感情を銃に例えるなら、トリガーは梨星です。

自分にはないものをすべて持っているからこそ、彼女に惹かれてしまふのでしょうか。

草食系（女性陣は恐らく肉食系）で今一つ頼りなくて格好悪い主人公ですが、個人的にはこれくらいが丁度良いかなと思うのです。物語の人物とはいえ、完璧すぎるというのもあまり面白くありませんし。

どこか抜けた部分があるというのが、私が考えるキャラクターの理想です。

39 雪食温話（前書き）

独り身同士、ふたりっきりの食事会です。
そろそろ作品の方も新たな年に入れそうです。

39 雪食温話

真冬が連れてくる風は独り身の心を突き刺すように吹いてくる。ただでさえ人恋しいのに、冬ならではの気温が淋しさを募らせる。明かりの灯った街は賑わい、人々の顔は笑顔一色に染められている。少しだけ羨ましく、少しだけ懐かしい。

去年の今頃はシェリハの隣には恋人がいて、彼は幸せを噛み締めていたのだ。

恋人が恋しいというわけじゃないが、淋しいと思ってしまう時がある。

確かに一人でいるのは気楽で自由で楽しい。でも友人や恋人と過ごしている時間には適わない。結局は一人でいるのが淋しいのだろうか。

(…淋しいから誰かといいたいただけ？
それなら俺は…成長してない只の子供だ)

ブラウン管に映ったイルミネーションを見ながら、自分自身を嘲った。

その時静寂を破るようにバイブレーションの音が聞こえてきた。床の上に無造作に置かれた携帯のサブディスプレイが光っている。

「休みなのに悪い！今時間大丈夫か？」

「俺のことなら気にしないでくれ。」

「一体どうしたんだ？」

電話を取ると聞き慣れた声が聞こえた。

都森よりも少し低音の擦れたような声。

インパクトはないが嫌悪感を感じる音ではない。

先日会ったばかりのシアンである。

「いやあ、今仕事終わったとこなんだけどな。都合悪くないならどうかなと思ってかけたんだ」

主語を省くのはシアンの悪い癖だ。

食事の誘いと見せ掛けて、きっと仕事の話を交えるつもりだろう。頼まれたら断れないシェリハの人の好い性格を分かつての戦略だ。

「わかったよ。どこに行けばいい？」

「そうだな…俺今駅前にいるんだよ。」

バス停の近くにしようか。

姿見えなかつたら電話入れてくれたらいいしな」

「了解。支度したらすぐ出るよ」

シェリハは簡潔に述べると電話を切った。

シアンの誘いを断ろうと思えば断れたが、シェリハに断る理由はなかった。

年末の休みを一緒に過ごす相手がいるわけでもないし、別に独りで過ごしたいわけでもない。

それに誘ってくれた理由を考えたら、簡単に断れないと思ったのだ。恐らくシェリハが独り身であることを風の噂で知っているから、気晴らしにと誘ってくれたに違いない。

シアンは自分に恋人がいようといまいと男女問わず先輩や後輩を第一に考え、恋人に誤解を与えてしまうようなことばかりしている。

仕事に行き詰まったり恋に破れたりすることがあれば、家に呼んで泊まらせたり昼夜問わず遊びに行ったりする。

当然恋人である女性は烈火のごとく憤る。いきどお

そしてシアンの彼女と遭遇した先輩や後輩は修羅場を経験することになるのだ。

勿論シェリハも経験している。

シアンの彼女にいきなり打たれた時はなぜ打たなければいけないという怒りよりも、頭が真っ白になってしまい今何が起きているのかわからないほどに混乱してしまった。

修羅場にはもう遭遇したくないので、シアンに特定の恋人がいる時は彼の誘いに乗らないようにしていた。

だが今は互いにフリーの身だ。

余計な気遣いをする必要もない。

（早く行かないと待たせることになるな。
さっさと出よう）

ベージュのUネックカットソーとブラックのVネックカーディガンに、ブラックのスキニーパンツを合わせる。

そしてショート丈のPコートを羽織り家を出た。

バス停付近に辿り着くとシェリハの予想通りシアンが待っていた。赤のトラッドチェックのジャケット。

胸元にスラッシュ加工を施したネイビーのパーカー。ブラックのサルエルパンツ。

スツと綺麗に引かれたブラックのアイライン。

同系色のアイシャドウで彩られた瞼。

縦皺と艶をコンシーラーで消したマットな唇。

鮮やかな色が映えそうな白い肌。

とても同じ男とは思えない。

シェリハが惚けるように見入っていたらシアンは眉を顰めた。

「おい、見せ物じゃねえぞ。
もん

腹減ったし食べに行こうぜ。

あ、そういえば勝手に店予約したけど、和食嫌いじゃなかったか？」

「嫌いなのは特にないから大丈夫だよ」

さらりと自然に言うシアンにシェリハは驚きを隠せなかった。いきなり誘った友人と食事をするためだけに、店を予約するとは何とも彼らしい。

年末に予約なしにそれなりの店で食事することは難しい。無計画に店を渡り歩いた挙げ句、食事をするできないなんて侘しすぎる。

きつと意図的に突然誘ってくれたのだろう。

「さ、着いた着いた。んじゃ入るか。

ここたまーに一人で来るんだよ。

広くて落ち着けるしな」

シアンに案内されてやってくると、目の前にスカーレットにホワイトのドットが描かれた屋根が印象的な一軒家が目に入った。

シアンは暖簾に突っ込むように入口である引き戸へと向かっていった。

「あら、シアンじゃないの。

今日はお連れの方がいるんだったわね。

さ、どうぞ」

黒髪を天高くひとつに束ねた婦人がシェリハ達を出迎えた。

白い蝶が舞った紺色の着物は地味な印象を与えるが、年を重ねたからこそ出すことができる色香が滲み出していた。

婦人に通された部屋は和室に障子や掛け軸があつたりと和のテイストで統一されていた。

まるで故郷の家に帰ってきたような温かさがある。

運ばれてくる料理も母親を思わせるものばかりだった。

栗の入ったかやくご飯。

具沢山の白い味噌汁。

薬味を散らした冷奴。

その他にも目移りしてしまうほどの様々な郷土料理が並ぶ。

「今日は急に誘って悪かったな。

お前の都合も考えないで」

「いや誘われなかったら家に籠もってただろうし。

なんか用事あったんだよね？」

シエリハはそう尋ねるとシアンの目をちらりと見た。兄貴分が聞きたいことなど容易に想像できる。

可愛い弟分の恋愛事情か仕事の話くらいだろう。

その時の彼の目は怪しく光っていた。

まるで何かを企んでいるように。

39 雪食温話（後書き）

今回のふたりっきりの食事会ですが、実は女子禁制の男司会の予定でした。

ですが、メンバー調整が難しいかな？と思って急遽ボツにしました。今回シアンは突然シェリハを誘っていますが、店を予約したりとかなり計画的。

どうやら断られる事は考えていなかった様子。

これにはちゃんとした理由がありました。

恋人と別れて間もないシェリハを元気づけるためです。

元々シェリハは他人を頼ったり、甘えたりする事をしません。

そして自分の中にひきこもりがちの性質です。

それをわかつているから、シアンは強引に誘うという手にでます。

断らないことも彼の中では想定内。

シェリハのことはすべてお見通しなのです。

今回はそんな二人の絡みがメインのお話になります。

40 螺旋の煩惱

何か用事があったのか。

そんなことを訊くのも少し白々しいとシェリハは思ったが、彼の口から直接答えが聞きたかった。

シアンがビールジョッキから口を離すのを待ち、シェリハはじつと彼を見つめていた。

「んなもん俺らに必要か？ 昨日今日知り合ったわけじゃあるまいし。」

あ、用事入ってたら誘わないけどな」

「まあそうだけど……」

「そんなことは置いといて、お前を誘ったのは別に大した理由はないんだけどな。」

ただ……前の彼女のことがあったから心配でな。

余計なお世話かもしれないけど」

シェリハの目を直視しないものの、彼の言葉は慈愛に満ちていた。以前付き合っていた恋人と別れた際、シェリハの方から別れを切り出した責任からか、彼にはどこか暗い雰囲気漂っていた。

表面上は明るく振る舞っていたが、独りになると生気をなくしたような表情をしていた。

だが間もなく風の噂でシェリハに気になる女性がいることを耳にした。

相手は専門学校に通っている学生・梨星だ。

少し年は離れているが、クリエイター同士きつと話も合うだろう。

シアンはシェリハのこの恋が実ればいいな、と思った。

彼には精神的な支えが必要だ。

優しいだけではなく、叱咤してくれる懐の深い恋人という存在が。

「もう終わったことだし、別れたばかりの頃ほどは気にしてない。ずるずる引き摺ってるほど弱くはないよ」

「だよな。引き摺ってたら好きな子なんていないはずだもんな」

悪戯そうな笑みを浮かべるシアンの言葉に、シェリハは頬を染めた。アルコールのせいで顔が赤いんだ、とシェリハは苦しい言い訳をした。

確かに心は少年のように動いている。

彼女と一緒にいるとまた会いたい、もつと笑顔が見たいと思う。

でも彼女は学生で未成年だ。

そして10も年が離れている。

それに恋人がいるか定かではない女性にストレートなアプローチはできない。

「何言ってるんだよ、シェリハ。」

彼氏いようが結婚してようが関係ねえだろ。

…少なくとも俺はな」

「俺はシアンみたいに修羅場なんて味わいたくないんだ。

…というかそれ以前に恋かどうかもわからないし」

真顔で言い放ったシェリハを見て、シアンは大笑いした。

いい年をした大人が恋愛の分別に頭を悩ませるなんておかしい話だ。今時中高生でも真似事だとしてもちゃんとやっている。

シェリハが抱いている感情こそ恋そのものではないか。

シェリハは恋をするのに億劫になっているのだ。

また前のようになってしまうのでは、と密かに思っているから前向きになれないのだろう。

きっと本人は認めないだろう。

だがシアンには逃げているようにしか映らなかった。

逃げていても事態は変わらない。

成長もなく年を重ねることは無意味だ。

老いたのならば成長しなくてはならない。

「お前の中に今ある感情が恋以外だって言うなら、それはなんなんだ？」

「…なんなんだろう？」

俺は今までどうやって恋愛してたんだろう？

そう言われれば俺って自分からっていうのはんまりなかったかもな。いつも流されてばかりで…流されるのはもう嫌だな」

シアンに問い詰められて無意識に出た言葉は梨星に恋していることを指していた。

シェリハは良くも悪くも優しくて、いつも気の強い女性に流されてしまう。

その場の雰囲気の流れされて付き合っても、結局は長くは続かなかった。

シェリハは自分を器用に見せようとしているが、本当の姿は不器用だ。

恋と仕事を両立させようと努力しても、結局は仕事を優先させてしまう。

彼がもしデザインの仕事をしていなければ、こんなことにはならなかっただろう。

仕事といっても彼にとっては生活を送るための手段であり、趣味の一部だ。

そしてその趣味の一部は彼にとってすべてだ。

もちろん恋人には前もって告知していた。

自分は仕事も大事だから、会う機会は減ることになるだろう、と。かつての恋人達は皆笑って頷いた。

その時はシェリハのことをストイックで素敵だ、と思っていた恋人

達は豹変する。

仕事を優先する彼に不平不満をぶちまけ、怒りを露わにする。

シェリハに勝手な夢と理想を求めていた女性達。

現実甘いものではなく、思い描いていたものとは違っていた。

シェリハは恋人に癒しを求め、恋人達はシェリハに甘い関係を求めた。

似たりよつたりな欲望を求め、結び付いた二人がうまくいくことなど有り得ない。

この関係をよくしようと努力したのは一人だけだったからだ。

『だから言っただろ？ 会う時間は少なくなるって。

それでもいいって言ってくれたのは、誰でもない君だった。

そんな君の言葉を信じた俺も馬鹿だったんだ』

無表情で言い放つシェリハの言葉は冷たく、彼女達の理性を奪った。怒りに支配され、コントロールできなくなった彼女達はシェリハの頬を打って去っていった。

当然と言えば当然だ。

謝罪の一言くらい頂きたいというのが本音なのだろうが、責められる覚えはない。

シェリハは礼を言った事はあったが、謝罪したことはなかった。

謝らなければいけないのは自分に非があった時だけだ。

自分は悪いことなど何もしていない。

寧ろ被害者側であることを主張したい。

近付いてきては離れ、犯罪者と言わんばかりに責めたててくる。

自分自身の全てを理解してくれとまでは言わないが、理解しようと歩み寄ってほしかった。

それがたとえ嘘であつたとしても。

それ以来女性との交際が面倒に感じるようになってしまった。

年齢的にそろそろ結婚を考える年だが、苦い経験が壁となって立ち

はだかつている。

人や物に対する価値観や接し方。

彼女の持つすべては自分とは逆の性質のものばかりだった。

明るい未来があることを信じ、迷うことなく一人で駆けていく。

梨星といると今まで感じたことのない、温かい気持ちになる。

まるで彼女の絵を見た時のように。

「お前かなり重症だな。

仕事ばかり相手にしすぎて、螺子^{ねじ}何本か外れてんじゃねえの？

これからは自分の為に生きろよ。

ま、彼女もクリエイターの部類に入るから、一筋縄じゃいかねけだろうけどな」

「それは俺だつてそうだ。頑固なのは自覚してるし。

はあ…もう頭がパンクしそうだ」

シエリハは額を左手で覆いながら、右手でジョッキを持ちビールを流し込んだ。

酔っ払っているのだろうか、少し体が熱い。

いつも内に閉じ込めていた言葉がどんどん出てくる。

酒の力を借りなくても素直になればいいのに、と思う。

そうすれば苦しい思いも辛い思いもしなくていいのに。

心の中ではわかっていても、誰かを捌け口の対象にすることなどできない。

こうやって酒の力を借りたりしなければ、相談すらも出来ないくらいなのだから。

普段は意識していないが、人を頼ったり助けを求めたりということはあるだけしたくない。

シエリハは良くも悪くも自立している男なのだ。

「年明けたらデートに誘えよ。

仕事忙しいとかって言い訳にすんなよ。

連絡してこなかったらこっちからするからな」

「わかってるよ。ああ、もうどうしようもないな」

シエリハはシアンの言葉を聞いて苦笑いした。

この男には永遠に敵わない。

面倒見がよくて、見習うべき点が多々ある。

そう感じているのはきつと自分だけではないはずだ。

「そういえばシアンはどうなんだ？

誰かいないのか？」

「今はないな。恋愛ってわけじゃないけど、口説^こいてる娘はいるけど」

シアンの意味深な発言にシエリハは食いついた。

彼女はゼロリスト社で働いている事務員・町前アズ。

かつてはシアンと同じくアーティストだったという。

だがメンバー間で何らかの問題があり、現在は引退してしまったらしい。

仕事の関係でゼロリスト社を訪れた時、初めて彼女に出会った。

ビー玉のように透き通った美しい声が、シアンの心を奪った。

こんな場所で埋もれさせるのは勿体無い、とシアンは彼女を誘った。もう一度歌を歌ってみないか、と。

『申し訳ないけど歌はもうやめたの。』

今はゼロリストの事務員よ』

『何でやめたんだ？綺麗な声なのに。』

同じ声だったからすぐにわかったよ。

少し低くはなっただけ…本質は変わらないな』

『今の私にはどうでもいいことだわ。』

歌うことなんて……」

断られても何度もゼロリスト社に足を運び、話を持ちかけた。

勿論答えはノーだった。

シアンのアマリの諄^とさにアズは態度を変えた。

おとなしく丁寧だった口調が荒々しくなり、悪態をつくようになった。

何度も断られてもシアンは諦めていない。

あの声を世界中に流してやりたい。

本当は自分が聴きたいというエゴなのだが、一アーティストとしてあの美しい歌声を使わないのは勿体無い事この上ない。

自分に備わっていないものを彼女は持つていて、それを捨てようとしているからシアンは気に入らないのだ。

技術を磨くことはできるが、美しい歌声は作ることができない。

だからこそ彼女に歌を歌ってもらいたい、とシアンは思っている。

「でも歌をやめて、何でデザイン事務所の事務員になったんだ？」

「それは知らないな。恐らく音楽業界が嫌になって、普通の仕事をしたくなっただのかもな」

相槌を打ちながら、シェリハは酒を口にする。

（あれ？ 何だか目が重い…気のせいかな？）

少し酒を飲みすぎたのだろうか。

集中していなければ今にも目を閉じてしまいそうだ。

「シェリハ」

シアンの声がどんどん小さくなっていく。

次第に瞼は閉じてしまい、シェリハは眠りに落ちてしまった。

風邪を引かせてはいけないと思い、シェリハが着ていたコートを肩からかけてやり、シアンは独酌を始めた。

酒がなくなれば店員を呼びつけ、浴びるように酒を飲む。

止めてくれる人間がいないので、ついつい飲みすぎてしまうのだ。

そろそろ泥酔してもおかしくないだろう。

体温は確実に上がっているのに、意識の方はしっかりしていて酔いが回っている様子はない。

シェリハが眠っているからだろうか。

「何でお前は自分の幸せを優先しないんだ？

いつもいつも…他人を幸せにするのはもうやめてくれ。

彼女だってお前を気に入ってるに決まってる。

そうだろう？シェリハ……………」

シアンはシェリハの寝顔を見ながら呟いた。

シェリハの寝顔はシアンに答えを返しているかのような、笑っているような表情だった。

40 螺旋の煩惱（後書き）

話の中ではそろそろ年末が終わりそうな感じですね。

現実ではまだ秋ですが（苦笑）。

今回は男性二人の恋愛観のお話でした。

慎重型のシェリハと突進型のシアン。

彼らは面白いほどに正反対です。

シェリハがシアンのような性格なら話ももっとスムーズに進むのですが。

今回はシェリハとシアンの仕事がメインの話になる予定です。

41 思索してもどうにもならないのはわかっているけど

パステルブルーのカーテンの隙間から光が洩れ、シェリハは目を覚ました。

昨夜シアンと酒を飲んでからの記憶は一切ない。
もちろんのこと帰宅した覚えはない。

（自分の家じゃないな…ということはシアンの家か？）

それに置かれている家具や部屋の雰囲気ymarで違う。

人が寝泊りしている部屋には人の匂いというものがあるものだ。
だがこの部屋にはそれがない。

人の温度の匂いが全くないのだ。

きっとこの部屋はシアンが毎日就寝している部屋ではなく、あまり使われない客人専用の部屋なのだろう。

（ん？ どこかで水の音がする）

水が床を打ちつける音が聞こえてきた。

シアンがシャワーでも浴びているのだろうか。
次第に音は弱まり、ゆっくりと消えていった。

他人の家でずっと寝ているわけにもいかなないので、シェリハは起き上がりシーツや枕を整え、ベッドから出た。

客人専用の部屋のドアを開けると廊下が広がっていた。
色はライトブラウンで落ち着いた印象を受ける。

どこに何の部屋があるのかわからずキョロキョロしていると、シェンナのバスローブを羽織った男性がいた。

バスローブの下は何も着ていないのか、白い素肌を晒している。

その下にはホワイトとブラックのストライプのサルエルパンツを穿

いているが、足は素足のままだ。

「おはよう、腹減っただろ？」

俺も腹減ったし何か食べるか」

「ああ、昨日わざわざ運んでくれたんだな。

俺、知らない間に酔い潰れてたみたいで」

「気にすんなよ。家送るにも服の中漁ってまで鍵探す気になれなかったただけだしな」

シアンはそう言うとしり廊下を歩いて、シェリハを居間に連れてきた。

ベージュのワッフルカーテン。

ガラスにドライフラワーを貼り付けたガラステーブル。

チャコールグレーのコーナーソファ。

インテリアにはあまりこだわりがないのか、使わないであろう物は一切置いていない。

居間というだけあって人と交流するためだけの空間をわざと作っているのかもしれない。

「シアンにしては地味だな」

「居間だからな。憩いの場に派手なものはいらない。

会話と食事を楽しむための部屋だからな。

じゃ着替えてくるから寛いでてくれよ」

シアンはそう言うとしり居間にシェリハを残して去っていった。

独身の男性が一人で住むにはこの家は広すぎる。

居間に客室、そして自分の部屋。

この家の間取りや部屋数は把握していないが、既に三部屋もある。

自分はワンルームで生活しているのに、彼はこんなにも広い家に住んでいる。

彼の方がキャリアが長いのだから当然の事なのだが、その歴然の差に驚きを隠さずにはられない。

「待たせたな。たいしたもん出せなくて悪いけど」

シェリハが呆けていると、チャコールグレーのドルマン袖のプルオーバーに着替えたシアンがトレーを手に戻ってきた。

トレーの中には皿とコップが乗せられていた。

マーガリンを乗せたトースト。

ハムの上にウィンナーとスクランブルエッグを乗せ、それらを囲むように色とりどりのサラダが配置されている。

コップの中にはオレンジジュースらしきものが入っている。

シェリハはシアンが出来合いのものばかり食べていると聞いていたので、まさか彼自らの手を使って作った朝食が出るとは思っていなかった。

「ありがとう。シアン料理できるんだな」

「焼いて切ってかきませただけだ。」

客が来てる時までインスタントはまずいだろ？

一人の時はスーパールの惣菜とかコンビ二弁当ですませてるけどな」

シアンはそう言ってシェリハにフォークとナイフを手渡した。

フォークとナイフはシルバー製で取っ手には王冠が刻まれている。

道具のひとつひとつに彼のこだわりを感じる。

コンビ二弁当や惣菜の世話になっているからだろつか、料理の味付けは少し濃かった。

だが彼がわざわざ作ってくれという事実が味に旨味を持たせていた。

「…そういえば仕事の方はどうだ？ 順調か？」

いつの間にか朝食を平らげてしまったシアンがふと吐いた台詞はどこか不自然に聞こえた。

後輩がどんな仕事をしているのかが気になるというのも本音に違いないだろう。

だがその言葉の裏を探れば、仕事の話を持ちかけられるとシェリハは予測していた。

現在シェリハが単独で抱えている仕事は一件のみ。

それも急ぎの仕事ではなく、割とゆっくりペースの仕事だ。

嘘を作る理由もないので正直に答える選択肢しかない。

「順調といえば順調かな。特にこれといったこともないけど。

シアンはどうだ？」

「当分はレコーディングがメインの生活になりそうだな。

ツアーも考えてるけどまだ構想の段階だし、予定は未定って所だな。でも次のライブは以前とは違うものにするつもりなんだ」

少年のように無邪気な表情で語り、シアンは続けて言う。

いつもならポップを除いた色んなジャンルの楽曲を演奏しているが、次のライブではハードナンバーしか演奏しないという。

彼が作る楽曲は一曲一曲がかなりハードで、立て続けに演奏するということは体力的に負担を掛けることになる。

シアン本人は歌うことはなく演奏に徹しているといっても、アンコールまで体力が持つのが気になるところだ。

「それは無理に近くないか？ ハードナンバーしか演奏しないなんて…。

それが演奏時間の短い曲から演奏して、身体を徐々に慣らすとか…。後はMC増やすしかないんじゃないか？」

「今までやったことないからな、やってみないことにはわかんねえな。」

MC増やしても息切れして何話してんの川かんねえだろうけどな、
ははははっ」

シアンは大笑いしているが、当日になって笑えなくなるのはシアンである。

シアンのことだから舞台を台無しにしないよう、精一杯努力をすることだろう。

シアンの音楽を聴く為にわざわざ足を運んでくれる観客の為だ。

そのために完璧なステージを作り上げたいと思い描き、理想のステージを作り上げる。

「都合がつかならまたお前の力を借りたいんだ、シェリハ」

「俺でいいならいつでも手伝うよ。」

でも…たまにはデザイナーを変えてみるのはどうだろう？

ほら、最近俺とばかりだろう？」

先程大笑いしていた時とは一変して、シェリハを見るシアンの目は真剣そのものだった。

シアンは仕事に一切の妥協をせず、テーマやコンセプトに一貫性があり多少のズレも許さないことで有名だ。

その気難しさから彼に応えられるデザイナーは多くはない。

その中でもシェリハはシアンをよく知り理解し、その上で彼が望む仕事をしてくれる数少ないデザイナーだ。

シェリハにとってこの世に存在するすべてのものが興味の対象になるので、特に苦手としているジャンルは無い。

型を持たないというのが彼のアイデアの特徴で、まるで別々の他人が提案したかのようなアイデアはクライアントにとって新鮮そのものだ。

シェリハの地味な性格からは想像できない仕事ぶりは、世辞抜きにして見る者を驚嘆させるものがある。

社外でも『エプミアンテのマルフリーフェ』といえばそれなりに名が知られており、ライバル視しているデザイナーは多い。

クライアントの希望に限りなく近いものを提供することに拘り、決して信頼を裏切らない。

だからこそシアンはシェリハを選んでしまうのだ。

彼以上の人材など今は考えられない。

「誰かいいクリエイターがいるのか？」

「いやいないけど…そうだなあ…経験のない新人とやるのも手かもな」

シェリハと肩を並べられるデザイナーが存在するとは正直思えない。だが経験のないクリエイターは頭が柔らかく、何も知らないからこそ常識破りのことを考えることがある。

それに賭けるとすれば新人と仕事をさせるのもいいかもしれない。但しシアンが満足するかはわからないが。

でも残念なことにシアンにデザイナーを紹介することはできない。

シェリハが知っている新人のデザイナーがいないからだ。

シェリハが仕事を共にするのは年上の者ばかりだ。

しかも大抵は一度は仕事を共にした顔見知りの者ばかりなので、シアンのように交友関係が広がらない。

エプミアンテの新米社員はすぐ辞めてしまうので、紹介することができないのである。

「新人な。若いのはいいが骨のある奴がいいな。仕事を投げ出すような奴は困る」

「俺の知り合いじゃシアンに紹介できるようなのはいないな。」

取り敢えずは延期つてことにしとくけど、空きが出るようなら声をかけてくれ。

その時は力になるよ」

シェリハを越えるデザイナーが現れなければ、恐らくシェリハに声がかかるだろう。

わかっていたが敢えて言わなかった。

話が弾んできたところで時計の針が12を指した。

そろそろ帰らなければ…と思いながらも結局夕食までご馳走になってしまったのだった。

41 思索してもどうにもならないのはわかっているけど（後書き）

シアンの音楽のジャンルはハードロックに分類されますが、私の趣味全開で申し訳ありません。

一時はハードロックを「うるさいだけ」と敬遠していた時がありましたが、今では嘘のようです。

私的な話はさておき、もうすぐで念願の年明けです！（ハートナイフの中で）

本当に長かった…。

年明けの話の前に梨星の心の揺れ動きの話を描きたいので、それからになりますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897f/>

ハートナイフ

2011年10月12日02時02分発行